

は些くもこの世に、自分より以上の苦痛を、味はつてゐるものゝある事を意識して、快く思つた。その中に猶太人の喘ぐやうな呻聲が次第に細つていつた。シャヴランは、暗い地上に倒れてゐる猶太人の半死の姿を見ると、

「既うそれで十分だ。殺す必要はないのだから。」と聲をかけた。

兵卒は手を止めて、皮帯を腰に巻くと、シャヴランは老人を路傍に蹴轉がして、

「そこへ抛つておけ。お前達は先に立つて、馬車のある個所へ案内をしる。」と云ひ渡してから、マグレットの側へ歩み寄つて彼女の蒼褪めた顔を見下した。意識を回復した彼女は、慘酷な仕置を受けてゐる不幸な猶太人を見て、憐憫と、恐怖に、戦慄してゐた。その様を見て、シャヴランは口許に異様な微笑を浮べた。彼はわざとらしく慇懃にマグレットの前に跪き、彼女の手に冷い接吻をして、「奥様、誠に遺憾ながら、止むを得ない事情が御座いまして、奥様を暫時こゝにお残り申さねばなりません。然し、私は決して奥様を保護者なしに唯一人御置き申すやうな事は致しません。こゝに居りますベベンチャミンと云ふ猶太人が、御側に残つて、奥様を御守り申す事で御座いませう。唯今は御覽の通りの状態で御座いますが、おつつけ息を吹き返して、御用を勤める事と存じます。」と云つた。

マグレットは僅に顔を背向けたのみで、一言も言葉を發する氣力がなかつた。烈しい苦惱に、彼女の胸は碎ける許りであつた。彼女の意識が明確になるにつれて、先づ心に浮んで來たのは、「パーシ卿はどうしたであらう。」「アルモンドはどうなつたであらう。」といふ二つの疑問であつた。

マグレットは死刑の合圖のやうな後の出來事は、何一つ知らなかつた。

シャヴランは遠慮なく自分の云ひたいだけの事を云ひ續けた。

「では残念ながらこれで失禮致します。近いうちに又倫敦で御目にかゝりたいもので御座います。プリンス・オブ・ウェールズの園遊會でも、御目にかゝれますかも知れません。左様なら、奥様。」
シャヴランは再び彼女の指先に禮儀正しく接吻をして、道案内の兵卒の後について、藪蔭の暗い小徑へ入つて了つた。

三十一、勝利

次第に遠退いてゆく、シャヴラン一行の惶しい聲音を、マグレットは夢幻に聞いてゐた。彼等は崖に沿うた小徑を過ぎると、瘦馬に馬車を牽せて、森羅萬象の靜まり返つた四圍に、車輪の音を響かせながら、カレシー市に向つた。マグレットは地上に倒れたまゝ、呆乎と、月の輝く空を視凝めながら、寄せては返す波音をきいてゐた。海から吹つける磯臭い鹽風は、疲れ果てた彼女に取つて、清涼劑のやうに心地よく感ぜられた。

今の瞬間には、パーシー卿が革命黨員に捕縛されてゐるかも知れない。或はパーシー卿だけは自分だけは自分の叫聲に氣づいて、敵の毒手をまぬがれたかも知れない。彼女の腦裡には、様々な怖い光景が旋風のやうに渦巻いてゐたが、極度の疲勞に、最早何事も考へる餘地はなかつた。

唯この儘永久に、この靜かな大空の下に身を横たへて、心ゆくまで休息したかつた。シャヴランを乗せた馬車の軌る音も、いつか遠くに消えて了つた。天地は全く靜寂の中に沈んでゐた。マグリットは夢心地で、岸に寄せる波の眠り唄をきいてゐたが、不意にどこからともなく、「やれく。」といふ英語が、彼女の耳に達した。彼女は半信半疑で、身體を半起したまゝ、その不思議な地上の聲に耳を傾けたが、四邊は再び以前の沈黙に返つて了つた。

彼女は恍惚として、月光に輝く海を凝視しながら、耳を澄してゐると、今度は前よりも更に明瞭と、「やれく、飛んでもない目に會つた。まるで鼠のやうに弱つて了つた。」といふ英語が聞えた。それは紛れもないパーシー卿の聲ではないか。マグリットは目を大きく睜つて周囲を見廻した。

「もうちつと手加減して打つてくれたら、よささうなものに。」

マグリットは夢から醒めたやうに飛び起き、弱い足を踏みしめて立上つた。そして熱心に懐しい聲の主を探し求めた。眼前に横はつてゐる海邊の岩陰か、或は削立つた斷崖か、又は黒い輪廓のみを浮き上らせてゐる小屋の中の、何處かに姿を隠してゐるに違ひないが彼女はどうしても人間の姿を見出す事が出来なかつたので、

「パーシー、パーシー、何處にいらつしやるのです。私はこゝに居りますから、早く来て下さい。」と狂氣のやうに叫んだ。

「奥様の御召しは有難いが！あの蛙食人種に、まるで家鴨のやうに縛り上げられて了つたのでんで這ふ事も出来んよ。おまけに鼠のやうに叩きのめされて、いや早、途方もなく偉い目に會つたものだ——」パーシー卿の睡さうな聲が、何處からともなく答へた。然し姿はてんで見當らない。彼女の周囲には、醜い猶太人の外には動いてゐるものゝ姿は一つも見えなかつた。而もパーシー卿の聲は、彼女から數間と隔たぬ間近に聞えてゐる。彼女は夢を見てゐるのではあるまいか。見ると哀れな猶太人は兩手を堅く縛り上げられて、岩によりかゝつたまゝ、しきりに立ち上らうとして腕いてゐた。マグリットは急いで側へ走りよつて彼を助け起さうとして、ふと空色の好人物らしい瞳を見出すと、狂氣のやうに。

「ミア……パーシー……貴郎でしたの……嬉しい……」ときれくに叫んだ。

「さうさ、私さ。ミア、どうか此繩を解いて下さい。どうも誠にお恥しい次第です。」パーシー卿は相變らずおどけた調子で云つた。

マグリットは寒氣に指先が麻痺してゐて使へないので、美しい齒で荒繩を喰ひ切つた。パーシー卿は繩がゆるむと身體を揺りながら、

「英國紳士たるものが、外國人にあれ程打ちのめされながら、手向ひ一つしないなんて、全く開關以來例のない事でせうな。」と呑氣な口をきいたが、いよく束縛が取れると、急に烈しい疲勞に、がくりと倒れて了つた。マグリットは周囲を見まはして、

「こんな海邊では一滴の水も御座いませぬわ。」と悲しさうに云つた、それをきくと、パーシー卿は

微笑しながら、

「いゝえ、水よりも寧ろ佛蘭西産の上等のブランデーを一杯頂いた方がいゝと思ひます。恐れ入りませんが、私の此穢い着物の懷囊を見て下さい。小瓶が入つてゐる筈です。」と云つた。そして彼は瓶の口から一口呑むと、マグリットにもすゝめて、

「あゝ、これですつかり気分がよくなつた。然しこの頬髯の延びた事、どうです。二十時間以上も剃刀をあてないのですから。こんな熊みたいな顔をし、貴婦人の前に出るのは、甚だ失禮ですが、どうも致し方ありません。おまけにこの凄じい赤毛が顔に垂れ下つてゐては、とても見られたものでは御座いますまい。」

パーシー卿はさう云ひながら、俄然頭に被つてゐた髪を剃取つて、地上に投げつけると、縮めてゐた手足を長々と延した。そして俯向いてゐるマグリットの顔を覗き込んだ。彼女は顔を赧らめて、「パーシー、貴郎は私がどんなに後悔してゐるか、御解りになりました。」と囁くやうに云つた。

「もうそんな事は氣にかけなくても宜しいでせう。過ぎた事はお互に忘れろとしませう。私は貴女の眞實の心持を知つて嬉しく思つて居ります。」

「では貴郎は何もかも御存じなので御座いますか。……私の致しました事を……。」

「みんな知つてゐますとも、けれども若も私が貴女の眞實の心を知つてゐたら、初めから匿し立てなどはするのではなかつたのです。兎に角、貴女が私の爲にこの數時間、恐ろしい經驗をして下さつ

ただで充分です。」

「それでは凡てを許して下さいますか。」

「許すも、許さないも、ありません。お互にこれだけ理解し合つたら、最早許すなどいふ言葉を用ひる必要がありません。」と云つてパーシーは、マグリットの額に熱い唇をつけた。

「まるで盲目が、跛の手引をするやうな事になつて了りましたね。然し貴女のその小さな足と、私のこの肩と執ちが餘計に痛んでゐるでせうかね。」といひながら、パーシー卿は身を踏めて靴下の破目から覗いてゐる、彼女の白い指先に接吻をした。マグリットはこの歡喜の中に、不圖、アルモンドの恐ろしい最後を思ひ浮べて、

「アルモンド! ……」といひかけると、

「アルモンドの事は心配なさるな。私は生命を賭して救ひ出すと、貴女にお約束をしたではありませんか。今頃タアネエ伯爵の一行は『晝の夢』に乗つて、久振りに枕を高くして寝てゐるでせう。」と優しく云つた。

「えッ? アルモンドは無事なので御座いますか。」

「さうですとも、雑作ない仕事でしたよ。あのシャヴァランといふ男が、蛭のやうに私に吸付かうとしてゐるので、どうかして撒いて了はうとしたのですが、どうしてもいけなかつたから、一層の事一層に歩く事にして了つたのですよ。私はどうかして、アルモンド達のそばへ行きたいと思つてゐたので

すけれども、鼠一匹ぬけられぬ程嚴重に見張つてゐるので一つはシャヴランの計畫の裏をかいてやる積りで、苦心して一緒に歩いてゐた譯です。それで先づ私は、ルウベンと云ふ猶太人に金貨をつかませて、この穢い服装をつくり、奴のポロ馬車を借りて來たのです。無論慾深のルウベンは、約束通り喜んで今晩中は何處か人目に觸れないやうな個所に、匿れてゐるでせうよ。」

パーシー卿の物語を聞いてゐたマグリットは、シャヴランの鼻先で、悠々と仕事をした卿の手際に幾度も感歎の吐息を漏した。

「でも、若もシャヴランに正體を看破られたら、どうなさる御積りでしたの。貴郎の變装も御上手ですが、シャヴランの目も、中々鋭うございますから。」

「無論看破られたら、終極ですさ。けれどもあの場合、其位の危険は覺悟でした。然し私は佛蘭西人の氣象をよく吞込んでゐますから、猶太人に化けてゐるのが一番安全だと思つたのです。如何にシャヴンでも、猶太人の偽者だけは、看破る事は出来ませんよ。何故かといへば、佛蘭西人が猶太人を嫌ふのは一通りではありませんから、私がこんな風をしてゐると誰でも二尺と側へ寄付きませんよ。」

「それからどうなすつたの？」マグリットは熱心に訊ねた。

「それから先は萬事運を天に任せたのです。然しシャヴランが部下に命令を下してゐるのをきいた時、私はいよゝ運命と戦ふ決心をしたのです。つまり私はシャヴランの部下の盲目的な服従を利用した譯です。デスガアが私を小屋のすぐ後の塵埃の中に轉がして置きましたが、毫餘した猶太人など

に誰も目も付ける者のないのを幸ひ、私は苦心して繩をゆるめ、やつと片手だけを自由にして了つたのです。私はどんな場合にも、必ず鉛筆と紙の用意をして置きますから、直に必要な指圖を書き認めて、それと共に一枚の偽書類を作つて、それを後にわざと落してゆくやうに命令して置いたのです。そして私は隙を見て小屋に忍び寄つて、その書付を小屋の中の人々に渡したのですが側に立つてゐた監視の兵卒は、シャヴランの命令に従つて、脊の高い英國人が姿を表すまで、絶対に身動きもしないでゐました。アルモンドの一行は、私の命令を守つて、一人づつ小屋から拔出して無事に『晝の夢』に乗つて了つたのです。皆が佛蘭西の陸から離れた頃を見計つて私があの歌を唄つてあの騒動を起させたのです。パーシー卿は語り終つた。マグリットは、今更のやうに良夫の勇敢な行爲に驚歎した。

「でも随分酷い目に御會ひになりましたわね。あんなに強く打たれては堪りませんわ。」

「あの場合はどうも仕方ありませんよ。それに貴女の身が案じられたので、わざと意氣地のない眞似をしたのです。まあ、英國へ歸るまでお待ちなさい。いづれシャヴランには今夜の返報をしてやりますよ。」パーシー卿は事もなげに笑ひながら言つた。マグリットは彼の快活な話振りに釣り込まれて、遂ひ微笑を漏した。斯うしてパーシー卿の側に居ると、今までの恐しい出來事は夢のやうに消えていつた。けれども彼女の過敏な神経は、忍びやかた聲音にハツとして顔色を變へた崖の下から何者か上つてくると見えて、時々土塊の轉げ落ちる音がきこえてきた。

「誰でせう。」

「心配する事はありません、吾々の友人フォークス卿ですよ。貴女はあの人の事をすっかり忘れて居たでせう。」

「フォークス卿——まあ、眞實に濟まない事を致しましたわ。」彼女は友誼に厚いフォークス卿の身の上を、忘れてゐたのを思ひ出して些か恥入つた。

「貴女はすっかり忘れてゐたでせう。幸ひに私はシャヴランと愉快な會見をする少し前に、シャヴランの近所で出會つたのです。それで、私は凡ての仕事が終つた頃、丁度こゝへ着くやうに大變な廻り路を教へて置いたのです。然し、私を一人残して行くのは危険だと云つて、なか／＼納得せずに散々手古摺せましたつけ。」パーシー卿は晴々した調子で云つた。

「それでフォークス卿は、貴郎の御命令通りに、遠廻りをしていらしたのですね。」

「さうです。丁度いゝ時刻に着きました。あれは確實に、スザンにはいゝお聲さんだね。」

「フォークス卿は注意深く崖を上つて、やがて二人に近づいて來た。彼は暫時立止つて、周圍に氣を配つてゐたが、

「パーシー卿、其處にいらつしやるのは、パーシー卿ではありませんか。」と小聲に云つた。

「さうだ。幸ひに無事でゐたよ。尤も案山子のやうな風體だがね。」といひながら襤褸を纏つたパーシー卿は、すつくり立上つて答へた。

「その風は、一體どうしたつていふのです。」とフォークス卿は呆れ返つたやうに叫んだ。

「それよりも君は、誰の許しを得て、こんな個所をうろついてゐるのだね。確に英國に残つてゐる筈だつたぢやアないか。まあ、何れこの肩の痛みが癒り次第、ゆつくりと成敗をしてやるから。」パーシー卿がいふと、フォークス卿は笑ひながら、

「貴郎達が斯うして無事でいらしたのですから、少し位、痛い思ひをしても、我慢致しませう。それはさうと、その凄じい衣服は、何處から探して來たのです。」

「鳥渡乙だらう。ところで愚圖々々してゐて、シャヴランが部下を介抱にでも寄越すと厄介だからい加減に切上げようぢやないか。」

マグリットは、それをきくと心配さうに、

「これからカレーまで、どうして歸りませう。」といつた。

「カレーへ歸るのではないから、安心なさい。此處から半町許り先の岩陰に『晝の夢』の端艇が出迎へに來てをりますよ。」

「まあ、『晝の夢』の端艇が來てゐるのでございますつて。」

マグリットは立上らうとしたが、疲労きつた足は、彼女を支へる力がなかつた。パーシー卿は優しく彼女を勧め起して、

「さア、私が連れていつてあげませう。いよく盲目が跛の手引をする事になりました。」といひながら、易々と彼女を抱上げて、大股に歩き出した。フォークス卿は靜かにその後に従つた。

東の空は黄橙色に染つて、麗はしい日の前ふれをしてゐた。渚に立つたパーシー卿の合圖の口笛に、岩陰から一隻の端艇が滑り出て来た。

それから半時間後に、彼等は「晝の夢」に乗移つた。神のやうにパーシー卿を崇拜してゐる船員等は彼の異様な風體を見ても、格別驚いた風は見えなかつた。

アルモンド・セント・ジャスト及び其他の亡命者達は、生命の親であるパーシー卿の到着を待焦れてゐた。卿は彼等の雨のやうな感謝の言葉を聞流して、さつさと自分の船室に入つて、兼て用意してあつた衣服に着換へた。只困つた事はマグリットの足に合ふ靴がなかつた。彼女は、パーシー卿の大靴を穿いて英國の土を踏む事になつた。

それから先は語るに及ばない。パーシー卿夫妻は限りなき喜悦と、幸福の生活に歸つていつたといへば充分である。

フォークス卿と、タアネエ伯の令嬢スザンとの結婚式には、プリンス・オブ・ウェールズを初め、朝野の貴顯紳士が列席していつも盛大に行はれた。

シャヴァランはグランビル卿の夜會以來、二度と倫敦の社交界に、狡猾な狐のやうな顔を見せなかつた。

紅 紫 蕪 終

復 讐

前 が き

一、巴里 千七百八十三年

「卑怯者！ 卑怯者！ 卑怯者！」憤怒と屈辱に燃えた叫びが、若者の血の氣の失せた脣を衝いて出た。

若者は憤怒に身を震はせて立上つたが、平均を失つて危く前にのめらうとして卓子に獅鬚附いた。彼は眼がしらに溢れて来る無念の涙を堰止めようとして、空しく瞬きをした。

「卑怯者！」彼は一堂の隅々まで渡る程大喝したつもりであつたが、彼の聲は徒らに乾枯びた咽喉にからまつて噎れてしまつた。彼は震へる指先で卓子の上に散らばつて居た骨牌を掻き集めるや否や、非常な勢ひで前に立つて居る男に投付けた。骨牌は花片のやうに牀へ飛び散つた。

居合せた年寄連中は仲裁に入らうとしたが、血の氣の多い青年達は斯うした争ひの結果、當然來るべき結果を豫想して、面白さうに成行を眺めてゐた。妥協とか、仲裁とかそんな生ぬるいことは問題外であつた。

マアネイ侯爵の嫡子が當時評判の妖婦アデルに魂を打ち込むで溺れ切つてゐる事實は、巴里の都人士の間に噂の種になつてゐたものだ。それをデルレイドは氣がつかずマアネイ子爵の面前で、迂濶にもアデルについて不謹慎な言葉を弄したから耐らない。倏忽我儘氣隨な坊ちやんの激怒に觸れて了つた。

アデルは妖艶花を欺くやうな美人であるが、一皮剝げば海千山千のしたゝかものである。マアネイ侯爵家は素晴らしい財産家で、その世嗣の子爵は若年で、全のお坊ちやんである。されば鋭い嘴をもつた美しい鷹は、親譲りの小屋から巢立つて来た許りの小鳩を餌食と睨んで、爪を砥ぐ事を忘れない。若い子爵はアデルの愛に溺れ切つてゐる最中で、斯うした場合彼にとつてアデルは貴婦人中の貴婦人であり、最も尊敬すべき婦人の典型であつた。それ故彼女の偽なら全フランスの貴族を向うに廻して鬭ふとも敢て辭せない程の逆上せ方であつた。尤も彼は貴族の中でも指折りの劍客であるから、事情を知つてゐる彼の友人は、アデルの噂には、一切觸れぬのが安全であると云ふ事をちやんと心得てゐた。

ところが、デルレイドときては迂濶者として定評がある。それ許りでなく、彼は斯うした上流社會に於いては未だに關入者の如き觀がある程所謂お歴々の人々と間隔があつて、萬事にそぐはぬ所があつた。恐らくデルレイドに莫大な富がなかつたならば、彼は佛蘭西貴族の中に伍する事すら許されなかつたであらう。彼の祖先は餘り明確でないし、彼の具足には紋章がついてゐない。彼の家系及び財

産の出所に就いては詳かにされてゐない、いはゞ何處の馬の骨とも判らない身分であつたが彼の父親が突如前フランス王の寵臣となり、彼の財寶は幾度か國王の空になつた金櫃を満したのであつた。

デルレイドは毛頭暗嘩を賣つたわけではなかつた。只彼が例によつて粗忽を演じたに過ぎなかつた。これも親譲りの平民魂が首を擡げたので、今更なんとも致し方のない仕儀である。實のところ彼は子爵とアデルとの經緯に就いては皆目知識はなかつたのである。而し流石に世事に疎い彼も、アデルに關するよからぬ噂の數々を耳にしてゐた。元來彼は女の話をする事を好まなかつた。尤も彼はどつちかかと云へば女の方からも餘りもてない種類の男であつた。ところで今日の場合は自然と人々の話題が女の話に落ちてゆき、アデルの名が出た時には一同賢く、唇を閉ぢてしまつて、若い子爵だけが有頂天になつて、彼女を賞讃へてゐた。それに對してデルレイドが苦々し氣に肩を窄めた。それが子爵の憤怒を買つた次第である。續いて、お定りの文句が二言三言、そして何等の豫告もなく突然、相手の顔に骨牌が投げ付けられたのであつた。

デルレイドは席から立たうともしなかつた。彼は平然と膝を組むで相手の激昂した顔を眺めてゐた。たゞ常よりもいくらか顔色が蒼褪めて見えた。さもなくばマアネイ子爵の罵る聲も、彼の耳に達せず、又投げ付けられた骨牌も、彼の頬にあたらなかつたやうに見えたであらう。

彼は自分の失策に氣付いたが、その時はもう十秒ばかり通過した。彼は相手に氣毒なことをしたと思ひ、自身の粗忽を後悔したが、今更後に退くことの出来ない破目になつた。彼はこの果し合を避け

る爲めには、全財産の半を失ふとも惜まなかつたであらうが、然し些かも男を潰すわけにはゆかなかつた。

デルレイドは年老いたマアネイ侯爵を尠からず尊敬してゐた。その老侯爵の唯一人の世嗣である、若い子爵を敵とするのは餘り香しくなかつた。

子爵が憤怒の爲に盲目となつて危く倒れかゝつた時、デルレイドは思はず、手を延べてさへた程であつた。彼はその瞬間、出来る事なら自身の過失を謝罪したいとさへ考へた。而しこの場合男の意地として、そのやうな穩かな處置に出る事は叶はなかつた。若しもデルレイドが本然の心に従つてこの場合に處したなら、恐らくは却つて悪い結果になつたであらう。即ち傳統的の結果を無視した事によつて、彼自身の名譽を傷つけるのは當然であつた。

この光輝ある競技室の壁は昔から幾度か斯うした光景を目撃したであらう。居合せた人々は各々慣例に従つて行動した。決闘の手續は在來の作法に従つて迅速に取きめられた。

若い子爵は直ちに親友の一團に取圍まれた。彼の嘖々たる武名と、彼の富と、父老侯爵の威名とは、彼のゆく處、ベルサイユ及び巴里に於いては、至る處の扉は彼の前に開かれるのであつた。この瞬間、若し彼が要したならば彼を守る爲に軍隊を招く事すら叶つたであらう。

デルレイドは暫時の間、骨牌の卓子の近くに、唯一人ぼつねんと腰を下してゐた。卓子の上では、蕊の延びた蠟燭が黒い煙をあげてゐた。彼は事件が餘りに急速に展開して行つたのに聊か當惑した形

勢で、のそくと椅子から立上つた。彼の黒い不安な眼は恰も友人を探し求むるかの如くに、室内を見廻した。

子爵が悠々と寛ぐ權利を持つてゐる場合、デルレイドは單に彼の持つ富によつて、僅に席を同じうするだけの特權を與へられてゐるのみであつた。その部屋にはかなり大勢の人達がゐて、その中には、日頃から都合のよい時ばかりには話かけてくるものはあつたが、斯うした今の場合彼の友と呼ぶべき者の絶無である事を彼はその時初めて氣付いたのであつた。居合せた人々は、誰しもこの喧嘩はデルレイドが求めたものでないことを知つてゐた。夫れにも拘らず、事件は急轉直下して、どんづまりへ来てしまつた。而も誰一人彼の肩を持たうとする者はない。

「形式として介添人をお選び下さい。」と稍々大風な言ひ方をしたのは、ピフランシ侯爵であつた。侯爵の語調にはフランス一の名門家と、劍を交しへようとしてゐる、成り上り者に對して、いくらか侮蔑を含むだところがあつた。

「侯爵閣下、誠に恐縮ですが、拙者の爲に適當な介添人を御選定願ひたいものです。御承知の通り、拙者は巴里に餘り知己を持つてをりませんので。」デルレイドは冷やかに答へた。

侯爵は雅びた態度で、レースの手巾をなびかせて、悪丁寧に頭を下げた。侯爵は凡ての場合、助言を與へることに馴れて居る。例へば禮儀作法、化粧、衣服の流行、決闘の手續き等々、凡ゆる方面に通じてゐる。お人善でめかしやで、怠け者の侯爵は、競技室に於ける斯うした悲劇の一幕を演出する

に當つて、自分が舞臺監督の位置に立つた事を、得意としてゐるのである。

彼は室内を見廻して、周囲の人々を物色した。綺羅びやかに着飾つた公達連は、マアネイ子爵を取巻いてゐた。只數人の老人が、一團となつて部屋の隅に立つてゐる。侯爵はその中の茶褐色の見窄らしい上衣を着た軍人に聲をかけた。

「中佐殿、私はデルレイド氏の依頼を受けまして、この榮ある決闘の介添人を選ぶことになりましたが、あなたにそのお役目を、お引受け願へますまいか。」と言つて侯爵は、再びレースを翻して挨拶した。

「宜敷う御座います。私はデルレイド氏とは昵懇の間柄ではありませぬが、侯爵が強つてと仰せになるならば。」

「何、ほんの形式だけぢや。デルレイド氏は女王陛下の近侍の武士である。だが、私には別段何の干渉もない。マアネイ子爵は、私の友達なのだから……。若し、貴殿が進まないと言はれるなら……」「いや、私はデルレイド氏が、承諾されるなら喜ぶでお役に立ちませう。」と云ひながら中佐は、卓子の側に獨り取り残されてゐる。デルレイドの姿を、ちらりと見た。

「中佐殿、あの男は感謝して、貴殿の介添を受けるでせうよ。吾々の仲間中には、あの男の友達と言ふのが、一人も無いのですから、貴殿とクエタアル氏が、立つておやりになつたら、あの男は光榮に思ふでせう。」侯爵は肩を歪めて、皮肉に私語いた。

クエタアル氏と云ふのは、中佐の從卒であるから、云ふまでも無く、上官と行動を共にせざるを得ない。二人の男はビフランシ侯爵に敬禮をして、デルレイドの方へ歩を運むだ。

「御異存なくば、私と、私の部下のクエタアルとは、貴殿の介添を承るであります。」中佐は吃りながら言つた。

「有難う。凡て茶番ですな。マアネイ子爵は道化役者……だが、拙者は間違つてゐた。……」「すると謝罪でもしようと思はれるのか。」中佐は冷やかに問ひかへした。

この武人は豫々デルレイドの先祖云々に就いて耳にしてをつたので、中流階級の習慣に基いて謝罪といふことを云つて見たので、實際はこのやうな言葉を口にするさへ心外に堪へないと思つてゐた。謝罪と云ふことは、男の尊嚴を傷つける、卑怯の上もない行爲である。殊に國王近侍の武士ともあらうものが、謝罪などに折衝する事がどうして出来やうと、心密かに憤慨してゐたのである。

「若しこの決闘を避けることが出来るなら、拙者は子爵があゝの婦人を崇拜してゐられると云ふ點について、毫も氣付かなかつたと云ふことを、辯明したいと思ひますが。」

「貴殿は太刀の傷を受けるのを、左様に恐れてをられるのか。」中佐は苛々した調子で言つた。側に立つて居たクエタアルは、デルレイドが町人根性を發揮したものと思ひ込むで、忌々しげに眉を顰めた。

「中佐殿！」

「貴殿は子爵と闘ふに非ざれば、明日早朝にパリを立ち退かれねばならぬ。何故なら我々の階級に於いては、斯うした場合に謝罪をしようと云ふことは、武士の風上にもおけぬ卑怯千萬なこととしてあります。」中佐はデルレイドが口に云ふ程決闘を恐れてゐる様子もなく、些かも卑怯な態度が表はれてゐないので、いくらか親しきをもつて忠告した。

「お言葉恭けない。」デルレイドは徐に腰をひねつて劍の鞘を拂つた。廣間の中央は、さつと開いた。雙方の介添人達は、それとなく劍の長さを量つた。そして各自敵手の背後に、部屋の周囲を埋めてゐる見物人達より一歩前に立つた。

其處に居並ぶ人々は、家柄と言ひ武名と云ひ、千七百八十三年のフランスの華とも云ふべき、最も高貴な階級に屬してゐた。それから數年後、彼等を宮殿から追ひ、牢獄に送り、斷頭臺に送つた恐しい暗雲は、その頃はまだ飢ゑ渴ゑた巴里の地平線低く影を潜めてゐた。即ち市民の復讐の劍は未だ鞘に收められてゐた時代で、貴族達は、舞踏と賭博と酒色に耽つてゐた。そして美しい靴に踏みにじられてゐる、佛蘭西の子供等の苦惱の叫びは、歡樂の舞曲や、戀の小夜曲に打消されてゐた。

其處には、それから九年後の九月の寒い朝、最新流行の髪に結むだ頭をギロチンの上に横たへた、シオトワダン侯爵も居た。それからミルポア子爵の顔も見えた。子爵はそれから數年後、斷頭臺の上立つて、ミランデに對して、その日首を斷られる人々の中で、自分の首からは誰よりも紅い血が流れるであらうと云つて賭をした。その賭を聽いてゐた市民サムソンは、ミルポア子爵の首がバケツの

中へ落ちて來た時、それを差上げてミランデ氏に見せた。ミランデ氏は、「ミルポアは日頃から大法螺吹きだつたからな。」と朗かに笑つた。そして自ら首切り臺の上に首を横たへて、

「若し拙者の血が、ミルポアの血より紅かつたなら、誰が此賭金をとるかなあ。」と冗談口を言つた。然しながらこの夜、マアネイ子爵とデルレイドとが劍を交へた場所に居合せたそれ等の人々は、誰一人として自分等が後年そのやうな悲喜劇を演じようとは、夢想だにしなかつた。

彼等は、二人の男の眞勝負を、最初の中は新しい舞踏でも見物するやうな心持で、興味をもつて見物してゐた。

マアネイ子爵は、祖先代々鍛へられて來た鮮かな太刀筋をもつてゐたが、彼はその晩は酒氣を帯び且つ興奮し切つてゐた。その上に尠からず太刀先が鈍つてゐる。見物はデルレイドは恐らくかすり傷を受けた位でこの災難を遁れることが出来るであらう位に思つてゐた。

だがこの金持の成り上り者も、可成り優れた腕前を持つてゐた。彼はなかく自信のある構で、決して誘ひをかけるとか、無暗に突いて出るとか云ふことなく、極めて着實に飽まで受身になつて、如何なる場合にも注意深く、堅實に相手の太刀先を受けて居た。

周圍に圓を描いて居た人々は、次第に密集して來て、圓形がせばめられて來た。目にもとまらぬ手練の早業で見事に突をいれた子爵の劍にあはやデルレイドは胸先深くやられたかと思ひのほか、發止

と鮮かな措止めに思はず感歎の聲があがつた。子爵は益々興奮して来た。それに引換へデルレイドは、次第に冷静になつて来る。子爵は最初からたかゞ平民の成上り者と相手をのむでかゝつてゐたが、案外手強いので躍起となつて遮二無二に突進した。子爵の突出した剣を巧に小手先にかはしたデルレイドの剣は電光石火の如く閃いた。と見ると、憂然たる響を立て、子爵の剣は牀に拂ひ落された。

介添人はさつと進むだ。彼等はこれでこの決闘の覺をつけて了はうとしたのである。

名譽は贖はれた。俄分限者と、由緒正しき貴族の息子との間に、全フランス中で最も淫奔な一人の爲に兩者の剣が交へられたのであつた。そしてデルレイドの沈着は、生命や名譽をレースの手巾や嗅煙草の箱の如く軽々しく扱ふ興奮しやうい若者等によい教訓を與へた。

デルレイドは靜かに後方へ引下つた。彼は穩かな人物にあり勝な慎しさを以て、武器を失つた相手から目を背らすやうにしてゐた。然しながら興奮しきつてゐる若い子爵にとつては、斯うした冷静な態度は却つて苛立しさを起させるのみであつた。

「これは小兒の戯れではない。私は充分な満足を要求する。」子爵は激昂して叫むだ。

「貴殿は満足なさらないのですか。貴殿は寵愛してをられる婦人の名譽の爲に、充分に闘はれたではありませんか。」デルレイドはいひ返した。

「貴様は尊敬すべき婦人に侮辱を與へた。公衆の面前で謝罪しろ！ さア、たつた今そこへ手をついて謝罪しろ！」子爵は嗶れ聲を振り絞つた。

「子爵、貴殿は血迷つていらつしやる。無論私は自分の粗忽に對して充分お詫び申上げます。然しながら……」

「そんな辯疏はきかぬ。謝罪だ……一同の前に膝をつくのだ……」子爵は次第に興奮の度を増してきた。彼の胸は、重なる屈辱にわれ返るやうだつた。彼は幼少の時から甘やかされて育つてきた、世間見ずの少年で、加ふるに大分酒が頭腦に来てゐるので、憤怒と憎惡の爲に全く判断力を喪つてゐた。

「卑怯者！」彼は幾度も叫むだ。介添人等は、彼を宥めやうとしたが、彼は人々を排除して、誰の言葉にも耳を藉さうとはしなかつた。彼の眼には愛するアデルを侮辱した男の他は見えなかつた。

この瞬間、マアネイ子爵は、凡そ男の胸に盛られるだけの憎しみを以て、デルレイドを呪つた。彼の冷静さ、彼の武士道は若者の憤怒を増させるのみであつた。

喧騒は波濤のやうに擴まつていつた。人々は若い子爵の血管に漲つてゐる憎惡の不思議な熱に浮かされてゐるやうな状態であつた。若い男達は子爵のまはりに集つて彼を宥めようと努めた。ピフラシ侯爵は、この上の決闘は法則の垣を越えるものだと呼むだ。

誰もデルレイドに注意を拂はなかつた。廣間の片隅では中年の洒落者達が、この果し合の成行に就いて賭をしてゐた。

デルレイドは最前から押黙つてそれ等の光景を見守つてゐるうちに、身うちの血管が次第に熱して

くるのを感じた。彼の目が嵐のくる前の黒雲が集つてくるやうに、刻々と險悪になつてゆくのを誰も氣づく者はなかつた。

「各々方、議論はやめられたい。マアネイ子爵がこの上性根をつけて貰ひたいと云はれるなら宜しい、さアお相手を致さう。」デルレイドの聲が室内に鳴り響いた。

群衆はその聲に、さつと後へ退いた。介添人等は再び、もの／＼しく各自の持場についた。

丁々發止と刀が交はるにつれて、一同は片唾をのむだ。人々は茶番が次第にとりかへしのつかぬ悲劇に陥つてゆくのを感じた。

けれどもデルレイドは單に相手の刀を叩き落して了ふつもりであつた事は誰の目にも明かであつた。彼は鮮かな劍士であつた。それに反してマアネイ子爵は酷く興奮して、必死の形相凄しく、一氣に相手を仕留めようとおせつてみた。

すべてがどんな風に進展していつたかといふ事に就いて、誰も後になつて明瞭に語る事は出来なかつた。が、いふまでもなく子爵の太刀先は次第に亂れてきた。そして彼は相手を打込む事許りに氣を入れて、自身は目にあまる程の隙をもつてみた。その結果、彼は自分からデルレイドの太刀先にぶつかつていつたやうな破目になつた。

デルレイドは素早く手首をひねつて、この致命的な結果を避けようとしたが、既に遅かつた。マアネイ子爵はデルレイドの太刀先にかゝつて、聲も立てずに倒れた。デルレイドは馳寄つて相手を抱き

起した。

餘りに思ひ掛けぬ出来事であつたので、暫時は、誰もはずきりと事實を掴む事が出来なかつた。マアネイ子爵の派手やかな空色朱子の上着は朱に染つてゐた。

最早何とも手の下しやうがなかつた。決闘の作法上、デルレイドは直にその場を立去らねばならなかつた。彼は自分の意志に悖つて斃した相手に對して、何事をする事も許されなかつた。

以前と同様、誰一人デルレイドに注意を拂ふ者はなかつた。恐しい沈黙が、部屋全體を支配してゐた。唯部屋の隅から無遠慮な高聲が起つた許りであつた。

「公爵、五百ルイズの賭金を申受けますぞ！ あの成上り者は素晴らしい劍士ですよ。」

デルレイドが二足三足扉口の方へ歩きかけると、人々はさつと通路を開いた。その後から介添の役を勤めた中佐とクエタル氏が黙々としてついていつた。この兩人は、武士道と勇氣を備へた武人である、それ故此勇ましい豪膽な男に對して、最後まで介添の役目を果さうとしてゐるのである。

彼等は扉口のところ、醫者に出會つた。それは豫め決闘の前に呼び迎へておいた醫者であつた。

實に歴史的な大事件がこゝに行はれたのであつた。デルレイドがマントに身を包むで、只ひとり悄然と暗い街へ歩み出た時、マアネイ大侯爵の唯ひとりの世嗣は、華かな廣間のシャンデリアの許に青春二十一の生命を永遠に喪つたのである。

マアネイ侯爵家の當主は、この時既に七十の齡を越えてゐた。彼は幼時から國王に拔擢されて小姓となつて以來、殆ど半世紀に亙つて立派に公人として、國王に奉仕してきた。けれども老といふ自然の力は櫛の大木をも朽ちさせるやうに、飛ぶ鳥を落す程の權勢を極めてゐた老侯爵をも、いつか廢人として、館の奥深く浮世を外に暮す身として了つた。

ジュリエットは侯爵家の末子と生れ、老侯の寵愛を一身にあつめた幸福な少女であつた。だが彼女は、何事にも遠慮勝に靜かに此世を去つていつた亡き母の性質を享けて、何處か淋しいところがあつた。

老侯爵が病室にあじぎない餘生を送るやうになつてからは、ジュリエットは老侯の唯一の光であり、喜びであつた。彼女の深い優しい瞳の底に、老侯は彼女の華かな未來を觀て樂しむた。

そして老侯は最後の希望を一人の息子の上にかけてゐた。彼こそは臆ては家門の譽を擔つて、全佛蘭西に再び光輝あるマアネイ家の名を轟かせる時が來るであらう。それが老侯の希望の凡てであつた。若者は老侯の寵愛するところに非ずして、實に老侯の矜持であつた。老侯はいつも深い凭椅子に身を埋めて、若い子爵から巴里の状況、若い女王の日常、或は劇場夜會等の噂をきくのを唯一の樂しみにしてゐた。さうした場合、老侯は再び自らの潤達な若き日を胸のうちに思ひ起すのであつた。

人々が子爵の遺骸を運びこむた晩、第一に目を醒ましたのは、ジュリエットであつた。彼女は館の門の外の騒がしさをききつけた。馬車が靜かに近づいてきて、門番を起す鈴が鳴つた。やがて、門番の不平らしく何事か呟く聲を聞いた。彼は夜中に人を門内に入れるのを喜ばない男であつた。

ジュリエットは何といふ事なしに、凶事のあつた事を感じた。人々の聲音が重く陰鬱に響いた。階段を上つてくる聲音は何か重いものを運むでくるやうに聞えた。

二人の見知らぬ男が、重い荷物を擔つてきた。その後から門番のマシウが聲をあげて泣きながらついて來た。

ジュリエットは身じろぎもしなかつた。彼女は石像のやうに扉口に立つてゐた。小さな行列は黙々として彼女の前を通つていつた。誰も彼女に氣のつく者はなかつた。何故ならマアネイ家の廊下は非常に廣く、マシウの提げてゐた籠燈の光は僅かに牀の一部を照らしてゐる許りであつたからである。人々は子爵の部屋の前に立止つた。マシウが扉を開けて人々を部屋の中へ導いた。

乳母のペトロネルが涙に顔を濡してジュリエットの許へ駆け來た。彼女は誰からか、恐しい報知をきいた許りで、驚愕のあまり言葉も出なかつた。唯ジュリエットを堅く抱きしめて、身體をゆすりながら泣くのみであつた。

ジュリエットは泣かなかつた。凡てがあまりに突然で、あまりに恐しい出來事であつた。十四の少女は、未だ曾て、人間の死といふものを想像した事もなかつた。それが直ぐに自分の身に振りかゝつ

てきて、斯うして兄の死に直面しなければならなかつたのである。何といふ残酷な事實であらう。そしてその事を老侯爵の耳に入れねばならぬとは！ それはジュリエットにとつて、生きながら父を葬るやうな恐ろしい役目であつた。老侯爵の最後の希望を煽つてゐた火災を、無残に踏み消して了ふも同様である。

「ペトロネルや、お前、お父様に申上げて呉れない？」ジュリエットは乳母の悲嘆がいくらか鎮まつたのを見て、幾度も繰返して歎願した。

「お嬢様、お嬢様、私にはとても出来ません。」ペトロネルは涙を新にして呻くやうにいつた。年端のゆかぬジュリエットの胸には不思議にもこの酷い運命に對して反抗心が燃上つてきた。彼女はこゝろやうな痛手を負はされたことに就いて神を恨むだ。こんな小さな自分でありながら、これ程の悩みを負はねばならないといふ法があらうか？ 愛する兄を喪ひ、その上老いたる父の嘆を見なければならぬとは！ 神は餘りに無慈悲である。

遠くから響いてくる鈴の音に彼女は身慄ひをした。老侯が眼を覺ましたに違ひない。この騒ぎをきいて何事であるか、理由を糺す爲に召使を呼ぶ鈴であらう。ジュリエットは決然として乳母の腕を拂除けて、暗い廊下をまつしぐらに駆けぬけて父の居間の前に立つた。

老侯爵は寢臺の縁に腰をかけて、枯木のやうな細い脚をぶら／＼させてゐた。脚の蹠へてゐる老侯にとつて半身を起すだけでも容易なことではなかつた。それなのに尙も眞直に起上らうとして跪いて

ゐるのであつた。老侯も怪しい電音を聞いたのであつた。

老侯爵の記憶は五十年の過去に飛返つた。——その日、青年であつた彼は單に興味をもつた見物人としてある場面を眺めてゐた。介添人に擔はれた悲しい亡骸は、悲嘆に暮れてゐる家族の面前で寢臺の上に靜かに下された。——このやうな光景が朦朧とした老人の腦裡にちらと影を翳した。

老侯爵は凡てを察してゐた。

ジュリエットが大きな瞳の中に悲しみを湛へて眞青になつて父の前に立つた時、彼女は最早何事も語る必要のない事を悟つた。

從僕ピエルは出来るだけ迅速に老侯爵の着換をした。老侯爵は禮服を着て胸に勳章を飾り、太刀を佩いた。青年の頃にはよく似合つた豪華な服装も、今ではだぶ／＼になつて、老そぼれた身に不釣合であつた。けれども頭髮を黒いリボンで束ねて、端然と坐つた姿は飽までも由緒正しい侯爵の威嚴を保つてゐた。彼は輪車をついた椅子に乘せられて、嗣子の死の床に赴いた。

この時は館中のものは悉く起出でゐた。廣間の中央には炬火が點され、櫛の巾の廣い階段に沿うて、點された數百本の蠟燭が黄色い焰をあげて揺れてゐた。廊下には禮装をつけた家臣たちが肅然と立並んでゐた。

老侯爵の椅子は永遠に冷たく眠れる若い子爵の傍に置かれた。老侯は身じろぎもしなければ溜息も洩らさなかつた。その場に居合はせた或者は鈍くなつた老侯の頭腦がはつきりと子爵の死を了解出來

ないのではないかと危むだ位であつた。

介添の役をつとめてゐたピフランシ侯爵は死者に最敬禮をして静かに立去らうとした。

ジュリエットの眼は老侯爵の上におつと注がれてゐた。彼女は兄の亡骸を見ようともしなかつた。彼女は生きてゐる老侯爵と、死んでゐる兄と、この二つの動かぬ姿に對して子供らしい恐怖を感じてゐるのだつた。

ピフランシ侯爵が部屋を出てゆかうとした時に、老侯爵は初めて肩を開いた。

「侯爵、いろ／＼と御苦勞でござつた。然し貴殿はお忘れになりましたな。儂の倅を殺したのは何者ですか、まだお告げ下さらなかつた。」老侯爵は早口に訊ねた。

「閣下、これは尋常な勝負でございました。若い侯爵は日頃の氣輕さに似ず、この不慮の悲劇に周章きつてゐた。

「儂の倅を殺したのは何者です。お聞かせ下さい。」老侯爵は聲を囁ましていつた。

「ボウル・デルレイド氏であります。閣下……もう一度申し上げますが、これは尋常な勝負でございました。」

老侯爵は満足氣に吐息をした。

「侯爵、御好意に預かりまして有難う存じます、倅の受けました御好意は、儂が代つて御禮を申し上げます。ではこれ以上は御引止め申しますまい。左様なら。」と慇懃に別れの挨拶をした。

ピフランシ侯爵は二人の従者を従へて部屋を出た。

「ジュリエットや、召使共を退らせなさい。」老侯爵の言葉に従つて、ジュリエットはその意を家臣達に傳へた。

人々の聲音が廊下の外に消えて了ふと、老侯は急に今までの冷靜な態度を捨て、突如ジュリエットの手をとつて、

「奴の名前、お前は奴の名前をききましたらう。」と興奮していつた。

「え、お父様。」

「ボウル・デルレイド！ ボウル・デルレイド！ お前は忘れはしめないな。」

「決して忘れません。」

「奴がお前の兄上を殺したのだ。お前に解りませう。奴は佛蘭西の歴史に華々しい一頁を加へた最も光輝あるマアネイ家の末裔、即ち儂の凡ての希望をかけてゐた唯一の息子を殺したのだ。」

「でも、お父様、尋常な勝負だつたさうでございます。少女は父の言葉を遮つた。」

「大人が小兒を殺すといふ法はない。デルレイドは三十だ、儂の倅はやうやく二十を越えた許りだ、どうしてそれが尋常な勝負といへやう。神の復讐よ、殺人者の上に落ちよ！」

ジュリエットは身を慄はせながら、恐怖の眼をあげて父の顔を視守つた。老侯の様子は日頃と全く違つてゐた。興奮と憎悪と疲勞との交はりあつた異様な表情が顔を歪めてゐた。

ジュリエットは父の頭脳から理性が消えていつて了つたことに氣付くには餘りに若かつた。彼女は茫然として父の肩を衝いて出てくる恐しい呪詛の聲を聞いてゐた。彼女は父の威嚇するやうな態度に恐怖を覚えてゐたが、老侯の狂つたといふ事は全く考へなかつた。それ故老侯爵がジュリエットの手をとつて、死んだ兄の胸の上に置かせた時も、彼女は怪しみもせず黙つて父の爲すがまゝに従つた。そして恰も醫者の言葉を聞くやうな態度で父の言葉に耳を傾けた。

「ジュリエットや、お前は既に十四になつてゐる。だからこれから儂がいひきかせる事をきゝ分ける事が出来るだらう。若し儂が椅子を頼りにしてゐるやうな無能な廢人になかつたら、儂はこのやうな事をお前は愚か誰にも語らなかつたであらう。ジュリエットや、お前は尊いマアネイ家の血を享けてゐる。そして立派な舊教徒である。神様が平素お前の言葉に耳を傾けてゐられるといふことを確かりと心にとめておかなければならない。お前は今こゝで、神様と儂の前で誓ひを立てるのだ。そしてその誓はお前の生命のある限り、破る事の出来ぬ神聖なものである。娘や、お前は誓つてくれるかね。」

「はい、お父様が仰有る事ならば何事でも誓ひます。」

「ジュリエットや、お前は最近に懺悔にいつてきたかね。」

「え、お父様、それから昨日は聖餐を受けて参りました。でもそれから後、少し許り罪を犯しましたけれども。」

「ではお前は今、心の中で神様に懺悔をなさい。誓ひを立てる前に心を清めておかねばならない。」

ジュリエットは老侯爵の面前で、胸に手をおいて眼を閉ぢた。老侯は彼女の肩から懺悔の言葉が静かに洩れてくるのを聞いた。聴て彼女は十字を切つて、清らかな美しい眼をあけた。

「お父様、もうよろしう御座いますわ。神様は屹度、私の小さな罪をみんなお許し下さつたと思ひます。」

「娘や、お前は誓ふだらうね。」

「お父様、何をで御座います？」

「お前の兄を殺した男に復讐をする誓ひだ。」

「でも、お父様……」

「誓ひなさい！」

「お父様、私にどうしてそのやうな誓ひを遂げる事が出来ませう。私には分りません。」

「娘や、神様がお前を御導き下さるのだ。」

ジュリエットは一寸の間躊躇した。彼女は今青春期に入らうとしてゐる何事にも感じ易い乙女であつた。彼女はこれまで父親に對して熱烈な尊敬と愛をもつて奉仕してゐた。さうした感情は彼女を殆んど盲目にしてゐた。

「ジュリエットや、躊躇する事はない。お前の兄の屍が復讐を求めてゐるではないか、マアネイ家に唯一人残されてゐるお前にとつて、それは當然の務である。」

「いゝえお父様、私は躊躇など致しません、お父様の御言葉通りを誓ひませう。」

「では僕のいふ通りいひなさい、よいかね……吾を見、吾に聴き給ふ全能の神の御前に……」

「吾を見、吾に聴き給ふ全能の神の御前に。」ジュリエットは確かりした聲で老侯爵の言葉に倣つた。

「吾は、ポウル・デルレイドを探し出す事を誓ひまつる。」

「吾はポウル・デルレイドを探し出す事を誓ひまつる。」

「然して、吾が兄の死に復讐せんが爲に、神の御心のまゝに、彼を肉體的に殺し、或は精神的に滅ぼさん。」

「然して吾が兄の死に復讐せんがために、神の御心のまゝに、彼を肉體的に殺し、或は精神的に滅ぼさん。」

「若し吾、この誓ひを破らば最後の審判の日來るまで、吾が兄の靈魂は地獄の水火に訶まるべし。されどこの誓ひの遂げられたる日より、吾が兄の靈魂は永遠の平和に蘇らん。」

「若し吾、この誓ひを破らば最後の審判の日來るまで、吾が兄の靈魂は地獄の水火に訶まるべし、されどこの誓ひの遂げられたる日より、吾が兄の靈魂は永遠の平和に蘇らん。」

ジュリエットは、異常な興奮に力盡きて牀に仆れた。老侯爵は誓ひが立てられたので、重荷を下したやうにぐつたりとして眼を閉ぢた。

間もなく従者を呼んで老侯は靜かに寢室へ戻つた。ジュリエットは張りつめた氣が一時に緩んで止

度なく涙が溢れてきた。彼女は自分の部屋へ驅戻つて優しい乳母の胸に鼻と顔を埋めて、心ゆく許り泣いた。

度なく涙が溢れてきた。彼女は自分の部屋へ驅戻つて優しい乳母の胸に鼻と顔を埋めて、心ゆく許り泣いた。

一、暴動

デルレイドが何故に、そのやうに市民の人望を一身に集めてゐるかといふ事を一言で説明するのは困難である、それよりも更に全佛蘭西が一大牢獄に變じつゝある程、來る日も來る日も、數限りないデロンド黨が、情け容赦なく引捕へられて斷頭臺に送られてゐる今日、何故デルレイドのみが何の迫害も受けず、斯くも安全に暮してゐるかといふ理由を解く事は一層難い。

デルレイドはマリンの制定した容疑者密告法にも觸れず、ありし頃と同じく頭を高くあげて立つてゐる。革命の神と稱ばれてゐたマロウが曾てデルレイドに就いて、「彼は危険人物でない」と立派に折紙をつけた。その言葉がマロウの死後よりも有力な楯となつて、デルレイドを保護してゐるのである。

彼は親から譲られた素晴らしい富を有してゐたが、その巨萬の富を、佛蘭西の餓ゑたる市民が最も必要に迫られてゐる際に、惜氣もなく提供して了つた。彼のさうした時機に投じた行爲は人民の胸に深く刻まれ、市民デルレイドの周圍には、いつか人民の報恩の心をもつて、見えざる城壁が築かれたのである。

彼は思想問題に觸れたり、政治を論じたりしなかつた。そして老いたる母と、従妹に當る哀れな僞
儂の孤兒アンミイと三人で穩かに暮してゐた。

メデシン街に建つてゐる彼の家は誰にでも知られてゐる。その町には曾てマロウが生まれ、育ち、
そして最後を遂げた。その低い見窄らしい家並の中に、こゝ一軒だけデルレイドの家が嚴しい石造
である。

街は狭く泥臭い通りである。自由と、良き社會を創造する爲に人間の首をはねてゐる巴里は、町の
清潔や、衛生などを省る暇はなかつた。泥濘と凸凹路はいつも烈しい人通りでこつた返してゐた。
そしてその雑沓の中には、小ざつぱりした服装などは殆んど見られないといつてもいい有様で、殊に
街の兩端にある酒場が繁昌する夕方の五時頃になると、良家の子女は外出を見合せなければならぬ
やうな雑沓であつた。

街角にかたまり合つてゐる襪縷を下げた内儀さん連の一團こそ、最も凄じい存在の一つである。彼
女等はまるで野良犬のやうな姿を恥もせず往來に曝け出して喋り合つてゐる。そして少しでも自分
等より小綺麗な服装をした通行人を見つけると、互に肘を突合つて、

「よう！ 貴族！」と罵聲を浴せかける。相手が男であらうが、女であらうがお構ひなし。斯うした
手合は夕方牢舎から斷頭臺に運ばれてゆく囚人の行列を見物する爲に町中を押まはつてゐる。

それは千七百九十三年八月十九日、佛蘭西國民が新世紀第二年と、新しい名稱を曆に加へた年

の夕景の六時であつた。一人の若い娘の姿が降つて湧いたやうに、メデシン街の角に現はれた。彼女
は一寸左右を見廻して、そのまゝ眞直に、その狭い通りへ入つてきた。

例によつて興奮した女達が軒先に立つて、がや／＼喋り合つてゐた。

若い娘は最初、それ等の女達には氣づかぬ風であつた。頭をあげてつんと澄した様子で泥濘を除け
ながら足早に歩いてゐた。彼女は質素な鼠色の服をきて、純白な手巾を肩にかけてゐた。リボンの
ついた帽子の下から美しい顔を覗かせてゐた。若し彼女の表情が強ばつてゐなかつたら、一段と美し
く見えたであらう。それ程彼女の顔には年齢に似合はぬ決然とした表情が現はれてゐた。

丁度、デルレイド家の前まで来た時、彼女の態度が變つた。これまで彼女は行手を邪魔する者があ
れば穩かに自分から道を譲つてゐたが、そこへきて急に顔をあげて、行手に立ふさがつた醜い女達を
正面に見据ゑて、

「そこを退いて頂戴！」と大聲でいつた。

「退けとさ！ 退けとさ！ ほう！ ほう！」女達は近くにゐる群衆を顧みて嘲笑した。

「お前さん達聞いたかい？ 此所は貴族の女が通る爲に、特別にこしらへた道路なんだよ。」眞先
に立つてゐた女はもう一度四邊を見廻した。

「私は急いでゐるんですから、通して頂戴。」娘は小さな靴の先で地面を激しく踏んで叫んだ。
彼女が前へ進まうと思へば充分通れるだけの道が左右に空いてゐるにも拘らず、若い女の身で、多

勢を相手に喧嘩を賣るやうな態度をとるのは無謀極まることである。けれども彼女は一步も譲らうとしない。氣位の高い貴族の血が、全身に湧上つてきたかのやうに昂然と頭をあげて、襤褸と臭氣の凝結のやうな群衆を蔑むやうに冷かに見渡した。さうした彼女の態度が群衆を激昂させたことは云ふまでもない。

「やい！ 貴族！ どうだこの貴族を見ろ！」人々は憎々しく叫びながら、ぢり、と詰寄つて油汗に穢れた黒い爪を彼女の櫻色の頬に向けた。

娘は本能的に後退りをして、右手の石の階段を駆上つて、厚い櫺の扉を背にして立つた。

「マルゴよ、あの鼠色の服はお主によく似合ふぞ！」赤い帽子を被つた悍猛な顔付の男が今にも娘のスカートを引裂きさうな見幕で叫んだ。

「あのレースの肩掛はサムソンがちよん切つた首を高く持上げて、俺達にみせびらかす時のいゝ飾りになるぞ！」

「こんな立派なレースを隠しておくのは勿體ないぞ！」他のひとりにはスカートの下から覗いてゐるレースの下着を引張つた。

「何と綺麗な足をしてござること！ 吾々はこの通り泥を穿いてゐるが、貴族は異つたものだ、當節は巴里では石鹼が高くてな！」

「貴族のレース一枚で、俺達か一日食ふだけのパンが買へらア！」

「よし来た！ このびか物を質屋へ持つてゆけ！」眼の落窪んだ女が、突如飛びかゝつていつて、娘の頸からレースの肩掛を掬取つた。

この亂暴な振舞が導火線となつて、女達の胸にたぎつてゐた、彼女の美しさに對する嫉妬と憎悪が一時に爆發して、恐しい叫聲となり、聞くに堪へぬ烈しい言葉となつた。娘は恐怖に怯えた眼を睜

つて両手で耳を覆うた。夜叉のやうに飛出した女のひとりには、突如、發止とばかり娘の薔薇色の頬を撲付けた。娘は後へよろめきながら、

「人殺し、助けて頂戴！」と叫んで背後の重い扉を白い手で叩いた。猛り立つた群衆は石段を驅上つて娘の裾を掴んで下へ引ずり下さうとした。その刹那、扉がさつと開いて、力強い手が倒れかゝつ

た娘を抱くやうにして家の中へ擔入れた。そして重い扉が外部の地獄のやうな叫聲を閉出して了つた。娘は急に薄暗い家の中へ入れられたので、この救ひの主を識別する事は出来なかつた。

「早く二階へおいでなさい、突當りが母の部屋ですから。」男は錆のある聲でいつた。娘は階段の柱に凭れて、此場合生命の親ともいふべき相手の顔を見極めようとするやうにぢつと凝

視した。男は扉の錠に手をかけてゐた。「貴郎はどう遊ばしますの？」娘は囁くやうにいつた。

「表の人達が貴女を取返す爲に闖入してくるといけませんから、こゝで防ぐ心算です。貴女はお構ひなく二階へいらしつて下さい。」

娘は機械的に男の言葉に従つて、蹠踉ながら階段を上つていった。娘は過度の疲労の爲に力を失ひ、彼女の全身は恐怖の爲にわなわなしてゐた。

戸外には荒狂ふ群衆の數を増したと見えて扉を叩く音がいよゝゝ烈しくなり、怒號の聲に交つて瓦石が投げつけられた。

娘は喘ぎ／＼階段をのぼり切つて突當りの扉を押開けた。

丁度その時階下では、男が扉を開けて群衆に面した。娘は男が殺氣立つた群衆に取巻かれてゐるらしい物音をきいて、氣がかりであつたが、そのまゝ部屋へ入つた。

其處は心地よく裝飾された明るい部屋であつた。正面の大きな安樂椅子の中から優しい聲が聞えた。「扉を閉めてこつちへいらつしやい、亂暴な人達ですね、でも心配なさるな、ポウルが屹度よくいつて聞かせて、あの人達を宥めるでせうから、さア、こつちへきてお掛けなさい。もう何も怖がる事はありませんよ。」

娘はその優しい聲に吸寄せられるやうに前へ進んだ。椅子の中の老婦人は彼女の手をとつて傍の椅子にかけさせた。そして頻りに何事か話しかけた。その言葉の中に幾度もポウルとか、アンミイとかいふ名が洩れたが、彼女は恰も夢の中にあるやうな心持で、老婦人の言葉はよく耳に入らなかつた。それよりも表の騒ぎが氣になつてゐた。

廳で戸外の騒動が鎮まつた。彼女は急に烈しい疲労に襲はれた。頭腦の中で血が渦を巻いて鳴出した。目の前の椅子や卓子がぐら／＼と廻り出した。優しい老婦人の顔が次第に霞の彼方に薄らいで、大きな黄色い暈の中に消えて了つた——その時疲労果てた美しい乙女の身體は優しい老婦人の腕の中に、ぐつたりと抱かれてゐた。

二、市民デルレイド

若い娘が充分な睡眠の後に眼を覺ますと、靜かに考へるだけの餘裕が出来てゐた。

斯うして遂に彼女はデルレイド家の客となつたのである。彼女を狂暴な群衆の手から救つたデルレイドを初め、彼の優しい老母と、愁しい眼をした不具な娘とは、この美しい客を手厚く看護して呉れてゐる。

マアネイ侯爵の遣子ジュリエット姫は曾て神の前に復讐を誓つた。その目ざす仇敵の家に救はれたのである。恐しい復讐の誓ひを立てた、その時から既に十年の星霜を経てゐる。

ジュリエットは與へられた美しい部屋で、柔かい寢臺に横はりながら過去十年の様々な出來事を眼に浮べてゐた。不慮の死を遂げた兄の死體が夜遅く館に運び込まれた瞬間から、老侯爵の亡骸を墳墓に送つた日までの出來事であつた。唯一人の世嗣を失つた老侯爵の晩年は生きた死骸も同様に痛ましくも續けられた。

老侯爵を送つて後のジュリエット姫は修道院の奥深くに淋しく、然しながら平和な日を過してゐる。

た。分別も定まらない少女時代に恐ろしい復讐を誓つたことはジュリエットにとつて生涯の重荷であつた。彼女が神の愛に浴して安らかに成長するにつれて、吾身の使命の恐しさをしみるゝ感じるのであつた。

彼女はこの心の重荷に耐へきれないで、懺悔日に僧の前で包みなく語つて救ひを求めた。けれども世間を知らぬ老いたる僧は彼女に何の慰めを與へる事も出来なかつた。優しい心の所有者であるジュリエットにとつて、この重荷は年と共に堪へられなくなつた。彼女はどうかして幼い折の無分別な誓ひを解いて貰ひたいと希つて、大僧正に計つた。大僧正は神への誓ひは神聖にして侵すべからざるものであるが、幸ひマアネイ家は巨萬の富を有してゐるから、それを慈善事業に投じたならば、たとへ彼女が誓ひを破つたとしても神の怒りを免れるかも知れないと考へた。然しさうした大僧正の意嚮をジュリエットに傳へないうちに革命が突發して、僧正の首が斷頭臺に曝されて了つた。そして貴族の娘達が學問をする爲に送られてゐた修道院は暴徒の襲ふところとなつて、尼僧を初め名家の令嬢達は大方虐殺されて了つた。ジュリエットはその恐ろしい境涯から、僅に身をもつて免れたのである。彼女は如何にして生きるべき運命を與へられたか知らなかつたが、兎に角乳母のペトロネルと共に世を忍んで巴里の町端づれに住む身となつた。彼女はその間も僧正からの音信を待つてゐた。然るに彼女が唯一人の精神上の指導者として渴仰してゐた師父が斷頭臺の露と消えたといふ報知を受けたので、彼女はもう永劫に誓ひを解く事の出来ないといふ神の默示を受けたやうに思つた。

彼女は乳母の家に引取られてから、屋根裏の小さな窓から、革命の騒擾を眺めてゐた。宏壯な邸宅も、巨萬の富も共和政府に沒收されて了つたジュリエットは、今は貧しい乳母の蓄へによつて僅に糊口を凌いでゐた。

彼女は乳母の家の小さな窓から美しい巴里が、無慈悲な惡魔の鞭に打さいなまれてゐるのを見た。そして日毎に革命の犠牲者を斷頭臺へ送る馬車の音を聞いてゐた。彼女は又、陽氣な巴里の女達が血に餓ゑた野獸のやうに荒んでゆく有様を悲しく眺めてゐた。

夫から二年の後には純眞な田舎娘のシャロットが、マロウを暗殺した。彼女は「英雄ブルタス、女傑ジャンダークにも勝る乙女」と後世の人々から賞讃の言葉を贏得した。

シャロット・コルデイが死刑の宣告を受けて刑場へ送られた時、ジュリエットは感激してこの勇ましい少女を乗せた馬車に蹴いていつた。

「私に於いて裁判長チンビュが證人の喚問をしようとした時、シャロットは、
「いゝえ、そんな必要はございません。私は確にマロウを殺しました。」と凛々しい聲で答へた。ジュリエットはシャロットの青褪めた美しい顔を見て、心を打たれた。己の使命を果たすと自覺してゐる彼女の雄々しさよ！

「私はマロウを殺しました！」その聲が響渡つた時、居並ぶ役人達の顔に、さつと險惡な色が閃いた。然しその中で唯一人だけ同情の籠つた眼で、優しくこの若き憂國者シャロットを視詰めてゐた男

があつた。それは豫てからジュリエットが兄の敵として運命づけられてゐた穩和黨のポウル・デルレイドであつた。

彼女はシャロットがマロウを刺殺した如くにポウル・デルレイドを暗殺しなければならぬのである。

ジュリエットは絶えずデルレイドに注意してゐた——彼はマロウと同じく、一女性の憎悪の的となつてゐる事に氣付いてゐるだらうか？——とそんなことを考へてゐた。

デルレイドは南の太陽の子である。日焦けのした浅黒い顔、栗色の頭髪を無雑作に後へ搔上げて理知的な廣い額を露にしてゐる。シャロットを視詰めてゐる彼の眼には、限りない同情が溢れてゐる。彼は最後に立つてこの若い女性を辯護する爲に熱情を籠めた溜舌をした。ジュリエットは彼の豪膽な振舞に驚異の眼を睜つた。シャロット・コルデイを辯護するといふことは、取りも直さず人民の友マロウの死を肯定するに等しい。尤もデルレイドはシャロットを辯護するといふよりも、寧ろ人々の同情に訴へて彼女を死刑から救はうとしたのであつた。彼の言葉は荒み果てた巴里の人々の心に僅ながらも人間らしい興味を呼起したらしかつた。

ジュリエットは憎悪に燃えてゐる市民達か不思議にも温順しくデルレイドの言葉に耳を傾けてゐるのを見た。彼等は平常から、斯る演舌者に對して、凡ゆる悪罵を浴せかける筈であるのに只、「デルレイド様だよ。」と囁き合つてゐるのみであつた。その朝デルレイドは大きな病院を貧しい病める兒童

等の爲に開放した許りである。さればこそ市民等は斯うして彼に思ふまゝを喋らせておくのである。ダントンや、マアリンさへも、

「デルレイドだもの、いひただけの事を云はせておくさ。死んだマロウが『彼は危険人物に非ず』と斷言したのだからいゝだらう。」と僅に肩を窄めただけであつた。

だがデルレイドの熱辯も、終にシャロット・コルデイを斷頭臺から救ふ事は出来なかつた。ジュリエットは雄々しく使命を果し得たシャロットを羨望と同情の眸をもつて見上げた。そして名門の子女である自分は決してこの田舎娘に負けてはならないと強い決心を抱いて乳母の家へ歸つたのであつた。

その日以来、ジュリエットはデルレイドの家の附近を徘徊して機會を待つた。彼女は幾度かデルレイドの姿を見掛けた。或時は玄關の扉口から出てくる所、そしてその暗い廊下に立つて見送つてゐる老婦人の氣高い姿と、偏癩の少女の姿を見た事もあつた。また或時はその哀れな少女が、野菜を入れた籠をさげて街を歩いてゐた。そこへ來合せたデルレイドが、その籠を自分で持つて少女を劬りながら家の方へ竝んで歩いてゆくのを目撃した事もあつた。ジュリエットは自分の敵と目してゐる相手であるに拘らず、デルレイドの行爲が凡て雄々しく武士的である事を感じずにはゐられなかつた。だがジュリエットは神への誓ひを果す爲に、竟に機會を掴むで、兄を殺した男の家へ入つたのであつた。神は果して彼女を如何に導くであらう？

三、歡待

「お嬢様、何か他に御用はございませんか。」といふ優しい聲にジュリエットは過去の思出から呼び起された。彼女はアンミイに微笑して手を差延べた。

「眞實に親切にして下さつて有難う、私、最う起きて皆様にお禮を申し上げたいの。」

「でもすつかり良くおなりになるまで、お起床にならない方がようございますわ。」

「もう大丈夫よ。あの人達が餘り恐しいんで私氣絶して了つたんですわ。」

「眞實に恐しい人達ですわね。でもデルレイド様がすつかり鎮めてお了ひになりましたのよ。あの方は逆も綺麗な聲をもつていらつしやるから、どんな人でもあの聲に魅せられてあの方の仰有る事を聞いて了ふのですわ。」

「貴女は眞實にあの方を好いていらつしやるのでせうね。」さういつた時、何か識らずジュリエットの胸に涙が込上げてきた。

「え、私、あの方を眞實にいゝ方だと思つてをります。あの方とそれからお母様とが私を育て、下さりましたの。私には両親がございせんから、あの方々お二人が私をこれまでに育て、下さりましたのです。」少女の眼は言葉以上の感謝と愛に輝いた。それが彼女の青褪めた顔を美しく見せた。

「貴女のお名前は？」

「アンミイ。」

「私はジュリエット・マアネイ、私も矢張り両親はございせんわ。乳母のベトロネルに育て、貰つてゐます。貴女もつとデルレイド様の事をお話して下さらない、私こんなにお世話になつたんですもの、あの方の事をもつと伺ひたいわ。」

「それより貴女のお頭髪をあげさせて頂きませうか。デルレイド様はお母様と一緒にお客様にいらつしやいますから、あちらへいらしつてお會ひになればよろしいわ。」

アンミイは、甲斐々々しくジュリエットの亂れた頭髪を調べ、新しいレースをジュリエットの胸に飾つたりした。ジュリエットはアンミイに優しくされて涙ぐましくなつた。そして彼女がデルレイドにとつてどんな地位にあるのかといふことが頻りに氣になつた。

客間にゐたデルレイドはジュリエットに普通の挨拶を済すと、再び老婦人の方を向いて話續けた。巴里の暴動、殺氣立つてゐる群衆の心理、及びそれ等の無智な群衆に對する同情等に就いて話つた。彼はジュリエットやアンミイの存在を忘れたやうな様子で熱心に言葉を續けてゐたが、ふと氣がついたやうに暗くなつた窓の外を見た。そして改めてジュリエットを顧みて、

「お嬢様、貴女は當分こゝにお止りになつた方が安全だと思ひます。私の家においでになれば、誰も貴女に危害を加へるものはありませんが、一步外へおいでになると、先刻も御承知の通りの有様ですから、近所のもの達は何をすることも知れませぬ。」

「でも、私、歸らなくてはなりませんわ。いろ／＼と御親切にして下さつて有難うございます。私、ペトロネルが心配するといけませんから……」

「ペトロネルと仰有るのは？」

「私の年老つた乳母で御座いますわ。私がこんなに永く家を空けてどんなに心配してゐる事でせう。」

「お宅は何處でございます？」

「テイポウ街十五番地でございますの。でも……」

「では私がお使ひに参りませうか、そしてお嬢様がこちらに無事でいらつしやる事を話して参りませう。」

「恐入ります。若しそれが一番よいと思召すなら……」

ジュリエットは慄へる心をちつと押へてゐた。神は彼女をこの家へ導いた許りでなく、この家へとどまる機會を與へた。

「お嬢様、何といふお名前でお使ひに参つたらよろしいのでせうか。」デルレイドは訊ねた。

「私の名はジュリエット・マアネイと申します。」彼女はデルレイドの顔を鋭く凝視してゐた。けれども彼の表情に富むだ顔にも格別その名に就いて思ひ出したやうな様子は見えなかつた。十年といへば長い月日であつた。殊に世の中の移り變りの激しいその頃の人々にとつてはかなり遠い昔であつた。デルレイドがマアネイといふ名を忘れて了つたといふ事を知つた瞬間、ジュリエットの胸に憤怒の波

が湧起つた。彼にとつてその名はなんでもないのか！ 彼の手を血に染めた事實を、彼は思ひ出しもしないのである。それなのに、彼女は過去つた十年間をその一事に就いて悩みとほしてきたのではな

いか！

デルレイドは丁寧（ていねい）に頭を下げて部屋を出ていつた。

憤怒の波は退いて了つた。彼女はデルレイドの母親と二人きりになつた。そこへアンミイが入つてきた。三人は主人の歸宅を待つ間、穩かな氣持で世上の噂をした。ジュリエットは自分でも不思議な程、幸福な氣持になつてゐた。永い間孤獨な生活を續けてゐたジュリエットにとつて、この洗練された家庭の空氣は殊の外好しかつた。彼女が幼い日を送つた宮殿のやうな生活とは及びもつかないが、そこは豊かな趣味と、温かい愛に溢れた清らかな家庭であつた。

デルレイドが歸つてくると、家の中の空氣は一入明るくなつた。デルレイドが戸外へ出ていつた頃には、さしも混亂を極めてゐた群衆も鳴りを鎮めてゐた。そして彼が人民の爲に寄附をした病院の前を通つた時には、群衆は彼の爲に萬歳を唱へた程であつた。

彼はペトロネルを伴つて歸つてきた。老いたる乳母は若い主人が暴徒の手から救はれて、その上自分までが斯うして同じ屋根の下に匿つて貰ふやうになつた事を涙を流して喜むだ。デルレイドは世間の雲行が悪いから、それが鎮まるまでこの二人の客を匿まつておいて、機會を見て英國へ送らうといふ意嚮を洩した。誠に佛蘭西の貴族にとつて英國は樂園である。だがそこへゆくには「紅ハコベ」

といふ綽名をとつてゐる神出鬼没の勇士の手に継るより他はなかつた。

四、忠實な番犬

晩餐の後、シャロット・コルデイが話題に上つた。ジュリエットは女丈夫の幻をしつかりと掴むでゐた。そして彼女に就いて語る事を好むだ。彼女は又ポウル・デルレイドの言葉に耳を傾けるのを好むだ。熱するにつれて彼の顔は輝いてきた。ジュリエットはその場で改めて自分がマアネイ侯爵の娘として名乗りをあげた。そしてわざと兄が決闘で敵の刃に仆れた事も附加へた。その時彼女はデルレイドが探るやうに自分を視詰めてゐるのに氣付いた。彼はジュリエットが凡ての事情を知つてゐるのかどうかと疑ひをもつてゐたのである。然しながら彼女は怖れ氣もなく相手の顔を見かへしたので、そこに何の蟠りもない事を認めてほつとしたらしかつた。

老婦人はその決闘に就いては何も知らないらしかつた。デルレイドはジュリエットに兄の事を話し出すやうにしむけた。彼女は彼の間に對して一々あからさまに應へた。けれども彼女の應答のうちには兄を殺した相手が何者であるかを暗示してゐる言葉はなかつた。

彼女は彼が自分の心に潛むでゐる敵意に氣がついて自分に警戒してくれよといふやうに慮へた。然しながらデルレイドにはそんな氣振りは微塵も見えなかつた。それどころか、「では、英國へ旅立つ用意が出来ますまでは、ゆつくりこの家に御滞在なさい。」と恰もさうした離

別のくる日を悲しむやうに溜息さへ洩すのであつた。彼の態度は何處までも公明正大で、マアネイ侯爵家に與へた損害に對して、何のはゞかるところもないらしく見えた。事實、デルレイドとしては、若いマアネイ侯爵の嗣子を殺したのは自分の意志ではなくて、運命の意志であつた。そして、今またその運命がこゝで自分の殺した男の妹を救ふべきめぐり合せにくれたことを感謝してゐたのである。

デルレイドとジュリエットが話をしてゐる間に、アンミイは食事の後片付けを済して、老婦人の傍に腰を下した。彼女は皆の話には加はらなかつたが、ジュリエットは折々彼女の陰鬱な眼が自分を咎めるやうにちつと見据ゑてゐるのを感じた。

ジュリエットがペトロネルと共に寢室へ退いた後で、デルレイドはアンミイの手をとつて、「アンミイや、私のお客に親切にしておくれね。あの方は大變淋しい境涯だし、それにいろ／＼と不運に會つてこられた方だからね。」といつた。

「これ以上に親切なんて出来ませんわ。」若い娘は拗ねたやうに呟いた。

「アンミイ、どうしたの、お前は幸福ぢやアないの？」

「こんな不具者がどうして幸福になんかなれませう。」アンミイの眼には涙が溢れ出てきた。

「そんなことをいふものぢやアない。私はお前を不具者だなんて思つてゐませんよ。お母様だつて同じことだ。お前は家の優しい、温順しいアンミイぢやアないか。」

アンミイはさういはれると、急にデルレイドに縋りついて、

「御免なさいね、私、今晚は餘程どうかしてゐるんですわ。貴郎は私にあのお嬢様に親切にしてあげると仰有つたのですわね。え、屹度……」とつとめて笑顔を作つて應へた。

デルレイドは微笑をもつて首肯した。

「それや私、あの方に親切にしてあげますわ。誰だつて、あんなに若くつて、あんなに美しくつて大きな愁しい瞳をして、柔い金髪をもつた方には親切にしますわ。眞實に綺麗な方つて幸福ですわね。貴郎は私にどうしろと仰有るの、あの方の召使のやうにすればいいの？ よう御座いますわ。私のはあの方の眼から見れば屹度可哀想な不具者で、無害で、そして必要な番犬のやうに見えるかも知れませんけれど、貴郎が親切にしてあげて欲しいと仰有るなら、私、どんな事でも致しますわ。」アンミイは鳥渡口を閉ぢて、

「左様なら、お寝みなさいまし。」と燭臺を取上げて淋しさうに部屋を出ていつた。

デルレイドが自分の眼から見れば不具ではないといつたアンミイの背は醜くもれ上つて、風に揺めく蠟燭の火影を受けた青白い瘡せた顔は悲哀そのものゝやうに見えた。

「さうだわ、私は大切な番犬の役を勤めませう。私はあ的美丽なお嬢様を信ずる事は出来ませんわ。今日の午後の不思議なお芝居！ 何も彼も腑に落ちない。」アンミイは廊下へ出ると、自分にいひきかせるやうに獨言を云つた。

五、森の一日

佛蘭西國民が革命の血を流して、美しい巴里の市を戦禍の巷としてゐる時、夫等を他にして自然は大地の上に麗はしい春を訪れさせてゐた。

主を失つた籬の薔薇は、香り高い花をつけて蒼空の下に微笑してゐた。泥靴に踏み躪られた野には可憐な雛芥子の花が緋毛氈を敷詰めてゐた。

ジュリエットはその朝夙く乳母のペトロネルを連れてデルレイドの家を出た。彼女は用意してきた辨當を森の中で開いて、思ふまま自然の景色や小鳥の唄を楽しむで、日暮までに家に戻る豫定であつた。森の中は明るく、平和に満ちてゐた。そこには巴里の恐しい騒擾も、忌はしいギロチンの響も届かなかつた。凡てがありし日のまゝに、麗はしく、穏かであつた。

ジュリエットは眞實に楽しい一日を過した。彼女は充分に花を愛で、樹木を愛撫し、小鳥と親しむだ。乳母のペトロネルはジュリエットの心を察して黙々として躑いて歩いてゐた。

聴て夕刻になると、ジュリエットは悲し氣に溜息をして家路に向ふ小徑へ出た。彼女はデルレイドの母の忠告に従つて閑命黨員の徽章である三色の紐を腰に巻いて赤い三角帽を被つてゐた。そして兩手に餘る花束を抱へて緑の樹蔭を急いで歩いてゐたが、突然、行手の繁みに何者か近づいてくる登音をきいて、道路の眞中に立止つた。木の葉がかさ／＼と揺れて、不意に彼女の目の前に現はれたの

は、ポウル・テルレイドであつた。

「家のもの達が、大變貴女の事を心配してをりましたものですから……」デルレイドは辯疏がましくいつた。

「それで、お母様の御心配を鎮める爲に、私を探しにいらしつて下さいましたのね。」彼女は子供らしく晴やかに笑つた。彼女は、この楽しい一日が若いデルレイドの出現によつて更に申分のないものになつた事を感じた。若くて美しい彼女の同伴者として、ペトロネルは餘りに陰氣であつた。

「でも、どうして貴郎は私がこゝにゐる事を御存じでしたの？」ジュリエットは少し、燥いだやうな氣持になつてゐた。

「家のものから聞いたのです。貴女方が森を抜けて家へ歸るときいて、私は非常に驚きました。こゝをいらつしやれば、西北の關門に出ますでせう……」

「それで？」

「お了解になりませんか。三色の布と赤い帽子だけでは決して充分な變装とはいへません、貴女のお召物や、肩にかけたレースが貴女の身分を語り過ぎてゐます。」

「このモスリンの着物が？」ジュリエットは襪の多いスカートを撮上げて、嬌態をつくつて笑つた。「餘りに不注意です。」

「それでは私にゴツツの木綿着物を着た方が似合ふと仰有るの？」

「そんな風に仰有られると恐縮ですが、私は非常に貴女のお身を案じてゐるものですから……」

「どうして私の事などそんなに御案じ下さいますの？」ジュリエットはごく氣輕にいつたつもりであつたが、彼女の調子には侯爵の令嬢であるといふ誇があつた。

「差出がましいと仰有るのですか。」デルレイドはいくらかむつとした様子でいつた。

「随分いろ／＼と御厄介になりましたのに、この上御迷惑をかけては濟まないと思存して……」

「迷惑なんて、そんな事は決して御座いません、それどころか私の方で御禮を申上げなくてはならぬのです。」

「お禮？ 私は何を致しましたでせう？」

「貴女は私の家の前で、あんな向う見ずなことをなすつて、私の胸に宿つてゐた良心の重荷を幾分でも軽くする機會を與へて下さつたからです。」

「どういふ譯でございますの？」

「私は運命が、私をして貴女の御家族の一人に、たとへ少しでも奉仕する機會を與へてくれるとは思ひもありませんでした。」

「私は先日、貴郎に危いところを救つて頂いた事を存じてをります。私は貴郎のお庇で生命拾ひを致しました。」

「それと同時に、貴女はお兄様が私によつて生命を喪はれた事を御存知でいらつしやいますか。」

ジュリエットはこのやうに突然、何の豫告もなく、心の傷に觸れられて、潛めてゐた悲哀が一時に湧上つてくるのを覺えた。彼女は、肩を嚙むで應へなかつた。

「私は最初からこの事を貴女にお話ししようと思つてゐたのです。この數日間、貴女にお目にかゝりながら、何にも申し上げないといふことは、自分としてはまるで貴女を瞞してゐるやうな氣がして、實に心苦しかつたのです。私は決してこんなことを申し上げたくはなかつたのです。然し他日貴女が私の屋根の下で數日をお過しなすつた事を遺憾に思はれるやうなことがあつてはならないと思ひまして、自分の感情を殺して、事實をお耳に入れるのです。いつか貴女に私の心持を了解して頂ける時がくると思ひます。私はお兄様を正當な決闘で仆しました。而もそれは私にとつて賣られた喧嘩で御座いました。男として耐へられない程の屈辱を経て、竟に心にもなく劍の束に手をかけました。それで……」

「デルレイド様、今更、そんなことを私にお聞かせ遊ばす必要が御座いますでせうか。」

「私は一應、凡ての事情をお耳に入れさせて頂く必要があると思ひました。」

「ですけれども、一方私は最早兄の立場からの辯明をきく便がないといふ事を御承知願ひたいと存じます。」ジュリエットは思はず烈しい言葉を口にして了つた。と同時に、それが相手にとつて餘りに残酷な宣言であると氣付いて言過ぎを悔むだ。彼女は泪の中からちらと青褪めたデルレイドの顔を見遣つた。森は靜まり返つてゐた。いつか三人は森を抜けて市街に近づいてゐた。遠くの空に大砲の音が響いた。それは關門を閉める合圖の號砲であつた。

「あゝ、もう關門が閉ります。貴女方にお目にかゝれて眞實に幸でした。」デルレイドは永い沈黙の後で靜かにいつた。

「眞實に御親切に有難う御座いました。私の申上げたことは、何卒お氣にお留めなさらなさいで下さいまし、私、そんなつもりではなかつたので御座いますから。」ジュリエットは弱々しくいつた。

「何卒もう何にも仰有らないで下さい。私には貴女のお氣持がよく解ります。」

「切角で御座いますけれども、私は矢張り乳母の家へ歸らせて頂く方がいと存じます。こんなに御親切にして頂いてゐながら、眞實に何といふ恩知らずなんで御座いませう、あんな失禮なことを申し上げたりして……」

「然し、何にも知らない母になるべく心配をさせたくないと思ひますから、御一緒に宅へいらして頂ければ大變幸ひだと存じます。御承知の通り、あの附近の亂暴者達も、私達一家に對しては非常に好感をもつてゐてくれますから、貴女を安全にお匿ひ申す事が出来ます。」

「でも、貴郎が……」

「その點は御氣遣ひの必要はありません。私はもう貴女のお目障りになるやうなことはありませんから……貴女がどんなに私を憎くお思ひになるか、私にはよく解ります。然し私の眞實だけは受容れて頂きたいものです。」

「貴郎はどちらへかおいで遊ばすのでございますか。」

「巴里を離れる譯ではありません。私はコンシエルヂエリの典獄に任命されましたから。」

「あゝ、あのお気毒な女王様がおろで遊ばす……」ジュリエットは急いで唇を閉じた。女王に同情を寄せた言葉を洩らしただけでも叛逆者の名を負はされる時世であるといふことに氣付いたからである。彼女はその當時の人々が斯うした場合、誰でもするやうに思はず四邊を見廻した。

「御心配なさる事はありません。こゝにはペトロネルの他誰もをりませんから。」

「それから貴郎も……」

「私ですか、私なら貴女のお言葉に應ずる事が出来ます。お気毒なマリイ・マントワネット女王！」

「まア、貴郎は女王様に御同情なさいますの？」

「勿論の事です。」

「でも貴郎は恐しい革命黨の委員で、王様に死刑の宣告を下したと同じやうに、女王様にも残酷な宣告を下す人達の一人では御座いませんか。」

「如何にも私は國民委員の一人です。けれども私は女王様に死刑の宣告を下すやうな事は致しません。私がコンシエルヂエリの典獄になつてゆくのも、出来れば女王様を救出したいと思ふからです。」

「でも、そんな事を遊ばしたら、貴郎の御生命は？」

「無論、棄てゝかゝります。」デルレイドは事もなげに答へた。ジュリエットは驚愕の眼を睜つて相手の静かな顔を見成つた。

「いつお出立になります？」

「明晩です。」

ジュリエットはそれつきり何も云はなかつた。彼女の心は不思議に暗くなつた。首垂れて歩いてゆくジュリエットの手から、森の中で集めた花が一つ一つ墜ちていつた。最初空色の花が地にこぼれた。續いて白い花が京帷子のやうに草の上に敷かれた。最後に残つてゐた眞紅な芥子の花が、血のやうに彼女の白い靴の下に落ちた。

デルレイドもぢつと思ひに沈むで、黙々として歩いてゐたが、關門までくると我に返つたやうに、懷中から門鑑を出して、二人を通した。

彼等の背後に大きな鐵の扉が閉ぢられた時、ジュリエットは身慄ひをした。それは恰も幸福な日の思出を永遠に閉込めて了ふやうに思はれた。

六、紅ハコ

夫から數時間の後であつた。客間に集つてゐた女達は氣遣はしげに耳を澄して、書齋の氣勢を窺つてゐた。

晚餐後間もなく來客があつた。ポウル・デルレイドは二時間餘り書齋に籠つて、何事かひそくと語り合つてゐた。

デルレイドと向合つてゐるのは脊の高い、何處か間延のした顔付の紳士であつた。傍の椅子の上
に無難作に投かけてある外套は、酷く砂塵を浴びて赤茶けてゐた。けれども彼自身のつけてゐる服は
洗練された趣味と、申分のない仕立振であつた。そして彼の言葉付には明かに英國人の訛があつた。
二人は永い間熱心に語合つてゐた。英國人の顔には絶えず愉快らしい微笑が浮むでゐた。デルレ
イドは落着かない様子で折々部屋の中を歩きながら言葉を續けた。

「然しながらパーシー卿、貴郎が斯うして無事にパリに入つていらしたといふ事は實に奇蹟です。
どうしてそんな事が出来たのです。政府ぢやアまだなか／＼『紅ハコベ』を忘れやしませんよ。」デ
ルレイドは心配さうに相手の肩に手をおいていつた。

「その事は私だつて心得てゐますよ。だから今朝、チンビユのところへちやんと通告状を發しておき
ました。」

「何て亂暴なことです。」

「矢鱈に人間を斷頭臺に送つてゐる佛蘭西人ほど亂暴ぢやアありませんよ。私はねこの國の連中が相
變らず亂暴浪籍を働いてゐるから、一體どういふ目的でそんなことをやるのか、それを見物する爲に
『晝の夢』に乗つてやつてきたのですよ。」

「そんな風に茶化して了はないで下さい、眞實にどういふ御用でいらしたのです。」

「いふまでもなく『紅ハコベ』の活躍ですよ。吾々は、暴虐な佛蘭西市民の手から女王を救出さ

うとしてゐるのです。」

「吾々もその事は竊に畫策中なんです。」

「それは私も存じてをりますよ。だからこそ斯うして危険を冒してやつてきたのです。それで今朝私
は革命政府に向つて、例の『紅ハコベ』の署名をした通告状を發した譯です。」

「それで？」

「結果は明瞭です、ロベスピエール、ダントン、チンビユ、マアリン等といふ手合は屹度血眼になつて
私の行方を探すでせう——無論枯草の中で針を探すやうなものですかね、——詰りさうして革命黨員
等が吾々を探すのに夢中になつてゐる隙に乗じて貴郎は女王を救出し私の『晝の夢』にお乗せ申し
て無事に英國へ渡らうといふ筋書なんです。」

「けれどもさうかうしてゐるうちに貴郎は屹度見付かるでせう。今度こそ貴郎をのがすやうな事はな
いだらうと思ひます。」

「さうはいふものゝ、テリアが癩癩を起すと、鼠を捕へ損なふものですよ。私がチンビユの指の間を
潛つて逃げて以來、革命政府は憤慨の餘り盲目になつてゐますからね、こつちはこの通り非常に氣樂
で、胡瓜の如く冷靜になつてゐます。これで近頃は私の生命も中々大切になつてきました。私が歸らな
いと海の向うで泣く人が出来ましたからね。そんな譯で『紅ハコベ』は中々もつて敵の手に落ちませ
ん。」パーシー卿は快活に高笑した。彼の顔は英國に待つてゐる美しい妻を想ふ愛の光に輝いた。

「それだのに 貴郎は私が女王を救出す計畫に加擔して下さらないと仰有るのですか。」デルレイドは詰るやうにいつた。

「無論、貴郎が失敗した場合には必ず吾々の一團が乗込んで貴郎方をそっくり救出す心算です。」
「吾々は失敗しません。」デルレイドは昂然と云つた。パーシー卿は傍へいつて女のやうな華奢な手をデルレイドの肩において。

「貴郎の計畫を話してくれませんか。」と優しく云つた。

「實際の事をいへば、佛蘭西國民の過半は吾々と思ひを同じくしてゐるのでせうが、吾々の同志として加はつてゐるのは數へる程しかありません。然し吾々は充分な資金と、方法手段をもつてゐます。現在のところ私はコンシエルヂエリの典獄の地位を得ましたから、明朝勿々赴任してゆくつもりです。同時に私は母と従妹を先に英國へ落延びさせる手筈をします。私はまだ市民の間に入望を得てをりますから、私の家族の者達は割に自由な行動を執る事が出来ます。そしていよく家族のものが無事に英國へ渡つた後に徐に私は次の行動に移ります。女王はまだ裁判に附されてをりませんから、いづれ法廷に引出される時があります、その機を掴んで私は女王に監視人の服を着せ申してお返し申上げるつもりです。私は毎晩獄中を巡視する役目をもつてをります、女王の獄房の隣りには二人の監視人がついてゐますが、奴等は大抵酒を飲んだり博奕をしたりしてゐますから、私はこの鐵拳で奴等二人を形付けて了ふ位難作ありません。その後で……」

「その後は一體どうしますか。監獄の外には二十五人の屈強な番兵があるではありませんか。」

「私は典獄ですから、監視人を伴へて……」

「何處へゆくのですか？」

「私は何處へなりと往來することは自由です。」

「然しながら、貴郎の連れて出てゆく監視人の顔はどうしますか。眞逆袋を被せて連出す譯にはゆかないでせう。私は巴里へついてまだ數時間にしかありませんが、血迷つた市民達は凡て女の顔さへ見れば誰でも監獄から逃出した女王ではないかと疑ふ有様だといふ事に氣付いてゐます。覆面した人間が一丁場だつて無事に通過出来る世の中ぢやありません。」

「さう仰有るが貴郎御自身が無事に巴里を通過出来ると思つていらつしやる以上、女王だつて監獄さへ出て了へば何うかなるだらうと思ひます。」

「男と女とは違ひます。殊に女王である以上は、何といつても女性性は心身共に弱いものです。貴郎は女王を肩に擔いでいつたり、船底に押込めてその上から荷物を積むなんて藝當が出来ると思ひますか、侯爵夫人とか、子爵の令嬢とかいふならまだしも、恐れ多くも女王をそれと同列にする事は出来ません。」

「それでは貴郎はどうしても女王を救出す事が不可能だと仰有るのですか。」

「まあ一口にいへばさうですね。吾々は不可能な事には決して手を出さない主義なんです。貴郎方の

企てには充分御同情しますが、失敗に終るといふ事は火を賭るより明かです。」

「貴郎方が援助して下さつたら必ず成功すると思ふのですけれども、貴郎方は曾て『紅ハコベ團』は決して失敗しない」と誇つていらしたではありませんか。」

「だからですよ。吾々は不可能な事には最初から手を出さないから、それで失敗しないのです。然してそんなに貴郎が仰有るなら、何とか考へて見ませう。」パーシー卿は不意に例の馬鹿笑ひをした。この哄笑こそパーシー卿の唯一の假面で、これまで二つの國の人々を巧みに偽瞞して卿の本體を隠してきたのである。

デルレイドは立上つて大きな檜造りの卓子の抽出しから一束の書類を出してきてパーシー卿に渡した。

「これに目を通して下さい。こゝに第二第三の方法が記してあります。」

「斯ういふものは焼却してお了ひなさい。證據書類は決して貽すものではありません。」

「焼却する譯にはゆきません。女王と言葉を交す機會は恐らくないだらうと思ひますから、この書類を女王に讀んで頂かなくてはならないのです。」

「こんな書類を所持してゐるよりも、寧ろ計畫が失敗に終つた方が遙に幸ひです。斯ういふものが萬一政府の手に入つたら、貴郎は斷頭臺を免れる事は出来ませんよ。」

「決してぬかりはありません。私は現在のところ全然疑惑などかけられる地位にはありませんから……こ

の書類の中にはその他に旅行券も揃つてゐます。この旅行券を完備させるまでには、私は數ヶ月を費して出来る限りの注意をもつてやりました。ですから……」デルレイドはパーシー卿の顔色を見て急に口を噤んだ。

戸口を見ると、厚いカーテンの蔭からジュリエットの蠱惑的な笑顔が覗いてゐた。白いモスリンの服を着た彼女の姿は痛々しいほど細りと小供らしく見えた。だが彼女の美しい顔は餘りに青褪めてゐた。

「お母様が大概御心配になつていらつしやいますの、そして私に見てこいと仰有いましたものですか……」ジュリエットは羞恥むだやうに小聲でいつた。

「どうも恐入ります。もうぢきですからと仰有つて下さいまし。あゝ私の友人、英國からきた私の友人パーシー卿です、御紹介申し上げます。パーシー卿この方はマアネイ侯爵の令嬢ジュリエット嬢です。」デルレイドは手早く書類を机の抽出しへ押込んで何気なく二人を引合せた。

パーシー卿の懶氣な眼が一瞬時鋭く輝いた。

七、警告

ジュリエットは来た時と同じやうに、聲音も立てずに立去つた。デルレイドは卓上の書類を折靴の中に入れて錠を下して鍵をポケットへ入れた。先前から夫等の仕草を黙つて眺めてゐたパーシー卿

は「矢張り、其書類を見ませう。其上で私の氣付いた點を御話しする方がいゝやうに思ひますから。」
といった。デルレイドは相手の眞意を解しかねたらしく、おつと卿の顔を視詰めてゐるが、
「さうですか、では御覽になつて頂きませう。その後で母にお會ひになつて下さい。」と云ひながら
再び書類を取出した。

「いや、今晚はもう遅いからお預りしていつて、宿へ歸つてからゆつくり拜見ませう。」

デルレイドは暫時躊躇した。パーシー卿は何も氣付かぬ風で悠々と服の衣紋をつくろひながら、

「それとも、私を信用する事は出来ませんか。」と笑ひながら云つた。

「信用しないのは私ではなくて、貴郎ではないでせうか。」

「これはしたり！」

「いや、私は貴郎のさうした御心遣ひを有難く思ひます。然し天使のやうな無垢な乙女に對して、多
少なりとも警戒される點に異議を申し上げねばなりません。」

「成程、私は又貴郎は一切の女性を見限つて了はれたものと許り思ひ込んでをりました。成程、戀の
奴となりましたね。」

「御言葉通りです。盲目になつてをるかも知れません。けれども恐らく望のない戀でありませう。」
デルレイドは愁しげに吐息を洩した。

「何故、望のない戀といはれるのです。」

「吾佛蘭西第一流の名門マアネイ侯爵の令嬢で、身體まで王黨ですから。」

「それで女王を救出さうなんて無謀な企てをされるのですね。」

「いや、決して左様いふ事はありません。私はジュリエット嬢を愛することを學ばぬ先から、女王を
お救ひ申さうと決心してをりました。只今申上げました通り、王黨のジュリエット嬢に對して疑念を
持つといふことは不當と御思ひになりませんか。」

「これは身に覺えない事ですな。私がいつあの令嬢を疑つたでせう。」

「御辯解なすつても駄目です。つい先刻まで何の役にも立たないとか、焼却して了へとか仰有つてい
らしたこの書類を今になつて急に目を通すから渡せなど、仰有つても筋が通りません。」

「現在でも、まだ私はそんな書類は何の役にもたゝないと思つてゐます。然し一應目を通しておけ
ば、尙更自分の意見を貴郎の前に力説する事が出来ると考へての申出です。お解りになりましたか。」

「然し今になつてこの書類を貴郎にお預けするといふ事は、ジュリエット嬢を信用しないやうな形に
なりますから、私としては非常に心苦しいのです。」

「貴郎は相變らず理想家ですな。」

「どうも止むを得ません。私は既に三週間、彼女と同じ屋根の下に過してきました。そして私は彼女
を愛するといふよりも、寧ろ聖女のやうに崇拜してゐるのです。」

「それぢやア、眞實の戀とはいへませんね。吾々が眞實の戀を知るには祭壇の上から偶像を引下し

て、自分と同じ地上に立たせて了はなくてはなりません。共に罪を犯し、共に悔い、共に悩み、共に悲しんだ上で初めてお互の靈魂を見出し合ひ、そこに深い愛が生れるのではありますまいか。貴郎は私の考へを餘りに現實的で詩も夢もないと思ふかも知れません。けれどももつと眞剣な戀をして御覽なさい。必ず私の云つた言葉の意味がお解りになります。

「解りました。それでも充分です。これ以上仰せになると、私はこの書類をジュリエット嬢の手に渡さなければ氣が濟ない事になります。」

八、アン・ミー

其晩遅く、デルレイド家を辭したパーシー卿は暗い街路を宿に向つて歩いてゆく途中不意にアン・ミーの臆病らしい聲に呼止められた。

「旦那様、恐入りますけれども、アン・ミーのお願ひに耳をかして下さいませ。」黒いスカーフに頭を包んだ彼女の顔は一層青褪めて悲しげに見えた。

「遠慮なく話して御覽、私に出来る事なら喜んでしてあげる。けれどもこんなところで立話は出来な

い。」パーシー卿は四邊にざわめく市民達の群を見廻した。

武装した兵士、軍服を繕ふ女達、燠爐を圍む老人達、巴里は全市を擧げて暴君を屠れといふ宣告を掲げて、夜も晝もその目的の爲に手に心に劍を磨いてゐる。

「密告法」が發表されて以來、市民は一層神經を尖らして鴉の目鷹の目で容疑者を物色してゐる。一度政府の投書函の中に密告状が投入されたが最後、如何なる身分を問はず忽ち捉へられて、ほんの形式だけの裁判を経て斷頭臺へ送られる世の中である。

「パーシー卿はアン・ミーと連立つて、人通りの稀な裏通りに足を向けた。

「貴女はその被りものを脱つた方がいゝでせう。愁ひ顔を隠したりしてゐると、却つて目立ちますから。貴女のお話といふのは？　デルレイドの事に關してとせう？」

「さうでございます。けれども私が伺ひたいと思ふのは、あのジュリエットといふ女のごとで御座います。貴郎はあの女をどうお思ひになります。あの人はわざと家の前で狂言をして、デルレイド様に助けて貰ふやうに仕組んだので御座います。」

「それから？」

「そして到頭思ひ通り家へ入りこんで、あゝして幾日も幾日もお客になつてをります。デルレイド様は幾度もあの方に英國へ渡ることをすゝめていらつしやるのに、あゝして家に留つてゐるといふことは怪しいではありませんか。」

「デルレイドを愛してゐるからではないのですか。」

「いゝえ、決してそんなことはありません。尤もデルレイド様を見るときあの方の眼は輝いてゐます。デルレイド様がお歸宅になる時間がくると、あの方は念入りにお化粧をしてそはくしてゐま

す。けれども私はあの方がデルレイド様を愛してゐるとはどうしても信じられません。若しあの方がデルレイド様に愛を捧げてゐるとしたら、それは餘程變つた愛だと思ひます。普通の女とは違ひます。尠くもデルレイド様の爲にならない愛だと思ひます。」

「どうして貴女はそんな風に考へるのかね。」

「自分でも解りません。多分直感とでもいふのでせうか。」

「さうではないでせう。」

「どうして、御座いますか。」

「貴女がデルレイドに戀をしてゐるからでせう。貴女の氣持はよくお察し出來ます。若し出來る事なら、どんなにでもお力になつてあげたいと思ひますが。」

「え、私是非、貴郎様にお力になつて頂きたう御座います。デルレイド様にあの女の危険なことを知らせてあげて頂きたう御座います。」

「中々、私の忠告に耳を傾けますまい。」

「でも、男といふものは男の忠告をきくもので御座います。」

「大抵の場合は……然し愛してゐる女に關する場合は例外です。」パーシー卿は最後の言葉を非常に優しく、然し斷乎たる口調でいつた。彼はこの哀れな不具の娘が、どんなに悲しい戀をしてゐるかを察して同情してゐた。又彼はデルレイドが身も魂も打込んでゐる美しい令嬢に對して、アンミイと

同じく本能的に危険を感じてゐた。けれども今の場合、パーシー卿としては唯傍觀してゐるより他、何の手だてもなかつた。

「貴郎は眞實にデルレイド様があの人を愛してゐると思召すので御座いますか。」アンミイは思切つ

たやうに訊ねた。

「慥にさうだと思ひます。」

「ではあの人の方では？」

「さあ、どんなものでせう。貴女の直感を信じなくてはならないと思ひます。女の直感といふものは

確かなものです。」

「あの方は騙り者です。あゝしてデルレイド様を誑して密に謀叛を企てゝゐるのです。」

「吾々は時機を待つより他、仕方がありません。怠りなく注意してゐる事です。」

「お願ひで御座います。何卒、あの女をあの方から離して下さい。」

「それだけは私の力の及ばない事です。デルレイドのやうな男は一生に一度より戀をしない男です。」

アンミイは唇をかみしめて、黙り込んで了つた。パーシー卿は彼女が如何に失望したかを知つてゐた。

「デルレイドを密に護るのは貴女の役目です。吾々は彼の身の安全に就いては聊かも危惧する事はないと思ひます。」

「え、よく見張つてゐませう。」アンミイは靜に答へた。彼女は最初家を拔出してパーシー卿の後を追つた時は、あれもこれもと望みをもつてゐたけれども、斯うして會つた結果は何の得るところもなかつた。彼女は恰も水に溺れるものが、手にふるゝ何ものをも掴まうとするやうな絶望的な氣持で、頼りない機會を掴まうとしてゐた。パーシー卿の言葉は道理であるかも知れない。デルレイドは一生に一度より戀をしない……彼は偏癡のアンミイを限りなく憐れんではゐたが、決して愛したことはなかつた。憐憫は戀愛に等しいといふ古人の言葉を、どうしてアンミイの場合にあてはめる事が出来やう。

九、嫉妬

パーシー卿に送られて家の前までくると、アンミイは玄關の鍵を出して、そつと扉を開けて、小さな幽霊のやうに、登音も立てずに階段を上つていつた。

階段を上りきつたところで、彼女は丁度部屋から出てきたデルレイドに會つた。まだ彼女は晝間のままの服装をしてゐた。

「アンミイや！」彼は烈しい息づかひをしながら青褪めた顔をして立つてゐるアンミイを見守りながらいつた。

「あゝ、私の事を心配して下さいましたの？」アンミイは暫時して云つた。

「心配したどころではないよ。お前がこんなに遅くなつてから、單獨で外出したのを知つてから、今まで私は心配で心配で生きた氣はしなかつた。」

「どうして私が外出した事を御存知でしたの？」

「ジュリエットさんが一時間許りに私の部屋の戸を叩いて知らせて下さつたのだよ。あの方がお前の部屋へいらしたつたら不在だつたので、家中探した擧句、心配なすつて私のところへいらしたのだよ。吾々は無論お母様のお耳には入れなかつたけれども、お前が何處へいつてゐたかなどいふ事は訊きませんが、アンミイや、これからは決して二度とこんなに遅く外出しないでくれよ。お前も知つてゐる通り、巴リの街は危険なんだから……お前を愛してゐるもの達の事を忘れてはならない。」

「私を愛してゐて下さる方達！」アンミイは悲しげに呟いた。

「お前は私と一緒に行くてくれといへばよかつたのに。」

「でも私ひとりでゆきたかつたのです。私はパーシー卿にお話があつたので御座います。」

「何に？ パーシー卿に？ 一體どんな用があつたの？」デルレイドは眼を睜つた。

「私は大變心配なことがありましたから、あの方に救つて頂けるかと思つたので御座います。」

「どうして私のところへ相談に來なかつたの？—デルレイドの優しい言葉の中にも咎めるやうなところがあつた。日頃から内氣な彼女に似合はぬ大膽な行爲に不審を抱いたのであつた。

「私の心配は貴郎に關する事で御座いますわ、それなのに貴郎は馬鹿にしてお了ひなさる……」

「アンミイや、私は決してお前を馬鹿にした事はない。だが何故お前は私の事をそんなに心配するの？」

「何故かと申しますと、貴郎は盲目になつて危険な淵を歩いていらつしやるからです。そして貴郎は信用してならない方を一番信用していらつしやるからです。」

デルレイドは唇を衝いて出ようとする荒い言葉を堰止めるやうに口を堅く噤んだ。

「お前は私に親友のパーシー卿を信じてはならないといふのかい。」

「いゝえ。」

「それぢやア、お前は何も心配する事はない。お前は詳しい事は何にも知らないだらうが、あの方は私の最も親しい友達の一人なのだ。現在吾々の周囲にゐる人達はみんな信じてもいい人達なのだ。」

デルレイドは熱心に諭して慄へてゐるアンミイの小さな手をとつた。アンミイは自分の心の中をデルレイドに見抜かれた事を知つてゐた。そして自分の仕打に對して深く愧ぢてゐた。彼女の胸は過去三週間、嫉妬に訶れてゐた。けれども尠くも彼女は人知れずその惱みと戦つてゐた。彼女はその痛手に何もかも觸れる事をも許さなかつた。然るに今彼女自身の行爲によつてこの事實を二人の男性に知られて了つた。二人とも親切で同情深かつた。けれどもデルレイドは彼女の由ない疑惑を憤り、パーシー卿は彼女を救ふ手段を持たなかつた。

アンミイの胸は後悔の波に洗はれた。彼女は自分の心ばせが如何にはしたなく卑しいものであるか

に氣付いた。そして若しデルレイドの心に映じた自分の醜い嫉妬の影を消し去る事が出来たなら、生命をすてゝもいゝとさへ思つた。彼女は今や斯うなつた上は、せめて心の奥に秘めてゐる戀を彼に悟られないで済ましたいと思つた。

彼女は彼の思ひを讀まうとした。然しながらデルレイドの部屋から薄明りが射してくるだけで廊下は暗く、彼の表情を見る事は出来なかつた。然し彼の手は温かく優しかつた。彼女は自分が憐まれてゐるのを感じて赧くなつた。そして周章で挨拶をして自分の部屋へ逃込んで了つた。

十、密告

ジュリエットは其夜、涙と共に祈りながら心の争闘を續けてゐた。一方には亡き父や兄に對する骨肉の愛、一方には正義同情、そしてもう一つは彼女には説明し難い氣持があつた。だが彼女は如何に打消さうとしても、十年前に父が兄の死骸の前で唱へた呪詛の言葉は彼女の耳許に鳴響いてゐるではないか！そして彼女自身もその言葉を神の前に繰返したではないか！

「吾はポール・デルレイドを探し出す事を誓ひ奉る。吾が兄の死に復讐せんが爲に神の御心のまゝに彼を肉體的に殺し、或は精神的に滅さん。若し吾この誓ひを破らば最後の審判の日來るまでわが兄の靈魂は地獄の水火に訶まるべし、されどこの誓ひの遂げられたる日より吾が兄の靈魂は永久の平和に蘇らん。」

牀に跪いてゐるジュリエットは十年前の光景と共に、それ等の誓ひの言葉の一句々々をまさしく想起した。彼女は恰も自分の傍に兄と父とが立つてゐて彼女の決心を促してゐるやうに感じた。彼女はその晩偶然にもパーシー卿とデルレイドとの密談の一部始終をきいて、デルレイドが密に王黨に加擔してゐる事を知つた。彼女は斯うして遂に神の導きによつてデルレイドの家に入り込む機会を與へられ、更にデルレイドの生命を握る事が出来たのである。

ジュリエットは牀に跪いたまゝ、數時間を過した。その間にアンミイの歸宅したのも、デルレイドが彼女を階段の上で迎へたのもきいてゐた。その時、彼女は最も烈しい懊惱を感じた。優しいデルレイドの母、可哀想な偏癡のアンミイ、その二人の事を考へると彼女の決心もくらくのであつた。何も知らないその二人にまで重い悲哀を負はせなければならぬといふ事は耐へ難いことであつた。彼女は竟に涙を拭つて神に許可をねがひながら、靜かに床に入つた。然しながら烈しい感情が鎮まつて冷靜になつてゆくにつれて、彼女の頭腦にはシャロット・コルデイや、ジャンダークの雄々しい姿が浮むできた。彼女等は自分等の小さな感情を踏越えて國難に殉じたではないか。さう思ふと彼女は急に生れ更つた女のやうな強い心になつて床から跳起きて机に向ふのだつた。

疲勞果てた彼女の神經は異常な興奮によつて歪められて了つてゐた。彼女はまるでものに憑かれたやうにペンを執つて、さらくと密告狀を認めた。

申告

市民代表者ボウル・デルレイドは反逆者なり。彼はマリイ・アントワネットを獄舎より救出さんと目論見つゝあり、速刻市民デルレイドの邸宅を搜索せよ。然らば證據書類を發見するならん。

八月二十三日

彼女は書上げた密告狀を讀返すと、そのまゝ折疊むで懐中に入れた。そして黒いマントに身を包むで、密に邸宅を抜出した。

黎明の街には既に労働者の姿がちらほらと見えた。寂れた裏通りを抜けて、セーヌ河の畔へ出ると、工場へ急ぐ職工の群が橋を渡つてくるのに出會つた。河畔に立並んでゐる工場では籠の火が赤く、勢よく燃えてゐた。そこでは夜を日について軍器の製造にかゝつてゐた。行先々の四辻に立てられた告知板には、——佛蘭西市民よ、汝等自由の爲に武器を執つて立て——など、いふ文字が誌されてあつた。

聽てジュリエットはルウブル宮殿の前に辿りついた。曾ては佛蘭西の支配者ルキ王が榮華を誇つた宮殿の壁に、今は革命政府のポスターが見苦しく貼られてゐた。そして正門の扉に恐しい申告受函が口をあけて待つてゐた。この函に一枚の紙片を投ずる事によつて、何人をも反逆者として貪慾なギロチンの餌にして丁ふ。

流石にジュリエットはその函の前に立つた時、恐しさに躊躇したが、自らを叱咤して手に堅く握

りしめてゐた紙片を思切つて投込むで了つた。最早彼女は如何に騒がうと祈らうと、ボウル・デルレイドをギロチンから救ふ事は出来ない。

その前を通り合せた二三の人々は彼女が密告状を投函するのを見て、或者は呪詛の言葉を投げ、或者は肩を窄めて早足に通り返した。附近に遊ぶでゐた児童等は指を荷へて、好奇心に満ちた眼で彼女を見送つてゐた。

木造の大きな函はいくら食べても飽足らぬ魔者のやうに口を開けてゐる。

ジュリエットは役目を果すと、假の吾家へ向つた。いやそれは最早、彼女にとつて家庭ではなかつた。彼女は出来得ればその日のうちにその家を出なければならぬと思つた。

彼女は家へ歸る前に附近の喫茶店へ入つてパンと牛乳を注文した。店の亭主は迂散臭さうにじろじろと彼女を眺めた。何故なれば彼女は、魂の抜殻のやうに呆然としてゐたからである。彼女は最早何事を考へる氣力もなければ、自らの行爲を反省する餘裕もなかつたのである。

十一、復讐は吾にあり

ジュリエットは頭痛を口實にしてその日は大方自分の部屋に引籠つてゐた。彼女は自分の眞實の心を見詰めれば見詰める程、この世全體から自分を永久に隠しておきたいと思つた。殊に軽い食物などを運んできてくれるアンミイの顔を見ると彼女は一層惱まされた。

静かな家の中に物音が聞える毎に彼女はどきりとした。彼女に對して親切の限りを盡してくれた人達の頭上に復讐の劍をかざして了つた。彼女は老たるデルレイドの母や、アンミイの事を考へると慚愧に耐へなかつた。それよりも當のデルレイドの事を考へるのは尙苦しかつた。彼女はこれまでデルレイドに對する自分の感情を分析して見ようとはしなかつた。シャロット・コルデイの審問に立會つたデルレイドの聲をきいた時には、ジュリエットは彼に對して尊敬の念を抱いた。彼女はその時のデルレイドの雄々しさを忘れる事が出来なかつた。彼はコルデイの爲に必死となつて生命乞をしたではないか。その次に彼はジュリエットの爲にあの魅力のある聲を振つて暴徒を鎮めてくれたではないか。いつの場合にも彼女は心からデルレイドを憎む事が出来なかつた。今こそ彼女はデルレイドの存在を全く違つた意味から呪つてゐる。若しもデルレイドが斯んな風にして彼女の生涯に現はれなかつたならば、彼女はこれ程苦しまずに済むであらう。どうしても憎む事の出来ない人を憎まねばならぬ運命、彼女はこれが神の導とはどうしても信じられなかつた。悪魔の運命の導に違ひない。沈黙と寂寥に耐へかねてジュリエットはベトロネルを呼んで、旅立つ荷ごしらへを命じた。

「私達は今日、英國へ出發します。」

「英國へで御座いますか、こんなに急に？」一年老つた乳母は呆れたやうに若い主人の顔を見詰めた。

「急でもないではありませんか、前々から相談してゐた事だから、さういつまでもこゝに御厄介になつてゐる譯にもゆきませんもの。英國には從兄のクレシイさんや、伯母様がいらつしやるのだから、

ちとも心細い事はありませんわ。」

「でもお嬢様、お金ももう大して御座いませんし、それに旅行券も手に入れなくてはどうにもならないではございませんか。デルレイド様に御相談遊ばしたので御座いますか。」

「いゝえ、旅行免状の事なら、何とかして見ませう。パーシー卿は英國人ですから、あの方に伺つて見ませう。あの方の手から旅行免状を得られるかも知れません。」

「お嬢様はその旦那様が、何處にお住居ですか、御存知でいらつしやいますか。」

「えゝ、昨夜、こちらの奥様に宿の名を仰有つていらつしたから、私これから直ぐお訪ねして見ませう。英國の方つていふものは中々いゝ智慧をもつていらつしやるし、それに事務的だから屹度いゝやうにして下さるでせう。お前は荷造りをしていておくれ、その間に私、一寸いつてくるから。」

「ジュリエットはマントを腕にかけて部屋を出ていつた。デルレイドは早朝に外出した、彼女は彼がまだ歸つてゐない事を希ひながら、誰にも顔を合せずに家を出ようとした。家の中は閑寂として物音一つしなかつた。彼女は刻々と恐ろしい災難が追つてきてゐるこの家が、こんなな平和に満ちてゐるのが不思議に思はれた。遠くの臺所からアンミイの歌ふ聲が聞えてきた。

……落葉よ、落葉よ、

幹を離れて、お前は何處へゆく。……

ジュリエットは暫時の間釘付にされたやうに立つてゐた。彼女の胸を烈しい痛みが襲つた。過ぐる三週間、彼女を護つてゐてくれた此家の壁を見廻すにつれて、彼女の眼には思はず涙が溢れてきた。彼女も又、幹から離れた枯葉のやうに、家もなく、友もなく、唯ひとつ慰めと親切を與へてくれてゐるこの家さへも捨て、的もなく彷徨ひ出ようとしてゐるのである。

彼女の胸には良心が頭を擡げてきた。彼女は自ら手を下して、この一家の破滅を計つた。危機は刻々と迫つてゐる。彼女は恐ろしい結果を追ひ拂ふやうに眼を閉ぢた。

アンミイの、胸をうつやうな透通つた聲が尙も續いて響いてくる。

ジュリエットの痛み傷いてゐる心臓から駿泣がこみ上げてきた。凡てはもう遅い、彼女が三週間の間浸つてゐた幸福の夢は、狭霧の如く消えていつて、彼女は罪と共に明るみの中に立つてゐねばならない。隣れむべき乙女よ！ 彼女は恰も重荷に耐へきれぬやうに、今永久に捨て、ゆかうとするこの家の戸口に膝をついて了つた。

「ジュリエットさん！」それは彼女の背後の書齋から響いてくるデルレイドの聲であつた。その聲は會て公判廷でできた時と同じやうに不思議な魅力をもつてゐた。強い熱情のこもつた優しい響は、彼女の心にこだました。彼女は夢のやうに思つて坐つたまゝ、身動きもしないでゐた。

聴て彼の聲音が聞えてきた。アンミイの聲は遠くへ消えて了つた。ジュリエットは周章で立上つて

涙に濡れた眼を拭つた。彼女は彼に涙を見られたたくなかつた。彼女は自分の弱い心を鞭打つて、戸外へ出ようとしたが、その時も、デルレイドは彼女の間に立つてゐた。

「お出懸けですか。」

「え、一寸、そこまで……」

「何か私に出来る事でしたら致しませう。」

「いゝえ。」

「若し、大變お急ぎでなかつたら、一寸お話ししたい事があるのですけれども。書齋へおいでを願へないでせうか。」

「私はぢき戻つて参りますから、それからでは如何で御座いませう。」

「私は早速赴任しなければなりませんので、その前に貴女にしみじみとお別れを告げたいのです。」

ジュリエットは無言で彼の書齋へ入つていつた。西に向つた窓の板戸が八月の日光を遮る爲に閉ぢられてゐて、部屋の中は暗く、冷々としてゐた。

「眞實に有難う御座います。御存知の通り私は今日出發致しますので、是非貴女からお別れの言葉を頂きたいと思つたのです。」デルレイドは控目な調子で云つた。

ジュリエットの大きな燃えてゐる眼は、暗さに馴れるに従つて、間近に立つてゐるデルレイドの緊張した顔を讀む事が出来た。

書齋の中は整然としてゐた。片隅の方に旅行鞆が荷造りする許りになつて置いてある。その上に革製の折靴が乗せてあつた。ジュリエットは恐怖と眩惑に満ちた視線を靴の上に注いだ。それには疑ひもなくマリイアントワネットの脱獄を手引すべき機密書類が藏されてゐるのである。

ジュリエットはまるで鐵の爪で咽喉を締つけられてゐるやうに感じて頓には言葉が出なかつた。

「ジュリエットさん、私の門出を、祝福して下さいませんか。」彼は穩かにいつたが、その言葉は彼女の胸を刺すやうに皮肉に聞えた。彼の門出といへば、斷頭臺へゆく事ではないか、ジュリエットはやうくの事で、唇を開いたが、聲が嘎れて殆んど囁くやうだつた。

「御旅行と仰有つても、永い事ではないので御座いませう。」

「現在のやうな世の中ではいつ永久のお別れにならないとも限りません。けれども只今のところは一ヶ月といふ豫定になつてをります。」

「一ヶ月。」彼女は機械的に云つた。

「さうです。政府では典獄が女王と親しくなつて同情などをするやうな事になるのを懼れて、役人は凡て一ヶ月交代といふ規則になつてをります、ですから一ヶ月目には役目を果して歸宅する豫定になつて居りますが、……然し如何なる運命が私の前途に控へてゐるかは、知る由もありません……」

「今日、左様ならを申上げますことは随分永いお別れになると存じます。」

「私にとりまして、貴女のお顔を見ないで過す一ヶ月は一世紀にも思はれますでせう。」彼は探るや

うな視線を彼女の上に注いだ。その顔は日頃の明るく若々しさを失つて、世の荒波を経た婦人のやうに強ばつて見えた。

「然し一ヶ月が永いといふ貴女のお言葉が、私と同じ動機から出たものと考へるのは餘り手前勝手な臆測かも知れません。」

この時、彼女の頬は一層青褪めた。そして追ひつめられた兎が逃路を捜すやうな怯えた眼で部屋の中を見廻した。

「デルレイド様、何卒思ひ違ひを遊ばさないで下さいませ。貴郎の御親切は決して忘れません。眞實によくして頂きました。でもこれ以上貴郎の御親切に甘えてゐる譯には参りません。それに英國にはお友達が澤山をりますし、こちらには敵許りで御座いますから……」

「それはよく存じてをります。貴女をこれ以上、此地にお引留め申さうとするのは私の我儘だと存じます。それに明日からは此家も貴女方にとつて決して安全とは申されません。それで貴女方お二人の爲に旅行券その他の用意をさせて頂ければ非常に光榮だと存じます。如何でせう。丁度私の親友パシー卿が英國から見えてをられますから、お願いして英國までお送り申上げて頂くといたしませう。母とナンミイも旅立つ事になつてをりますから、貴女のお供をさせます。」

「あゝ、何卒もう何も仰有らないで下さい。私共は自分の力で出来るだけの事を致しますから、お構ひなさらないで置いて下さいませ。私共はそれまで御厄介になる筋はないので御座いますから……」

「筋がないなどゝは餘りに情ないお言葉です。私は貴女のおためなら、どんなにしても足りない程に存じてをります。貴女は私がこれ程までに思ひをこめてゐる、私の心持を御推察下さらないので御座いますか。」

「何卒もう……デルレイド様……」

「お咎め下さるな、私は決して貴女の愛を求めてゐるのではありません。そんな大それた考へは毛頭持つてゐません。只私は貴女を天使のやうに崇めてゐるので御座います。せめて貴女に捧げるこの愛を受けて頂ければそれで充分です。隣れな片思ひ、それを許して下さいればよろしいのです。私はこの思ひを自分の胸に秘めておくつもりでした。けれども今日お別れしてはもういつお目にかゝれるかわからない世の中でございます。最早二度とお目にかゝる機會はないかも知れないと思ひますと、遂に心弱くも斯うした無難なことを申し上げて了りました。」デルレイドは低い聲で語つた。ジュリエットは彼に取られた手を放さうともしないで目を伏せて立つてゐた。彼は彼女の冷い手の上に燃ゆるやうな肩をつけた。彼女は急に身をひいて立去らうとした。

「ジュリエットさん、一寸お待ち下さい。私はもうこれつきりお目にかゝらないかも知れませんが、どうぞ時には貴女を氣狂のやうに愛し、崇めてゐた私の事を思出して下さい。」

ジュリエットは高鳴る胸を押鎮めて肩を嚙むた。彼女は彼の熱情の籠つた言葉に耳を藉すまいとした。彼の燃ゆる眼を見まいとした。彼女は幾度も目前に立つてゐるのは復讐すべき敵ではないかと

強く自らに云ひきかせてゐた。それにも拘らず、彼女は段々はつきりと、どんなに自分がこの男を愛してゐるかといふ事を知る許りであつた。

その時彼女は死骸になつて運ばれてきた兄のその夜の悲しい光景を眼の前に喚起さうと努めた。彼女は復讐の神を喚んで自分のこの苦しさを救はれようとながめた。その時、何處からともなく恐ろしい神の聲が厳かに彼女の脳裡に響いてきた。

「復讐は吾にあり、吾れ復讐せん！」

十二、復讐の劔

「共和政府の名によつて！」

夢と幸福に浸つてゐたデルレイドは吾家に何事が起つてゐたか、知らないでゐた。

裏所で唄つてゐたアンミイは最初、表支關の呼鈴が鳴つた時、變つた事があらうとは豫期しなかつた。彼女は腕まくりの袖を下して前掛の皺を伸ばしながら、支關へ急いだ。だが扉をあけた瞬間、彼女の脳裡に暴風の如く凡ての事實がはつきりと映つた。

彼女の前に武装した五人の男が立つてゐた。その中の一人は物々しく四人の部下に合圖をしてアンミイを排除してつか／＼と家の中へ入つてきた。アンミイは直に彼等の來訪の目的を知つた。

マアリンの制定した密告法が實施されてゐる今日である、何者かゞ市民代表者ポウル・デルレイドを密告したに違ひない。アンミイはこの場合に至つては最早叫ぶでも及ばない事を知つて覺悟をきめて、靜かに役人等の行動を傍觀してゐた。

先に立つた男は書齋の前に立つた。デルレイドを夢から呼び醒したのは、その男の荒々しい聲であつた。

吾に返つたデルレイドは永久の離別を告げるやうに敬虔な態度でジュリエットの手にもう一度接吻した。彼の顔は非常に青蕪めてゐたが、水を湛へたやうな深味のある眼には恐怖も驚愕もなかつた。

「共和政府の名によつて！」慣例に従つてこの言葉は三度繰返された。デルレイドの眼は自然と機密書類を入れた折靴に注がれた。その瞬間彼は斷頭臺の上に立つてゐる自分の姿を見た。彼はその折靴を隠さうとしたが、それは一層危険である事を知つて躊躇した。彼は自分を視詰めてゐるジュリエットの眼を見た。そこには無限の愛が輝いてゐた。デルレイドは力を得て再び平常の冷靜な態度にかへつた。彼は落着拂つて戸を開いた。

「マアリン殿！」デルレイドは穩かに挨拶をした。

廊下の隅にゐたアンミイはマアリンといふ名をきいて身慄ひをした。——兄弟を賣り、友を賣り、親を賣る恐ろしい密告法を制定した男である。——

マアリンは盛裝をして立つてゐるデルレイドを見て、鼻の先に冷笑を浮べた。彼は日頃からデルレ

イドの名聲を快からず思つてゐた一人である。だが終にその朝彼の手許にデルレイドを陥いれる密告状が届いたのである。

彼は獲物を樂しむ猫のやうにデルレイドの顔を悠々と眺めてゐた。薄暗い書齋を背にしてゐるデルレイドは廊下から射込むでくる光線を浴びて凜々しい顔を正面に見せてゐた。

「おい見ろ！ この貴族は『共和政府の名によつて』といふ言葉の意味が解らないらしい。吾々はこの壁の中でお前がどんな謀叛を畫策してゐたか、取調べにきたのだ。」マアリンは憎々しくいつた。

「どうぞ御自由に。」デルレイドは傍へ寄つてマアリンの一行に道をあけた。

ジュリエットは己の手によつて齎した危難が斯くも目前に愛する人の上に迫つてきたのを見て今更のやうに恐れ戦いた。だがこの數分間彼女が負うた苦惱は彼女の罪を贖ふに充分な程であつた。彼女の良心と感情の凡てが彼女の罪に對抗して湧立つた。だがもう遅い。

デルレイドは彼の政敵マアリンと顔を突き合せてゐる。マアリンは部下に家宅捜査を命じた。旅行靴の上に機密書類を入れた折靴が乗つてゐる。

本能的にその折靴の中に重要な書類の入つてゐる事を感じてゐたジュリエットは、先前から目を離さず見守つてゐたが、誰も氣付かない間に、素早くその折靴をとつて長椅子の上へ置いた。そして何氣ない様子で広いスカートを擴げて、女王のやうにゆつたりとその長椅子に腰を下した。マアリンは二人の部下にデルレイドの兩側に立つやうに命じた。そして他の二人を従へて書齋へ入

つてきた。彼は狐のやうな細い眼を光らせて部屋の間々まで見透さうとした。彼はジュリエットの所作を見なかつた、彼女が長椅子に腰を下した時、衣ずれの音をきいて、蛇のやうな眼をジュリエットの上に注ぎながら、

「デルレイド君、君はひとりではなかつたのですな。」と嘲笑するやうにいつた。

「これは私のところの客のジュリエット嬢です。」

マアリンはにやりと笑つて、手に持つてゐた密告状とジュリエットとを見較べた。

「は、ん、癡話喧嘩か、女に飽きて切れようとしてもしたんだな、それで女が腹を立て、密告状となつたんだ。」マアリンは彼相當の解釋を下して、ジュリエットを自分の味方と見做して了つた。それで彼女が最前から意味ありげな視線を旅行靴に注いでゐるのを見て、マアリンは部下に命じて窓の鏡戸を開けさせた。

輝かしい八月の太陽が室内に流込む。マアリンは最う一度デルレイドに向つて、
「申告状によると、君はマリイ・アントワネットを破獄させようとしてゐるさうだ。それで吾々はその證據を獲る爲にきたのだ。」

デルレイドは鏡戸が開かれた時、折靴が紛失してゐる事に氣付いた。そしてジュリエットの態度から彼女がそれを隠した事を知つて彼の心は限りない感謝に満された。だが彼は若し出來たら、彼女のさうした好意を斥けたいと思つた。萬一彼女が席を立つ事を命ぜられたならば、忽ち一切露見し

て、彼女は共犯者として彼と運命を共にしなくてはならないのである。

見ると、ジュリエットは極めて落着いた態度で人々の様子を眺めてゐた。二人の男はマアリンの命を受け卓子の抽出、書棚、旅行鞆等を端から引くり返して、どんな小さな書類をも見通さずに目を通してゐた。マアリンは大きな革椅子にどっかりと構へて、肘掛を太い汚い指先で叩きながら、もどかしげに收穫のない搜索を見守つてゐた。彼は折々救助を乞ふやうな視線をジュリエットに投げた。ジュリエットはマアリンの心中を讀むで、それを利用してしようと決心した。彼女は眼瞼で、次から次へと搜索すべき個所を命令していつた。それに繰られて搜索の手は彼女の思ふままに動いていつた。

マアリンはすつかりジュリエットの思ふ壺に嵌つた。無論何處を捜しても求むる書類は見付からなかつたが、彼はデルレイドが日頃から非常に頭腦明晰で、注意深い事を知つてゐたから、大抵の事は尻尾を掴む事の出来ないのは當然だと思つた。だが何としても證據を握らねばならない。他の人物と違つて、人望を收攬するに妙を得てゐるデルレイドである、迂闊に罰したならば、民衆がデルレイドの爲に起つであらう。巴里の民衆が暴徒に化するのは政府の最も慮れるところである。マアリンはあれやこれやと考へると、一層苛立つてきた。彼は竟に耐りかねて、

「身體検査をしろ！」と牀を踏鳴らして叫むだ。デルレイドは齒を喰しはつてその侮辱に耐へた。それが済むと、マアリンは最う一度ジュリエットの美しい眼を顧みた。ジュリエットの眼が戸口に

注がれた。恰も、「他に部屋がいくつもあるからそちらを探して御覽なさい。」といふやうに。

「デルレイド君、君は中々狡猾で、書齋などには大切なものは置いておかないらしい、他の部屋を檢べるから吾々を案内し給へ。」

デルレイドは四人の男に前後左右を護られて部屋を出ていつた。マアリンはジュリエットに向つて、「貴女の書いた手紙が出鱈目で、われ／＼がこゝへ來た事が無駄になつた。噫には、貴女は相當の罪を被る事は御存知でせうな。われ／＼が戻つてくるまで、貴女はそこを動いてはなりません。」と云ひ残してデルレイドの後に従つた。

十二、縛れた網

ジュリエットは人々の聲音が大きな櫓の階段の上に消えるのを待つてゐた。彼女はひとりになると初めて、愛する男の周圍にひろげた網をどう始末したものかと思案に暮れた。

間もなくマアリンは再びこの部屋へ戻つてくるであらう。その時になつて尙、この喜劇を演じ續けるのは不可能である。最初彼女は折靴を自身の身體の何處かに隠さうとしたが、それは隠すには餘りに大きかつた。それにマアリンが收穫のない搜索に業を煮して彼女の身體検査をしたなら、忽ち發覺するにきまつてゐる。彼女はどうかしてこの折靴を書齋から持出して了はうと考へた。その申味が果してどの程度までの證據物件となるものか、彼女は未だ知る由もないが、兎に角、前夜、パーシ

1 脚の前で彼がひつげてるた折靴である事は確である。

彼女は長椅子から立上つて、密に廊下をうかざつた。マアリンの一行は二階のデルレイドの寢室へ入つて了つた。事を爲るなら今である。彼女は非常な決心をもつて折靴をスカートの下へ隠して部屋を出た。萬一階段の途中ででも役人に見つかつたら、それまでのことである。彼女は自分の行爲に自らの首を賭す覺悟であつた。

彼女は爪先で音を立てぬやうに階段を上つて、デルレイドの寢室を通り越して自分の部屋へ入り込む。

年老いた乳母のペトロネルは若主人の旅立の支度を済まして了つて安樂椅子の上で居睡りをしてゐた。ジュリエットは乳母には見向きもしないで、突如、そこに投出してあつた鉄を取上げて錠のかかつた折靴を破りあげた。そして牀に散らばつた書類を素早く掻集めてずた／＼破り裂いて、部屋の隅のストーブ前の灰受けの鐵板に積むた。

不幸にして眞夏の事であつた。冬であつたら彼女の仕事は雑作ない事であつたに違ひない。

彼女は部屋の中を見廻した。丁度彼女の寢室の背後の壁に聖母マリアの像が飾つてあつて、その前に小さなランプがともつてゐた。彼女は靜かにその燈火を取下して小さな壺に入つてゐた油を積重ねた紙の上に注ぎかけて、燃えてゐた蕊の火を移した。黒い煙をあげて書類はぶす／＼と燃え始めた。その臭氣にペトロネルが眼を覺ました。

「ペトロネルや、何でもないのでよ。私古い手紙を焼いてゐるのだから、お前は臺所へいつておいで。」
「お嬢様、お荷物はずつかり出来ましてございますよ。……あら、お手が汚れるではございませんか。御手紙をお焼却になるなら私に仰有ればおよろしいのに。」

「叱ッ！ 乳母、早く下へおいで、それからね、若しかすると、役人達があるかも知れないけれど、何にも驚く事はないのよ。」

「まア、役人で御座いますつて？」

「靜かにおし、そして若し何か訊かれても何にも云ふんぢやアないよ。そして驚いたり騒いだりしないで、平氣な顔をしていらつしやいよ。神様が私達を護つてゐて下さるんだから、凡てを神様にお任せしてね……さあ早くおいで。」さういひながらもジュリエットは絶えず、次第に灰に化してゆく紙片を見守つてゐた。ペトロネルは眼に涙を溜めて胸に十字をきつて部屋を出ていつた。彼女が扉をあけた拍子に廊下から流込む風が、最後の火焰を吹消して了つた。そこにはまだ燃え残りの紙片があつた。然しマリヤの聖像の前の燈火は油をとつて了つたので、燃えきつて自然と消えて了つてゐるので、ジュリエットは再び火をとぼしてそれ等の残りを燃やす事は出来なかつた。革の折靴は無論灰にしてすわけにはゆかない、ジュリエットは一寸考へてゐたが他に仕様がなかつたので、彼女は自分の旅行靴をあけて、暗着の中へ折靴その他を隠匿して了つた。

そして彼女は部屋を出た。

十四、幸福な瞬間

寢室に於ける捜査は書齋と同様に空しく終つた。マアリンは一杯喰はされたのではないかといふ疑惑をもつやうになつた。だが、彼は飽までも證據を手に入れようと焦つてゐた。その爲に彼は方針を變へたと見えて、デルレイドの乞のまゝに母親の居間へゆく事を許した。そして彼は最前玄關に見掛けた僮女のアンミイを捜す爲に臺所へ下りていつた。そこにはペトロネルもゐた。ペトロネルは年老つてゐて、何をきいても一向要領を得ないし、アンミイは申々利口で容易に口車に乗らなかつた。マアリンは何を思つたか二人を抛つておいて臺所の牀から天井板まで引剣さん許りにして捜査を續けた。

デルレイドは驚き悲しむ母親を言葉で盡して慰めた。そして監視人がマアリンの命令を受けて地下室の臺所へいつて了ふと、急いで書齋へ引返した。だがそこにはジュリエットの姿も折靴も見えなかつた。デルレイドは不安の爲にわく／＼しながら二階へゆかるとすると、階段の上でぱつたりと彼女に會つた。

薄暗い廊下に立つた彼女の頭上に後光がさしてゐるやうに神々しく見えた。彼女はデルレイドを見ると、脣に指をあてゝ、
「もうみんな焼却て了ひました。」と囁いた。

「有難う御座います。貴女は私を救つて下さつた。」デルレイドは眞心をこめていつた。だが彼の言葉にジュリエットは一層青くなつた。彼女の大きな黒い瞳が悔いるやうに彼の上に注がれた。彼はジュリエットが疲勞の爲にその儘失神してゆくのではないかと思つて急いで彼女の手をとつて母親の居間へつれていつた。彼女は疲勞果てたやうに安樂椅子に身を沈めた。彼は自分の身の危険を忘れて牀に跪いて彼女の手をとつた。

「ジュリエットさん。」

デルレイドはやう／＼一言喘ぐやうにいつた。ジュリエットは、彼の燃ゆる瞳を見て急に戦いた。デルレイドは自らを愧ぢたやうにそのまゝ脣を閉ぢて手をひいた。だが次の瞬間、ジュリエットはうつとりとした悲しい眼で彼の顔を見下した。

「ジュリエットさん、免して下さい、貴女が餘り美しいものですから遂に吾を忘れて了つてほんたうに失禮しました。でももう大丈夫です、私は天使とお話する時はどんな風にすればいいか知つてゐます。さあかうして静かにお話をさせよう。」

デルレイドの脣を嚙いて出てくる愛の言葉は小川のさゝやきのやうに心地よくジュリエットの胸に流れて来た。彼女は夢見るやうな眸でちつと、彼の言葉に耳を傾けてゐた。

デルレイドの老いたる母は安樂椅子に凭つてしづかに祈禱を續けてゐた。
暫時の間、此部屋には浮世をよそに、平和と幸福が足を停めた。

十五、推理

扉の開く音に、戀人同志の夢は破られた。眞青な顔をしたアンミイが恐怖に怯えた眼をして部屋へ飛込んで来た。デルレイドは慌て、傍へいつたが、彼女はまるで氣でも狂つたやうに、彼の前を擦り抜けて老夫人の前へ驅寄つた。

「アンミイや、どうしたの？ あの獸どもが無禮なことでもいつたのかい？」デルレイドは自分がかんな場合に戀などを囁いてゐて、保護してやらねばならない頼りない人達の事を忘れてゐた事を愧ぢて赧くなつた。

「いゝえ、あの人は何もしません、只私とペトロネルに臺所中の抽斗を開けさせた許りです、その後で色々なことを質問しました。」

「どんな事を？」

「貴郎の事や、お母様や、それから……あの貴郎の大切なお客様のことなんかを……」

デルレイドはアンミイの齒に布を着せたやうな物の云ひ方に不審を抱いて彼女の顔を凝視した。アンミイは非常に興奮した顔をして慄へる手に何か紙片を握つてゐた。

「どうしたの、何か大變な目にでも會つたやうぢやアないか、その手に持つてゐるのはなに？」デルレイドは急しく訊ねた。アンミイは手の中を覗詰めて、息をはずませてゐた。

ジュリエットはアンミイを見た瞬間、化石のやうに立竦んだ。

「その紙は何？、私に見せておくれ。」デルレイドは繰返した。

「マアリンが私に下すつたのです。あの人は貴郎に對する證據を何にも見付ける事が出来なかつたらしいのです。永い事臺所を探した擧句、今度私とペトロネルの部屋を探し始めました。でもあの恐しい人は失望の餘り、まるで野獸のやうになつて腹を立てゝりました。」

「さうだらうとも、さうだらうとも。」

「あの人は私から何を聞出さうつていふのかも知りませんが、私は貴郎が決してお母様や私に政治の話などはなさらないといつてやりました。それに私は錠穴に耳をつけて他人の密談をきいた事はなから他人の事なんぞ何にも知らないといつてやりました。」

「成程、それから？」

「それからあの人は、私共のお客様の事を訊き始めました。私は何とも答へやうがありませんでした。あの人は誰が貴郎を告發したんだらうつて不思議がつてゐました。あの人は今朝申告函の中に投込まれた密告狀の事をいつてゐました。」

「實に不思議な事だ、私は自分に隠れた敵があるとは決して信じない。」

「私もさういつてやりました。」

「えつ？」

「私許りでなく、誰だつて、貴郎を愛してゐるものは、貴郎に敵があらうなど、は夢にも思はない事ですし、又若しそんなものがゐたとしても多分私達には、誰だか見當がつかないでせうつていつこやりました。」

「あんな男にそんな風に打解けた話をするといふのは餘りよい事ではなかつたね。」

「私もさう思ひましたわ、でもあゝいふ男は旨くあしらつておく方がいゝと思ひましたから……あの人はその問題に就いて一番話したがつてゐたやうでしたから、相手になつてやつたのです。」

「ふゝん、で？」

「そしてあの人は笑つて、密告状を書いたのは誰だか知りたくないかつていひました。」

「アンミイ、無論お前は知りたくないつてやつたらうね。」

「どう致しまして、どう致しまして、私は貴郎のやうな親切な方を密告した動物のやうな卑しい人間をどうして知らないでおきませう。貴郎は誰にだつて一つも悪い事をした事はないのに、それを何の怨恨があつて、こんな恐ろしい目に遭はせようとするのでせう。」

「叱ッ！ アンミイ、お黙り！」

「御免なさい。でもマアリンにあんな事をいはれて、黙つてゐられませんわ。」

「どんなことをいはれた？」

「いつた許りぢやアありません。あの人はこれをくれました。今朝届いた投書です、あの人は私達の

うちで、誰かこの筆蹟に見覚えがあるかも知れないからといつて見せたのです。」アンミイは手に握つてゐた皺苦茶な紙片を差出した。デルレイドはそれを受取らうとした時に、ちらとジュリエットを見た。その時ジュリエットは物も云はずにデルレイドの行手を遮つて、つとアンミイの傍に立つた。

部屋の中を恐ろしい沈黙が支配した。デルレイドはジュリエットの顔に推出された致命的の表情を讀んだ。彼の崇めてゐた偶像は忽ち破壊されて了つた。今こそ初めて、彼が愛を捧げてゐたのは天使ではなくつて、單なる地上の女に過ぎなかつたといふ事が解つた。彼女は故意に、この家へ入込んできて、彼を偽瞞し、彼を陥れたのであつた。

だが彼は、悪びれずに罪に伏さうとしてゐるジュリエットの悲壯な顔を見ては、彼の氣質として唯彼女を憐れむより他はなかつた。

「アンミイや、その紙片を私にお渡し。」デルレイドは冷かにいつた。

「もうそんな必要はありませんわ。」アンミイはジュリエットを視詰めながら答へた。彼女の手から丸まつた紙片がはらりと落ちた。

デルレイドは跣んでそれを拾ひ上げた。そして皺を延ばしてそれが白紙である事を見出した。

「何にも書いてないではないか。」

「えゝ、この方の不實を語る物語の他、何にも書いてありません。」アンミイは昂然と言放つた。

「アンミイや、お前のした事はわるい事だ。」

「さうかも知れません。けれども私は事實を推察して了つたのです。私は自分の推量が當つたかどうか知りたかつたのです。神様は私を導いて事實を摘發して下さいました。」
「こゝで神の名を用ひる事はならない。お前はお母様を看護てあげておくれ。大變御氣分がわるさうだから。」

老夫人は目前に演ぜられた恐しい場面を魅のない人形のやうな無表情な顔をして視守つてゐた。アンミイは頭垂れて命ぜられた通りに老夫人の傍へ進んだ、彼女は自分の行動の反動で、急に烈しい心の痛みを感じてゐた。彼女は一圖に裏切者に恥をかゝせてやらうといふ小供らしい考から、斯うしたことをやつたのであつた。彼女はジュリエットの動機などを考へて見ようともしなかつた。彼女は只密に望みない愛を捧げてゐたデルレイドを陥れようと計つた敵の假面を剥ぐことのみを考へてゐたのであつた。叶はぬ戀に盲目となつた乙女は嫉妬の鬼となつて鋭い眼を戀仇の上に注いでゐた。そして遂に彼女は勝利を得た。デルレイドは反逆者の上に空しい愛を注いでゐたことを知り、ジュリエットは恥の爲に色を喪つて、曝者のやうに立つてゐる。アンミイは確に目的を達した。それにも拘らず彼女の胸は悲哀に鎖されてゐた。デルレイドの顔にはあり／＼と苦悶の色が現はれてゐた。けれどもそこには些も忿怒や憎悪の色は見出されなかつた。彼は唯、悲しんでゐる許りであつた。そのみではない、寧ろ彼の眼にはジュリエットに對する憐憫さへも浮んでゐた。アンミイは老夫人の背を擦りながら、密に愛するデルレイドの顔色を讀んでゐた。そして、

「あの方はあんなにあの女を愛していらつしやる！」とそつと吐息を洩らすのであつた。

ジュリエットは次第に膝を折つて、遂にデルレイドの前に跪いて了つた。黄金髪をいたゞいた彼女の頭は慚愧と罪の重荷に耐へかねたやうにが／＼と垂れた。

十六、就 縛

デルレイドは黙つて立つてゐた。

間もなく、マアリンの一行が登音荒く階段をあがつてきた。その物音にジュリエットは靜かに立上つた。

彼女は満座の中で悔悟と屈辱を行爲に表して見せたのであつた。

マアリンは不機嫌な顔をして、どか／＼と部屋へ入つてきた。彼の顔は一目してジュリエットの知らうとしてゐた事を語つてゐた。彼はジュリエットの部屋を捜して、彼女が故意に残してきた書類の燃殻を見出したに違ひない。これから先、彼が如何なる態度に出るかといふ事がジュリエットにとって必要な事であつた。無論彼女は何としても、逮捕を免れる事は出来ない。彼が部屋へ入つてきた瞬間に、彼女を見た時の冷笑するやうな顔付が凡てを語つてゐた。

デルレイドは、マアリンが戻つてきた時、却つて救はれたやうな氣持になつた。彼は天使のやうに崇めてゐた愛人が、自分の膝下に跪いてゐる姿を見て耐へ難く思つた。それにも拘らず、彼の自尊

心は彼の感じを押へて了つた。

彼は最早、身に迫つてゐる危険に就いては秋毫も考慮してゐなかつた。只漠然とマアリンが既に折靴を見出したに違ひないと思つてゐた。事によつたらジュリエットが一時の感情から隠匿したもの、再び思返してマアリンの手に渡したかも知れないと想像した。

デルレイドはもう何も考へたくなかつた。唯自分と毀れた偶像との間に横はつてゐる地球が崩壊れ、凡てがそのまゝ宇宙と共に消え去る事を希つた。

マアリンは依然として嘲笑的な態度で、

「デルレイド君、よい音信をもつてきましたよ。吾々は竟に君を告發すべき材料を一つも獲る事は出来なかつた。だが保安局の命によると、證據の有無に係はらず、一旦は君を委員會へ引出さなくてはならない。」とじろりとデルレイドの顔を見た。萬一相手の顔に多少なり安堵の色が見えたら、それをも證據の一つに數へ上げる根柢であるらしい。

デルレイドは些も感情を面に表はさなかつたが、心の中では云ひ知れぬ歡びを感じてゐた。それは自分自身に對する氣持ではなくつて、愛する母と哀れなアンミイが間もなくこの國を免れて、安住の地を求めて英國へ渡る手筈が調つてゐたからである。

彼は優しく母に別れの接吻をした。それからアンミイの怯えてゐる小さな手を堅く握つた。彼はマアリンの前で彼等の渡英に就いて語る事の危険なのを知つてゐたので、一言もそれに觸れなかつた。

唯凡ての思ひを最後の一瞥に残してマアリンの後に蹤いていつた。彼はジュリエットの前を通る時に、「左様なら」と囁いた。彼女は無言で悲哀を籠めた瞳で、彼の永遠の告別に應へた。

デルレイドを圍んだ一行の蹺音が階段から階下へ消えていつた。聽て玄關の重い扉があいて、閉まる音ががらんとした家中に響いた。

開放つた窓から附近の人々がデルレイドを迎へて嘶立てる聲がどつと聞えてきた。

玄關の前でマアリンは二人の部下に命じてデルレイドを、裁判所へ送つてゆくやうに命じた。家の前には早くも夥しい群集が集つて、

「吾等の友、デルレイド！」と叫んでゐた。マアリンは心密にデルレイドが彼等に向つて口を開く事を懼れてゐた。一度デルレイドが唇を開いたなら彼等はデルレイドを救ふ爲に忽ち暴徒と化するに違ひない。

「吾等の友、デルレイド！ 演舌をしてくれ！ 俺達がついてゐるぞ、慥りやれ！」群衆は殺倒してきた。その中をデルレイドは傍目もふらず、黙々として護送されていつた。

十七、償ひ

マアリンは廊下に立つて群衆の叫聲が次第に遠退いてゆくを待つて、再び階段を上つていつた。デルレイドの老母とアンミイは表の騒ぎに氣をとられてデルレイドの身を氣遣ふ餘り、ジュリエッ

トの存在を忘れてゐた。

マアリンの聲音が近づいてきた時、初めて気がついたやうに恐怖に脅えた顔で戸口を振り返つた。

「兵卒が私を連れに戻つてきたのですわ。」ジュリエットは静かにいつた。

「貴女を？」アンミイが聞き返した。

「え、あの人は私は私を引ばつてゆくつもりなんです。屹度デルレイド様の前で私を拘束するのを恨れたのでせう。若しもあの方が……」彼女の言葉が終らないうちに、マアリンが部屋へ入つてきた。彼の手には引裂れた折靴があつた。彼は眞直にジュリエットの前へ歩み寄つて、荒々しく燃え残りの紙片を彼女の鼻先につきつけた。

「これはお前のか？」

「え、。」

「お前は何處にこの靴があつたか知つてゐるだらう。」

それに對してジュリエットは領首いたのみである。

「お前の焼却したのは何だ？」

「織文です。」

「嘘を吐け。」

ジュリエットは肩を窄めて横を向いた。

「眞實の事をいへ、この紙は何だつたのだ！」マアリンは嚇すやうに怒鳴つたが、ジュリエットはびくともしなかつた。

「申上げたではございません、私の織文です。他人に見られるのが厭だから燃したのです。」

「お前の戀人は誰だ。」

ジュリエットがそれに答へなかつたので、マアリンは頤で窓の外をしゃくつて、

「あの男からきた手紙か？」

「いゝえ。」

「ちやア、お前はまた他にも戀人があつたといふのか。」マアリンは醜い顔でジュリエットの前へ寄せて冷笑した。彼女は恐しさに目を閉じた。傍に立つてゐたアンミイさへもこの男の憎らしい態度に反感をもつてジュリエットに同情を寄せた。

マアリンは荒くれた手を伸してジュリエットの白い頤を突いて、無理に自分の方を向かした。

「おい、お前は他にも情人があつたのだな。それで奴が邪魔になり出したんで、斷頭臺へ送らうといふ根柢だつたのだらう。」彼は突如女の手首を掴んで亂暴にもゆすりながら、

「おい、さうだらう！」

「え、さうです。」ジュリエットははつきりと答へた。

「お前は知つてゐるか。デルレイドを單なる嫌疑位で斷頭臺に送る事は出来ないのだぞ。お前は偽り

の密告状を書いた時に、斯ういふ事實を知つてゐたのか。」

「いえ、私、知りませんでした。」

「お前は吾々が嫌疑だけであの男を逮捕すると思つてゐたのか。」

「ええ。」

「お前はあの男が無罪だといふ事を知つてゐたのか。」

「さうです。」

「何故お前は織文を燃して了つたのか？」

「私は家宅搜索をされて、あの手紙が見付かると、デルレイドさんに見せられると思つたからです。」

「旨い事をいつてゐらア。」マアリンは舌打をしてそこに居合せた人々を顧みた。二人の女達は何の

事か意味が解らないので眞青になつて慄へながら、この光景を視守つてゐた。

「お前はこんな事を知つてゐたのか。」マアリンはアンミイを顧みて訊ねたが、ジュリエットは追ひか

けるやうに、

「いえ、誰も私の内緒事なんか知つてはをりませんわ。私は旨く仕組んだつもりでしたけれども、

今になつて、初めてデルレイド様は中々重要な地位にある方で、さう容易く陥れる事が出来ないといふ事を知りました。」と云つた。

「お前はさういふ出鱈目な訴へをして罪のないものを陥れようと計り、政府に手敷をかけて只では

済まされないといふ事を知つてゐるだらう。」

「ええ、存じてをります。貴殿は腹癒せに、この私を檢舉してゆかうといふのでせう。私はちやんと覺悟をしてをりますから、さつさと連れていつて頂きますせう。」

「生意氣な女だ、さアお前達、こいつを引立ててゆけ！」上官の命によつて、二人の兵卒は劍銃の音を荒々しく立て、左右からジュリエットを引立てた。ジュリエットは一寸足を停めて、

「こゝにゐるお友達に一言いはせて下さい。」と歎願した。

「ならぬ。」

「二度と再び口を利く事は出来ないかも知れませんから、たつた一言だけ……」

「くだい奴ぢや、罷りならぬ。」

ジュリエットは唯一言老夫人とアンミイの心を和げたいと希つた。彼女がマアリンに告げた恐しい虚偽を、その人々にそのまゝ信じられたくなかつた。自ら自分の上にひろげた黒雲を拂ひ除ける事が出来ないで、そのまゝ牽かれてゆくのは死に直面するよりも苦痛であつた。だがその一言をいふ事をも許されなかつたので、彼女は餘儀なく二人の人を残して立去らねばならなかつた。

丁度ジュリエットが戸口を出ようとした時、アンミイは不意に驅寄つて力なくだらりと垂れたジュリエットの手をとつて涙と共に接吻した。アンミイはジュリエットの純眞な顔を見てゐるうちに今までの経緯を悉く忘れてたゞ女同志の優しい思ひやりの心のみを動かされたのであつた。ジュリ

エットは恰も夢から覺めたやうな心地であつた。彼女は希望と喜悅に満ちた眼でアンミイの顔を見下した。そして小聲でいつた。

「私は亡くなつた父と兄に誓ひを立てたのです。どうぞその事をあの方に仰有つて下さい。」

アンミイは涙に咽ぶのみで頼には言葉が出なかつた。

「でも私は屹度生命をかけて償ひます。」

「さア、そこを退け！」マアリンはアンミイを突退けてジュリエットを急立てた。アンミイは涙の溢るゝ眼をあげていつた。

「許して頂戴！」

ジュリエットはアンミイの優しい一言に力づけられたやうに、しつかりした足どりで部屋を出ていつた。鏝て支關の戸がぱたりと閉されて了つた。

ジュリエットは難關を極めた巴里の町を牽かれていつた。彼女の周囲は倏忽濫謀を下げた女や、鼻を垂した兒童等の群に取り圍まれた。群衆は兵士に護送されてゆく美しい乙女を見て飽く事を知らぬギロチンに投げ與へられる餌が出来た事を知つて鬨聲をあげた。

「それ貴族だ！ 遣付けろ！」

「貴族に唾をかける！」女も兒童も聲を揃へて罵り喚いた。兵士等も一緒になつて笑ながら、石に躓いて躊躇く彼女を急立てゝ喜んだ。けれどもジュリエットは恰も夢の中を歩いてゐるやうに人々の罵

り騒ぐ聲も耳に入らなかつた。

彼女は唯ひとつの思ひに耽つてゐた。そして幸福であつた。彼女は自分を犠牲にして彼を救ふ事が出来た。その事を考へて彼女は満足しきつてゐた。彼に對する彼女の愛は永久に知られないで了ふかも知れない。けれども焼残りの紙片によつて彼女が裁かれ、判決を下されて斷頭臺に送られる時になつたら、デルレイドは必ず眞實の事を知るであらう。彼女はさう思つて自らを慰めてゐた。

彼女がルクセンブルグ監獄の典獄の手に引渡されたのは夕方六時近くであつた。赤い帽子を冠つて革命章を肩にかけた背の低い男はジュリエットの頭のでつべんから足の先までちろく見えて、

「重罪犯ですか。」とマアリンに訊ねた。

「さうだ。」

「御承知の通り、獄房は満員になつてゐますから特別の注意を要する囚人の場合は一々仰有つて頂かないと困るのです。」

「成程、ぢやアこれは特別犯人なのだから充分責任を持つて貰はなくてはならぬ。」

「面會は？」

「絶対に許してはならない。」

ジュリエットは二人の會話をきいて面會人を許されない事を知つて却つて喜んだ。彼女は再びデルレイドに會ふ事を恐れてゐた。デルレイド許りではない、彼女は誰にも會ひたくなかつた。唯ひとり

になつて思ふ様自分の楽しい思出の中に浸つてゐたかつたのである。

十八、紛 糾

ボウル・デルレイドは證據不充分的の廢で放免された。然しながら彼はその時以來絶えず、注意人物として嚴しい監視を受けねばならぬ事を知つてゐた。彼は市民の間に特別の人望を持つてゐた爲に仲間中で嫉むものがあるのを知つてゐた。遅かれ早かれ、陥入れられるに違ひない事を覺悟してゐた。然しその時がくるまで、少しでも時があれば母とアンミイを國外に送り出して了ふ事が出来る。それから彼の腦裡にはジュリエットのことがあつた。愛する彼女に裏切られた事は耐へ難い苦痛であつたが、彼は矢張り彼女を憎む事は出来なかつた。彼は自分に與へられた自由の時を彼女の爲にも費す事を考へてゐた。

玄關の戸口のところで彼はアンミイに顔を合せた。

「あの方はいつてお了ひになりました。私はまるで自分の手であの方を殺した氣がします。」彼女は眼に涙を溜めていつた。

「行つた？ 誰が？ 何處へ？」デルレイドは心臓を冷たい劍で突刺れたやうに感じた。

「ジュリエットさんです。あの恐しい人達があの方を連れていつて了つたのです。」

「いつ？」

「貴郎がいらつしやると、すぐ後です。マアリンがあの方の部屋のストーブの前で紙片の燃え殻と灰を見つけたのです。」

「灰を？」

「さうです。それから破れた折靴と、そしてあの方はその紙片を貴郎に見られてはならない懸文を焼いたのだと仰有いました。」

「アンミイや、それは眞實かい？」

「ええ、さうです。儘にさう仰有いました。さうしたら、マアリンが酷いことをいひました。でもあの方は飽までも他に戀人があつたと仰有いました。でもそんな事は屹度虚言です。私はあの方を憎んでゐました。だつて貴郎が餘りあの方を愛していらつしやいましたから、……けれども私はあの方がそんな悪い方だとは信じません。」

「さうだとも、あの方はそんな方ぢやアない。その他に、どんなことをいつていらつしたか話してくれ。」

「あの方は餘り何も仰有いませんでした。でもマアリンがあの方に貴郎を邪魔にして、それで密告したのかどうかと訊きました。そして貴郎の事をあの方の……」

「私を戀人だといつたのかい。」

「ええ、そしてあの方はマアリンのいつた事を何でもみんなその通りだと仰有いました。私はあの方

が連れてゆかれる時に、傍へ驅けていつてお別れの接吻をしました。その時にあの方は貴郎に傳言をなさいました。「アンミイは瘦せた弱々しい手をデルレイドのがつしりした腕にかけていつた。

「何といつたの？」

「あの方は斯う仰有いました——私は亡くなつた父と兄に誓ひを立てたのです。けれども私は生命を賭してこの償ひを致します。——」

「誓」その一言をきいてデルレイドは初めて凡ての事情を解する事が出来た。そして彼女が乙女心にどんなに深い悩みを抱いてゐたかを察していづらしく思つた。彼女は其の誓を守る爲にどんなに激しく闘つたか知れない。そしてその後で自分の犯した罪に對して、良心の呵責に耐へず、生命を捨て、償ひをしようとしてゐる。だが彼女の行爲をどうして罪といへやう。而も彼女は生命を賭しても安らかな心持をあがなひ得ないであらう。哀れなジュリエットよ！

デルレイドは彼女が正義と義務の念に支配されてゐたのであると考へた時、云ひ難い痛を胸に覺えた。彼女は彼を愛してゐなかつたのだ。只通り一遍の義理人情に驅られて行動してゐたのである。さう思ふ時デルレイドは彼女に賣られた事を知つたよりももつと苦しかつた。彼の希望の綱もきれ、夢も破れて了つた。假令彼が何かの方法で彼女をギロチンから救出したとしても、彼女の心は永久に取戻す事は出来ないであらう。デルレイドは最早生きてゐる甲斐もない程に思つた。唯彼としては母とアンミイを安全な地に移し、そしてジュリエットを救出す事、それだけの義務の爲に生きねばならないと思つた。

アンミイはデルレイドが考へ込んでゐるのを見て、靜かに引下つた。彼女はデルレイドの母親を一刻も早く旅立させなければならぬといふ事を知つてゐたので、デルレイドの命令をうけない中にさつさと荷造りをし始めた。

アンミイの胸には最早ジュリエットに對する憎しみは無かつた。デルレイド自身が氣づかなかつたジュリエットの心をアンミイは充分に察して了つてゐた。

彼女は最早ジュリエットを救ふ事は出来ないと諦めてゐた。そして今まで敵であり、競争者であると思つてゐたジュリエットに對して優しい感情を抱いてゐたのである。彼女も又、この數時間の間に復讐は神の手にありといふ教訓を學むたのである。

十九、シバル・ボルニユの宿

夜は更けてゐた。

部屋の中は息苦しい程熱かつた。安煙草の煙、悪い脂の臭、下等な酒の臭などが、雲のやうに立籠つてゐた。

シバル・ボルニユの宿でも、比較的廣いこの一室は過去五年間、過激派の寄場になつてゐた。

この宿はこの汚い町の中でも一際目立つて見窄らしい建物であつた。外廊の壁は剝落して今にも崩

れさうになつてゐる。低い天井は年代を経た黒光りの梁に支へられてゐる。牀下は鼠や、毒蟲の巢になつてゐる。それ等は互に食ひ合つて生存してゐる。それと同じ事が牀の上でも繰返されてゐる。人間同志は酒を飲むだり、唱つたり、斬合つたりしてゐる。

それは自由平等を標榜してゐる俱樂部である。それ故、通りすがりの者でも勝手に入つてきてギロチン禮讃の仲間入をする事が出来た。

この俱樂部で最もはゞを利かしてゐたのはマロウであつたが、彼の死後はマリオンとその親友チンビュが牛耳つてゐた。尤もこの親友達でさへも互に隙あらば陥入れようといふ手合であつた。そんな譯でマリオンがデルレイドの家宅捜査をやつて何の證據も掴み得ず手を空しくして引揚げてきた事がその夜の重要な話題となつてゐた。

チンビュは中央の大椅子にどつかりと腰を下して同志の者達を相手に芋酒を燻りながら、所謂親友マリオンの失敗を嘲笑してゐた。遅くなつてやつてきたマリオンは人々の悪丁寧な挨拶によつてその場の空氣を讀むだ。マリオンがレノアといふ男の傍に腰を下すと、チンビュが、

「レノア君、注意し給へ、マリオン君はデルレイドの代りに君を捕縛するかも知れんよ。」と彌次つた。

「俺はそんな心配はしないよ。マリオン君には貴族の血統が流れてゐると見えて、他人を傷つけるやうな思切つた眞似はしないから、……誠に癖潔であらせられるからな、共和國の汚い仕事には指も

觸れられないさうだ。」大男のレノアは節くれ立つた腕を叩いてからくんと笑つた。

「俺の愛國主義は周知の事實だ。俺なんぞは嫉妬深い敵の言草なんかにはびくともしないんだ。今日デルレイドの家へ赴いた任務は何か證據があつたら見つけて来いといはれただけの事で、かければそれまでのことさ。」マリオンも負けてゐなかつた。レノアは毛むくぢやらかな腕を卓子の上について、マリオンの顔を覗込みながら、

「おい、よく聞いておけ、眞實の愛國者といふものはな、證據の必要な時には無理にも證據をつくつてくるものだ。」

人々は「ひやく」と喝采した。レノアは鼻を蠢かして、

「マリオン君、貴様は馬鹿だよ。すつかり女にまるめこまれて了つたぢやアないか。」

マリオンは侮蔑に満ちた視線を浴びてすつかり立場を失つて了つた。

「そんな事があるものか、密告状を出したのがあの女だもの。」

「だが、マリオン、貴様の制定した法律によると、反逆の嫌疑を受けたものは既に罪ありと認むる筈ぢやアなかつたか。法律なんていふものはどつちにでも適用出来るものだ。」

「そんな事をいつたつて仕様がなぢやアないか。」

「見事に辯駁した。諸君罪なきものゝ辯駁をきゝ給へ。」レノアは烈しく卓を叩いて立上つた。その拍手に酒徳利が轉がつて牀に墜ちた。

「貴様に訊く、吾々愛國者は反逆者の家まで乗込むでいつたら、何をするか知つてゐるか諸君よ！
マアリンは書類の燃殻と、破れた折靴とを發見した。云ふまでもなくその折靴こそ重要な機密書類
の入つてゐたものに違ひない。然るに彼はどうにも仕様がなかつてゐる。諸君、これをきいてど
う思ふ？」

「然し、デルレイドは證據なくして密間に附するには餘りに重要な人物である。そんな事をしたら全
巴里の民衆が黙つてはゐない。」マアリンは必死になつて辯じた。

「證據がないつて？ 證據がないとは誰の言草だ！」レノアは威猛高に叫むだ。

「では俺がいつてきかしてやらう。一體大切な書類をデルレイドの部屋で見付けないで、女の部屋で
見付けるなんて、それが抑々間違ひだ。マリイ・アントワネットに書送つた手紙の中の一字が見付かつ
ただけで證據とするに充分ぢやアないか。デルレイドがそれ程重要な人物で、吾々が皮の手袋でも嵌
めなければ手がつけられないといふなら、他の武器を使用つたらいゝではないか。諸君！ 巴里の暴
動を取越苦勞にして反逆者を指の間から逃すやうな臆病者を抛つておいてもよいものだらうか？」レ
ノアの言葉は更に烈しい拍手によつて迎へられた。

二十、雄辯家

チンビュは最前から沈黙を守つてゐたが、レノアの烈しい言葉が終ると立上つて徐に口を開いた。

「レノア君、口でいふのは誰でも出来る、君はまだ何も實行して見せた事はないぢやアないか。」

「然し、若し誰か口を利くものになつたなら、何事も實行として現はれないでせう。諸君はこゝに
坐つてマアリンのぶまを罵つてゐた。然し蔭で如何に罵つたと何にもならないぢやアないか、だか
ら俺が諸君に代つて、諸君の言葉を大聲で叫んでやつたのだ。」

「よろしい、では君の意見を聞かせて貰はう。」チンビュは自らのコップに酒を満しながらいつた。

「諸君はデルレイドが反逆者である事を知つてゐるだらう。」レノアは満場を見渡した。

「知つてゐるとも、知つてゐるとも。」人々は口々に應へた。

「然らばこゝに動議を起さう。即ち反逆者デルレイドの死刑を望むものは手を上げ給へ。」
満場一致で手があがつた。

「それでは如何にして吾々の目的を遂行するか、といふ事が先決問題である。」

マアリンは自分に向けられてゐた話題が次第に中心を離れていつたのでほつとして初めて酒の瓶に
手をかけた。チンビュはレノアの如き名もない男の爲に領袖としての地位を奪はれさうな形勢になつ
てきたので躍起となつて、

「レノア君、では君はデルレイドの有罪を立證すべき責任を負ふであらうな。」

「では若し俺が證據をあげたら、君は責任をもつて刑を執行するだらうな。」
「無論、それは俺の職務だ。」

「では、マアリン君、君も反逆者を處決する爲に力を盡すだらうな。」

「いふまでもなく俺は諸君も知つてゐる如く……」

「宜しい、もうそれで澤山だ、こゝは雄辯會ぢやアないんだから、同じことをくどくどしくいひ合ふ必要はないんだ。吾々は反逆者を處決する事を怠つた者を見出したら容赦なく罪に問はねばならぬ。レノアはマアリンを尻目にかけていつた。」

「早く本題に入つて貰はう。」マアリンは痛いところを刺されたのでときりとしたが、負けない氣になつて交つかへした。

「マアリン君が證據を握り損ねた事は諸君の知つてゐる通りだ。斯うなつた以上、吾々はデルレイド自身に證據を提出させるのだ。」レノアは言葉を續けた。

「どうしてそんな事が出来る？」人々は反問した。

「それは最も簡単な方法である。古い言草だが、手頃の繩を與へれば自ら首を吊るといふ諺があるぢやアないか、吾々はデルレイドに手頃の繩をやるのだ。それには檢事の了解を得なくぢやアならぬ。そこで吾々は一つの茶番を演ずるのだ。」

「贊成！ 贊成！」マアリンは有頂天になつて叫んだ。

「デルレイドを密告した女が即ちわれわれの用ひやうといふ囚なのだ。その女は何故にデルレイドをギロチンに送らうとしたかといふと、マアリン君が想像したやうに、男に棄てられたからではなく

て、男が餘り執念く附纏つてきたからである。彼女は別に情人があつた爲にあの男を邪魔にしたのだ。」

「フ、ン、それがどうしたつていふんだ。」チンビュは不機嫌な顔をした。

「それはデルレイドが酷く女に惚込むでゐる證據だ。だから女をギロチンから救ふ爲に、奴は夢中になつて奔走するだらう。そこで俺が奴に首を縊るに充分な繩を與へてやらうといふのだ。」

「どういふ意味なのかな。」頭腦の鈍い二三の男はレノアの言葉を了解かねて首を傾けた。

「諸君は俺のいふことが了解らないで狂人か醉漢か、但しはデルレイドの如き反逆者とも思つてゐるかも知れない。まア五分間辛抱し給へ。先づ吾々はあの女が……何ていつたつけ、さういふジュリエット、詮りジュリエットが法廷に立つた時の事を想像して見よう。わがチンビュは彼女に對する告訴狀を讀上げる。即ち彼女が書類を竊に焼却した事及び奇怪な書類入が彼女の部屋に發見された事などが讀上げられる。若し、告訴狀の中にこれ等の書類が政府の敵との通信文書であるといふ事が記載されてあれば、裁判は直に進行して判決となり、斷頭臺送りとなる。さういふ場合には辯護の餘地は與へられない。然しながら民事に互る事件即ち道德的犯罪の場合には公判廷に於いて辯護人を附する事を許されるだらう。然らざる場合はジュリエットは數分間に判決を下されて、翌日の夜明前に刑を執行されて了ふから、デルレイドは彼女を救ひ出すべき手段を講ずる暇がない。尤も彼の事であるから、愛する女を救ふ爲には天を動かす手段を講ずるに違ひない。巴里の暴徒は彼に味

方する。彼等はデルレイドの爲には實際如何なる事をも爲しかねない。デルレイドは如何にして民衆のセンチメンタルな感情を操つてゆくかを最もよく心得てゐる。一方民事訴訟となつた場合を考へて見給へ。ジュリエットといふ妖婦は焼却した書類は戀文であるといひ張つてゐる。それ故檢事は民事訴訟として辯護人を立たせる事を許すだらう。さうなつたなら、デルレイドが彼女の爲に立つて辯ずる事は火を堵るよりも明かである。諸君、あのデルレイドが法廷に立つて自分の愛してゐるジュリエットの燃した戀文を他の情夫から來たものであると斷言し得るであらうか、いや斷じてない。彼は必ずジュリエットに隠し男があつた事を極力否定するに違ひない。そこで檢事が、鋭く突込むでいつたなら彼はジュリエットの焼却したのは戀文に非ずして彼の大切な書類で、彼女は彼を救ふ爲に虚偽の申立をしたのだといつて辯護するにきまつてゐる。諸君どうです？」レノアは言葉をきつて額の汗を拭ひながら乾き切つた咽喉を潤す爲にブランデーをがぶりと飲むだ。

彼の長い演説に耳を傾けてゐた人々は、満足の溜息をした。チンビュやマリンの如きは、日頃から嫉しく思つてゐたデルレイドを陥入れる機會を見出したので、餓えた犬のやうな顔をして咽喉をごくく〜鳴らしてゐた。

この一二ヶ月間といふものはこれ等の犬達を満足させるやうな事件が皆無であつたのでそろ〜退屈を感じてゐたところであつた。彼等は翌日の裁判を待遠しくさへ思つた。レノアが永いお饒舌に疲れて口を閉ぢてしまつた後、各自ブランデーを煽りながら、がや〜と同じ問題に就いて喋り合つてゐた。

刻々と夜が更けていつた。一番先に席を立つたのはレノアであつた。續いて次から次へと暗い町へ出ていつて了つて、部屋の中は急に陰氣に静まり返つた。最後に残つたのはチンビュとマリンであつた。

「おいマリオン君、あのレノアつて男はどういふ男だ。」

「詳しい事は誰も知らないのだが、よくこ〜へくる奴なんだ。田舎漢さ、何でもカレイの方で肉屋をしてゐるとかいふ話だ。最初あの男を連れてきたのはプロガアドだ。例の熱心な愛國者さ。」

「どうもあの男は少し雄辯過ぎるな、さう思はないか。」

「成程、さういふはれて見ると、あゝいふ男は危険だな。」

「尤も奴の策略は上等だが……」

「だからこの際は奴の説を容れてやるが、いづれ……」チンビュは言葉を濁してにやりとした。

「さうだ、奴は危険人物だ、明日一日は見遁しておいてやるが、いづれ……」とマリオンがそれに應じた。

チンビュは部屋の眞中にある、ギロチンの形態をした柱を愛撫した。彼の顔には残忍な野獸のやうな表情が浮むでゐた。同じ表情をしたマリオンも舌なめずりをして領首いた。

二人は急に親しみを感じて、肩を並べて表へ出ていつた。

夜番が籠燈を下げて「巴里の市民よ、安らかに眠れ、凡て秩序正しく、凡て平和なり」といつものやうに極り文句を叫びながら人足の杜絶えた暗い往來を通つていつた。

二十一、一日の終り

デルレイドはその晩中、必死になつてジュリエットの行方を捜してゐた。晝間、アンミイから留守中の出来事をきくと、彼は直にパーシー卿を訪ねて、母親とアンミイを巴里から落す事を依頼した。

彼は生れつき理想家であつたが、自分の名聲がいつまでも現在のまゝの状態で續くといふやうな夢は見えてゐなかつた。群衆が彼に對して抱いてゐる愛はいつ何時、憎惡に變るかも知れないと知つてゐた。それ故、彼が市民から信用されてゐる間に、出来るだけ早く、自分の家の始末をしてはうとした。彼は今から一年前に旅行券を手に入れてゐた。そして母とアンミイを何時でも國外に旅立たせる事の出来る準備をしておいた。

それ故ジュリエットが逮捕されてから二時間と經過ないうちに、デルレイドの母親とアンミイとは旅装を調べて家を出て了つた。二人は巴里の市外で紅ハコベ團のヘイスティング卿とアントニー卿とに出會つた。そしてその二人に送られて、パーシー卿の快走船に乗つた。デルレイドは最早何の足手纏ひもなかつた。

ジュリエットの乳母のペトロネルも、共に巴里を落延びさせる豫定であつたが、如何にデルレイドが言葉を盡しても彼女は、

「若し、お嬢様が死んでお了ひになるのなら私ひとりで生きてゐて何になりませう、私も一緒に死んで了ひます。けれども若しお嬢様が放免されたとしたら、私があるいでどうするでせう。私は巴里にゐてお嬢様の先途を見届けませう。」といつてデルレイドの勸告に従はなかつた。デルレイドも彼女の道理な言分を諒として彼女を以前の住居へ戻らせた。

デルレイドはジュリエットを救出すといふ事は殆んど望みない事だと知つてゐたが、それでも尙、最後まで望みをかけて努力しようと思つた。彼の唯一の目的はジュリエットを救出す事だつた。だが巴里には十幾つといふ監獄がある。そして五千人からの囚人が死刑の宣告を待つてゐる。

デルレイドは最初、自分の地位を利用してやつたならばこの仕事は大して困難でないと思つてゐた。然るに裁判所ではこの事件を極秘にして彼には何事もきかせなかつた。それにその日逮捕された人物の人名簿は、翌日でなければ出来上らない。そんな譯でデルレイドは巴里中の監獄を片端から根氣よく捜さねばならなかつた。

何處へいつても彼の熱心な間に報いられるものは素氣ない典獄の態度だつた。

臆て明日になれば、僅數分間の形式的な裁判で彼女は斷頭臺に送られて了ふにきまつてゐる。デルレイドは看守に賄賂をつかつたが彼等は囚人を個人的に知つてゐなかつたので、デルレイド自身を獄

房に入れて群がつてゐる囚人等を見せた。そこには男も女も身動きも出来ない程大勢の人達が狭い房舎に押込められてゐた。デルレイドはその光景を見て身慄ひをした。

「竟にデルレイドはジュリエットを見出す事が出来なかつた。彼はよもやジュリエットが重罪犯人と

してルクセンブルグ監獄に收容されてゐやうとは思はなかつた。最早夜の明けのを待つて、

裁判所に於いてジュリエットの審問が始まるのを待つより他はなかつた。斯うしてデルレイドが焦燥

な心を抱いてセーヌ河の畔を歩いてゐるうちに、東の空が白むできた。夜明前の灰色の光を浴びた

巴里の市は一層陰惨に見えた。首を垂れて歩を運むでゐたデルレイドは突然肩を叩かれた。

「私の宿へおいでなさい。ひどく穢苦しいところだけれども、勘くもゆつくり話をする事だけは出来

ませうから。」といふ快活な聲に、吾に返つて顔をあげると、脊の高いパーシー卿が悠然と目の前に

立つてゐた。デルレイドは無言のまま、パーシー卿の後に蹤いていつた。

二人は迷路のやうな細い道路を曲りめぐつて、とある横町の小さな家の前に出た。玄關の戸はまだ

夜明け前なのに無雑作に開放つてあつた。

「この亭主は泥坊に盗まれるやうなものは何にも持つてゐないものだから、この通りよつびて家を

開放しておくのです。尤もこんな見窄らしい家ぢやア、扉が開いてゐたからつて、誰も誘惑されるも

のではないでせう。」パーシー卿は相變らず呑氣なことをいひながら、狭い急な階段を上つて、二階の

一間に案内した。

「よくこんなところに辛抱していらつしやいますね。」デルレイドは粗末な部屋の中を見廻した。

パーシー卿はぎし／＼いふ毀れかゝつた椅子に大きな體軀を埋めて、樂々と足を踏み延した。

「私は貴郎をこの恐しい市から救ひ出す時がくるまで、この穴の中に籠つてゐるつもりですよ。」

「そんなら貴郎は一刻も早く、英國へお歸りになつたがいゝでせう。私は決して巴里を去らない覺悟

ですから。」デルレイドは悲痛な顔をしていつた。

「ジュリエット嬢が一緒でなくては……といふ意味でせう。」

「ところが、あの人は吾々の手の及ばないところへいつて了ひました。」

「貴郎はあの人をルクセンブルグ監獄にゐる事を知つてゐますか。」パーシー卿は突然に訊ねた。

「そんなことだらうと、想像しました、然し何の手掛りを得る事も出来なかつたのです。」

「で、明日、裁判に附される事も御存じですか。」

「囚人を永く生かしておかないのが常ですから、そんな事だらうと思つてゐました。」

「貴郎はどうするつもりですか？」

「私は呼吸のある限り、彼女の爲に辯護するつもりです。」

「貴郎はまだあの人を愛してゐるのですか？」パーシー卿は微笑を湛へながらいつた。

「まだ？」その一言をいつたデルレイドの顔にも聲にも烈しい熱情が籠つてゐた。

「貴郎を裏切つたにも拘らず……」

「然し、あの人のした事は正當です。神への誓を守らなければならなかつたのです。そして今その罪を償ふ爲に生命を賭してゐます。」

「貴郎はあの人をすつかり許せるのですか？」

「理解するといふ事は許す事になりませう。それに私はあの人を愛してゐます。」

「貴郎のマドンナですか。」パーシー卿は軽い皮肉をいつた。

「いゝえ、私の愛してゐる女です。罪も弱さも持つてゐる女です。私は彼女を得る爲に身も魂も捧げます。」

「で、彼女の方では？」

「あの人は私を愛してはゐません。だからこそ私を賣つたのです。」デルレイドは力なく卓子の傍に腰を下して、両手に顔を埋めた。彼は親友のパーシー卿にさへ自分の悩みを覗かれたくなかつた。

パーシー卿は何にも云はなかつたが、彼の肩の邊に謎のやうな微笑が浮むでゐた。彼の心には美しいマグリットの顔がちらと影をさした。曾ては彼女もジュリエットと同じやうに彼に對して一つの過を犯した事があつた。デルレイドも又彼と同じやうに眞實の女性の心を握る時がくるであらう。パーシー卿は顔をあげて何かいひかけたが、急に思ひ返して止めて了つた。そして恰も、

「凡てを時と、機會に任せよ。」といふやうに廣い肩を揺つた。

デルレイドが再び顔をあげた時には彼はもういつもの無表情な顔をして、呆乎空を視詰めてゐた。

「貴郎は私がどんなに深く彼女を愛してゐるかお解りませう。何卒私が死刑の宣告を受けた後、私に代つてあの人を救つて下さいませんか。」デルレイドは昂ぶつてくる感情を押鎮めていつた。

パーシー卿の懶氣な顔が急に活々としてきた。

「彼女を救へと仰有るのですね！ 貴郎は吾々、紅ハコベ團が超自然的な力をもつてゐると考へてゐられるのですか？」

「貴郎にはその力があると信じてゐます。」

パーシー卿は再び何か重要な事を相手に打明けようとしたが、思返したやうに止めて了つた。紅ハコベ團は感情に支配されて動いてゐるのではない。團員は悉く實行家である。卿は友人の興奮しきつた様子を見て、何事も告げない方が安全であると思つたのであつた。それ故僅に微笑して、

「まア、全力を擧げてやつて見ませう。」と靜かに答へた。

二十二、正義

その日の裁判所は殊の外多忙を極めてゐた。僅八時間のうちに三十五人の囚人が裁判の上判決を下された。即ち前途ある健康な人間を殺すも活すも十二分三十秒の間に決定するのである。

この三十五人は孰れも共和政府に謀叛を企てたものとして檢舉げられたのである。而もその中の大多数は奸惡な敵や、嫉妬深い友に賣られたもので悉くマアリン法によつたものである。従つて全く

無實の罪に陥入られたものも尠くない。それにも拘らず裁判長は三十五人の中の三十人に死刑の宣告を下した。

この暑い八月の午後、血をもつて彩られた一日が暮れやうとして、黄昏の陰影がこの細長い部屋に忍び寄つてゐた。裁判長は一番奥の正面に大卓子を前に座してゐる。その背後の壁に「自由、平等正義」と大書したのが目立つてゐる。左右には二人づゝの書記が控へて鶯ベンの音忙しく書類の作製をしてゐた。

一段低い腰掛にはマアリンが坐つてゐる。卓上に點された蠟燭の黄色い光が竝居る役人達の顔を一段無氣味に見せてゐる。

中央の鐵柵を繞らした高い臺は囚人の爲に設けられた席で、天井から小さな眞鍮のランプが吊されてゐる。

兩側の白い壁に沿つて三列に竝べてある椅子は場所柄不似合な彫刻を施した立派な品である。それ等は孰れもノートルダム、伽藍其他の有名な寺院から引擧つてきたものである。最前列は市民代表者席である。どの席も新政府の役人で埋つてゐる。その中には前夜シバル・ボルニの宿に參集してゐた人々の顔が揃つてゐた。夫等の人々は隅の方の席に一人離れて腕を拱いてゐる市民の偶像デルレイドに眼を注いでゐた。正面から受けるランプの光が彼の黒い丸い頭と、闊い額と、大きな落着かない眼とを照し出してゐる。

傍聴席には血に餓えた野獸のやうな男女が充満してゐた。優しさも同情も失つて了つた女達は憎惡に満ちた顔をあげて、貴族の女が引出される毎に、かさくんに乾いた唇を動かして罵り喚いた。彼等は死刑の宣告が下される毎に牀を踏み鳴らして満足の喊聲をあげた。然るにその恐ろしい群の中に交つてゐた幼い女の子が、不圖デルレイドを見出して、

「デルレイド小父ちやま！」と紅葉の手をあげた。幼児は曾てデルレイドの家に招かれて白いパンと、甘い牛乳の饗應を受けた楽しい日を忘れないでゐた。そして彼女の胸に深い印象を留めた懐しい小父さんを見出した喜びに無邪氣な聲をあげたのであつた。

デルレイドはその聲に少し身を前に屈めて幼児に優しく挨拶を返した。その瞬間彼の緊張した顔が一寸の間弛んだ。この小さな情景が傍聴席に群がつてゐた人々の心を和げた。女達は互にひそくと耳打をして親しみの籠つた視線をデルレイドに浴せた。

マアリンは苦々しげに舌打をした。チンビュは不機嫌な顔をして荒々しく鈴を鳴らして、「次の被告を引出せ」と命じた。

傍聴席には満足のざわめきが起つた。そして天使は再び顔を覆はねばならなかつた。

二十三、審問

場内は一時鳴りを鎮めた。

ジュリエット・マアネイの若く美しい姿が被告席に現はれた。鼠色の質素な衣服を着て、白い肩掛を首に巻いて帽子の下から、豊かな金髪が覗いてゐる。彼女の面長な顔は蠟細工のやうに白かつた。彼女はまるで周囲には氣を留めてゐない様子で、正面を視詰めたきり確かりした歩調で階段を上つてきた。それ故、彼女はデルレイドのゐるのに氣付かなかつた。被告席に立つた瞬間、彼女の大きな眼は不思議な輝を帯びた。そこには殉教者のやうな神々しさがあつた。彼女は愛する男の爲に生命のみならず、凡そ女性として保つところの最も大切な婦徳さへも惜氣もなく投出さうとしてゐるのである。彼女の名が高く讀上げられた時、デルレイドの受けた苦痛は精神的ばかりでなく殆んど肉體的にも胸を刺した。

デルレイドは昨日からこの恐しい瞬間のくるのを待つてゐたのだ。聽て検事の告訴狀が讀上げられた。彼女は曾てシャロット・コルデイが立つたと同じ場所に立つてゐた。

デルレイドは表面平靜を装うて、不法な告訴狀に耳を傾けてゐた。彼は彼女のために飽まで自重して、逸る心を撓てゐなければならなかつた。さればこそ、斯うしてをばりまで我慢してきいてゐるのである。

「ジュリエット・マアネイ、汝は市民代表者ポウル・デルレイドに對して虚偽の申告を爲したる廉によつて告訴されたものである。汝の行爲により共和政府は罪なきものに召喚狀を發し、剩へ家宅捜査の勞をまで取るに至つた。而も汝の罪たるや、國家を思ふの餘り、過つて申告したるに非ずして、汝を墮落の境地より救はんとせしものを忌避し、却つてこれを陥入れんと謀つたものである。されば汝は淫奔にして社會の風紀を紊し、誹謗譏誣によつて治安を攪亂するものとして罪に問はれるのである。自ら提供したる證言によつて右の事實は明白なるのみならず、共和政府の一員は名譽を毀損されたのである。汝は斯くしてポウル・デルレイドに對し、又延いては共和政府に對し許すべからざる罪を犯したるものである。汝の罪は規定により巴里全市民の前に於いて鞭打たれ、然る後、サルペチエルの監獄に送られ、そこに於いて更に來るべき判決を待つべきものである。汝これに就いて異議あらば速に申立つべし。」

傍聽席には嘲笑、罵詈、呪詛の聲が起つた。彼等はこの忌はしい告訴文をきいてゐる中にまるで理想境にでも到達したやうな有様であつた。

天使のやうな美しい乙女が斯る凌辱を負うてゐるのを見て、女達は凱歌をあげた。兒童等は意味も解らず、只母親達に眞似て手を叩いて嘯立てた。

デルレイドは燃上つてくる忿怒の念を押へる爲に骨の碎ける程闘つた。彼の指の爪は掌に喰ひ入る許りであつた。彼は氣が狂つてゆきさうに思つた。卑賤しい暴民等の叫聲は恰も地獄から響いてくる亡者の聲のやうに聞えた。彼がこれまで抱いてゐた貧しい者達に對する同情も、弱い者に對す

る憐憫も一時に消えて了つた。彼は妖怪のやうな革命の姿を見せつけられて、云ひ難い憎悪を感じた。そして彼等が憎み、苦しむ、餓えて悲惨な最後を遂げて了ふ事さへも希つた。人道主義のデルレイドの胸にこのやうな悪魔的な考へが浮んできたのであつた。然しジュリエットは飽まで、冷静で心に漣波も起さなかつた。

彼女は黙つて告訴状をきいてゐた。そして息はしい判決をきいて彼女の白い頬は次第に灰色に變つていつた。然し彼女は最初からの憤み深い態度を聊かも崩さなかつた。

彼女は罵り騒ぐ傍聴席には目もくれなかつた。唯細い指先で神経的に欄干を叩きながら、鳴りの鐘まるのを待つてゐた。場内の空氣は人いきれで重苦しくなつてきた。蠟燭の油と汗臭い臭氣とが交りあつて息詰りさうである。

被告席の上にさがつてゐたランプがぶすくと油煙を立て、火屋に罅がいつた。その音に驚いて人は鳥渡鳴りを鎮めた。その機會に裁判長は再び訊ねた。

「ジュリエット・マアネイ、汝はこの判決に對して申立てる事はないのか。」
ランプの油煙がばら／＼と落ちてきた。ジュリエットは華奢な指先で袖の上に落ちた煤を拂ひのけながら答へた。

「いゝえ、私は何にも申上げる事はございません。」
「汝は市民としての權利により、辯護士を依頼したか。」

ジュリエットは直ぐにも答へようとした。彼女の唇はそれに對する否定の言葉を出さうとした。その時、デルレイドが突如、席から立つた。

「ジュリエット・マアネイ嬢は私を辯護人に指定しました。私はこゝに立つて佛蘭西國民の名に於いて正義の裁斷を要求します。私は被告の立場を辯護する爲に、こゝに立つたのであります。」

二十四、辯論

傍聴席は歡呼した。

「デルレイド確かり頼むぞ！」誰か叫むだ。男も、女も、児童も、單調な法廷の空氣に飽きてゐたので、事件が意外な方向に轉換していつたのを喜んだ。デルレイドが立つた以上、この裁判は平凡には終るまい。それに人民等は常にこの大立物の雄辯に耳を傾けるのを好んでゐた。居睡りしかけてゐた陪審官達は興味を新たにして居住をなほした。

ロベスピエルは薄い唇に微笑を浮べてこの場面がマアリンにどんな影響を及ぼしたかと、竊にうかゞつた。マアリンとデルレイドの間に絶えざる軋轢があつた事は周知の事實であつた。それ故人々は特に興味をもつた。

腰掛の一番高い席にレノアが控へてゐた。彼は前夜シバル・ボルニユの宿で撰議した事が實現されたので、満足氣にそれ等の光景を見下してゐた。マアリンの鋭い眼はざわめき動く群衆の中を縫つて偉

大なる政敵である壇上のデルレイドに注がれた。

ジュリエットに對して亂暴極まる告訴をした檢事を正面に凝視してゐるデルレイドの引しまつた顔が、石油ランプの光に照らし出された。それと向ひあつて座をしめてゐるチンビュの大きな頭腦が卓子の上にとぼつてゐる蠟燭の黄色い光をうけて怪奇な影繪のやうに見えてゐた。

ジュリエットは相變らず氷のやうに黙つてゐた。だが並居る人々は誰も彼女の青褪めた頬に、微かに紅がさしてきた事に氣付かなかつた。

チンビュは興奮した人心が治まるのをまつて言葉を發した。

「市民デルレイド、君は被告に對する判決について何かいふ事があるのか。君は何故、この判決に不服を唱へようといふのだ。」

「私は被告に對する告訴狀の命令を否定し、被告の無罪を主張するものである。」デルレイドは決然と答へた。

「君はどういふ證據があるか立證する事が出来るか。」

「事は簡單である。告訴狀に記載されてゐる手紙といふのは被告の所有品ではなくて私のものである。かの焼却された書類の中には現在入獄中のマリイ・アントワネットに渡すはずになつてゐた通信が入つてゐたのだ。私はコンシユルヂェリ監獄に典獄として赴任する機會を利用して、マリイ・アントワネットを救出す計畫をしてゐたのである。それ故ジュリエット・マアネイ嬢が私を告訴したといふ行為は實にわが共和政府に絶大なる貢獻をなしたものと云はねばならぬ。」

デルレイドの言葉が進むにつれて、群衆の中から怒濤の崩れるやうな響が湧起つてきて次第にそれが一つ／＼言葉になつていつた。そして竟に彼の最後の聲は夫等の凄しい叫聲に吞まれて了つた。

民衆の友であり、尊敬の的であつたデルレイド、兒童等の父、女達の同情者、幼兒に小父さんと呼ばれたデルレイドが、反逆者であり、曾ては佛蘭西女王として、民衆の怨恨の的となつてゐた、マリイ・アントワネットを脱獄させようと企てた陰謀者であるとは！

一度彼自身の口から斯うした祕密が暴露されるや、群衆の盲目的な愛は忽ち憎惡に急變した。

最初、彼等は驚愕の爲に片唾を呑んだ。彼が貴族を辯護する爲に立つたことさへも、既に人々を不審に思はせた。或者は彼が自分自身の祕密が暴露しかつたのを悟り、民衆の人望を恃みに自白したのだと推した。

彼は民衆の偶像であつた。然しながら今や彼は祭壇から引下されて粉微塵に紛碎されて了つた。

人々は深く彼を愛してゐただけに、憎しみも一倍に強かつた。デルレイドの政敵等は満足の微笑を浮べた。

マアリンは安堵の吐息を重ねた。チンビュは喜びの餘り、大きな頭を揺つた。

田舎漢レノアの豫言通りとなつた。この浮薄な世の中で、頼み難い中にも最も頼み難いところの人氣は、太陽の前の朝露の如くに消えて了つた。寔にレノアが想像したよりも遙に速に人心は變動

して了つた。

デルレイドは手頃な繩を與へられた。そして既に自ら頸を縊つて了つたも同然である。凡てが事實となつて表はれるのは單に時間の問題である。翌朝日の出と共にギロチンが彼を呑んで了ふ。昨日は彼を罵る者があつたならば手足を引裂く程の勢ひだつた民衆は、明日は誹謗讒誣をもつて彼を刑場へ引立て、ゆくだらう。

デルレイド自身もそれを知つてゐた。そして彼は愛するジュリエットをギロチンから救ふ爲には如何なる運命をも甘んじて受ける覺悟で昂然と頭をあげて民衆の裁斷を待つた。ジュリエット自身も失神したやうに茫然と立つてゐた。彼女の頬の色は再び褪せて了つた。彼女は人間として能ふ限りの惱みをこの瞬間に味つた。

デルレイドは彼女の捧げた生命を受容れない。彼の愛は死んで了つたのだ。そして彼女の捧げた貴い犠牲を拒んで了つた。それは彼女にとつて最も大きな受難であつた。

斯うしてこの二人は人世の異常な瞬間に於いて互に顔を見交しながら、竟に互に理解する事が出来なかつた。唯一言、言葉を交す事が出来たならば、お互の胸の扉を開く事が出来たであらうに！

裁判長は鈴を鳴らして場内の騒ぎを鎮めた。

「市民デルレイド、お前は陰謀に關する證據書類を焼却し、夫等の書類を入れておいた靴を引裂いたのはお前自身の所爲であるといふのか。」

「さうです。あの書類は私のもので、私自ら焼きました。」

「だが、被告ジュリエットはかの書類を文殻であると主張し、それを焼いたのは彼女自身であると自白してゐるではないか。」チンビュはデルレイドに與へた繩がまだ充分でないと思つたと見えて、くどくどしくいつた。

「市民よ！ 友よ！ 兄弟姉妹よ被告ジュリエットはまだ年若く世の中の恐しさも知らぬ純眞な乙女であります。諸君も母や兄弟や娘を持つてをられるでせう。従つて女性の持つ、不思議な心の動きを知つてをられるでせう。諸君は女性の優しい衝動的な感情を了解されるでせう。諸君は彼女達のさうした氣紛れな心持をお解りになるでせう。諸君、被告を御覽なさい。彼女は共和國を愛し佛蘭西國民を愛してゐます。そして私が母國に對して恐しい陰謀を企てたのを悲しみ、事を未然に防がうと努力したではありませんか。最初彼女は私の罪を罰し或は私に警告を與へようとしたのです。だが、諸君、若い娘が大人の考へる程、用意周到に事を爲すものではありません。彼女は感情のままに行動を執つたのです。然る後に彼女の胸に理性が目覺めたのです。そこに女性のもつ優しい感情が動いて後悔となつたのです。彼女は私の陰謀を防止しました。然し私が危難に陥つたのを見て彼女の眞實な友情は再び私を救出さうと計つたのです。彼女は一人の息子を失はうとしてゐる私の母に同情しました。又彼女は私の不具な従妹を愛しました。即ち彼女は反逆者デルレイドに非ずしてその背後にゐる二人の頼りない女達の爲に第二の行動を執つたのです。彼女は自らの虚偽に惱み、尊い犠牲を拂つ

たのです。彼女は生れたての子供の如くに無垢であります。それにも拘らず女性として最も麗はしい感情の爲に、死をも厭はぬ雄々しい姿を見て下さい。私は諸君の尊い心に訴へて彼女の爲に公平な裁きを乞ふものであります。」

デルレイドの魅力のある聲は法廷の四壁に響き渡つた。湧立つてゐた傍聴者も流星に彼の眞實の籠つた言葉に心を打たれた。

マアリンは折々チンビュの謎のやうな表情を讀まうとした。然しながら彼は煙杖を突いた儘、全く無關心な顔をして空間を視詰めてゐるのみであつた。そしてデルレイドが席につくと徐に立上つて、

「では、お前は被告が純眞無垢な少女であつて不合理な裁きを受けたと申立てるのであるか。」

「さうです。」デルレイドは大聲に答へた。

「ではきくが、お前はどういふ理由で公開の席上で自らの陰謀を白日したのであるか。」

「佛蘭西の男子は婦人の名譽を犠牲にしてまで生きようとは思はない。」

「全くさうだ。吾々は市民デルレイドの武士道を認める。詰り被告ジュリエットがお前の焼却した書類に關して何事も關知らぬと申立てゝゐるのも、お前のその武士的精神から發露してゐるといふのだな。」

「いや、私が申立てゝゐるのは被告の辯護ではなくて、事實を指摘してゐるのです。書類を焼却したのは私自身の所爲である。私はそれがマアリン君によつて發見されたといふ事は此も知らなかつた

のです。歸宅後初めてジュリエット・マアネイ嬢が私の留守中に意外な嫌疑を受けた事を知つたのです。」

「然し被告ジュリエットは戀文だといつてゐる。」

「それは虚偽です。」

「お前は飽まで被告を純潔であると云ひ張るのか。」

「無論です。」

「然し、お前はこの純潔無垢な乙女の寢室を度々訪れたのはどういふ譯だ。」

「そんな事は斷じてありません。」

「それではお前の機密書類が被告ジュリエットの寢室に於いて焼却され、その書類を入れてあつた折靴が女の衣類の中に隠匿されてゐたといふ事に就いてはどう説明する。」

「そんな事は斷じてありません。」

「その眞偽に就いてはマアリン君の答を待たう。」

「それは虚偽では御座いませぬ。」ジュリエットは突然叫んだ。

デルレイドは唇をかねて黙つた。この一つの事實を彼は知らなかつたのである。彼はアンミイから留守中の出來事をきいたが、その僅かな事實一つだけをアンミイから聞洩してゐたのである。その爲に彼の陳述は根柢から覆されて了つた。斯うなると、傍聴席の一部にまだいくらか残つてゐた穩

和た空氣も悉く消えて了つた。人々はデルレイドとジュリエットが共謀して市民を愚弄してゐるものと思つて激怒した。

裁判長は鈴を烈しく鳴らして閉廷を宣告したが、群衆は退場する事を拒んだ。

「反逆者を遣付ける！ デルレイドを殺せ！ 貴族を打殺せ！」と群衆は怒號した。その中で第一線に立つて暴徒を煽動してゐたのはかのレノアであつた。騒動が絶頂に達した時、レノアは巧に群衆の心理を掴んで、

「戸外へ引ずり出した方がいゝぞ、役人等にこの茶番の結末をつけさせておいて、後始末は俺達がやるんだぞ。さア皆早く出ろ、出ろ、廣場へゆくんだ！」と叫んだ。最初は彼の言葉に耳を傾けるものはなかつたが、彼が二三度強張して繰返してゐるうちには群衆は羊の群のやうにレノアの後に従つて場外へ出た。

「さア、刑場へ！ 刑場へ！」

二十五、死の宣告

デルレイドは場内の光景に酷く胸を打たれたらしい。彼の表情に富んだ眼には彼の心を鏡の如くに映してゐる。曾ては彼に心服してゐた民心が一時に離れてゆく様を眼のあたり見て感慨無量であつた。

けれども群衆が潮の退くやうに場外へ出て了ふと、彼は靜かに、席を離れてこれまで市民代表者として座してゐた席から被告席に就いた。彼の左右に嚴しい看守が立つた。その時から彼は國事犯人として罪人の扱ひを受けるのである。

喧擾のあとの場内は急に靜かになつた。廣い法廷の中ではチンビュが傍らの書記に何事か早口に囁いてゐる聲と、書記が忙しくペンを走らせる音が聞える許りであつた。

チンビュは書記から受取つた書類に署名をした。

マアリンは恰も烈しい労働の後のやうに額の汗を拭いてゐた。ロベスピエルは冷然と嗅煙草をかいであつた。

デルレイドの立つてゐるところからランプの光を受けてくつきりと浮び出てゐるジュリエットの細りとした姿が見える。彼の胸には彼女を救出し得なかつた悲しみと、彼女と共に死ぬ歡びとで一杯であつた。

二人は夜明け前に俱にギロチンの露と消える運命であつた。凡ての運命がきまつた時、彼の胸に残つたのはジュリエットに對する愛のみであつた。

彼は死を目前にしてジュリエットの心の惱みが少しでも尠い事を祈つてゐた。そしてこれから數時間彼女と共に過す事の出来る事は彼にとつてこの上もない歡喜であつた。事によつたら、いくらかでも彼女を慰める事が出来るかも知れないと考へた。

デルレイドがそんな事を思ひ耽つてゐる間に、チンビュは必要な書類の作製を終つて了つた。一通はジュリエットに對する死刑の宣告書、一通はデルレイドに對するもので、二人とも同じ罪名の下に刑場に送られる事となつた。

型シヨウの如く宣告書せんこくしょを讀上げた後、チンビュはジュリエットに對して何か申し遺す事があつたら云ふが、いいといった。ジュリエットは、「何にもありません、私は御氣おきの毒どくなマリイ・アントワネット女王みやうがこの恐おそしい無政府むせいふの國くにからお遁のがれになる事が出来なかつたのを悲かなしみます。私の最後の言葉はそれだけです。」と早口はやぐちに聲高こゑたかく叫んだ。いふまでもなくこの大膽だいだんな言葉は共和政府きやうわせいふの役人やくじんを激怒げきどせしめた。彼女は忽たちち二人の看守かんしゆに荒々しく席せきから引ひずり下おされた。斯かくしてポウル・デルレイドとジュリエット・マアネイとは嚴重じんじやうな警護けいごの下もとに監獄かんごくへ送られる事になつた。

二十六 暴動

夜の九時近くであつた。巴里の町々は乏なげしい街燈がいでんに一層そうわ侘わしく見えた。その上霧雨うきりがぢめ／＼と降りそゞいで凸凹でこぼこの道路だうろが溼ぬるんで沼ぬまのやうになつてゐた。裁判所さいばんしょの周圍しゅういには強いブランドーを強たかく煽あつた群衆ぐんしゆが殺到ころたうしてゐた。彼等かれらは降りしきる雨あめをも

ともせず、憎むべき市民しみんの敵てきを私刑しりけいにしようとする彼等かれらの退延たいえんを待構まちかまへてゐるのであつた。男おとこ、女おんな、兒童こどもに至るまで裁判所さいばんしょの正門せいもんから、セーヌ河せーぬの堤つとみまで、犇ひしめき合つてゐた。河がはに沿そうた道路だうろの瓦斯燈がすとうの一つが、それ等の群衆ぐんしゆによつて叩たたき毀こされて、その頂たかきから首くびつり繩なわがだらりと下さつてゐた。そこを彼等かれらは私刑しりけいの場所ばしよに定さだめて、その周圍しゅういに數人すうじんの女おんなが張番はりばんをしてゐた。

男達おとこたちは恰ただも狂犬きやうけんの群ぐんの如ごとく、間斷かたなく喚わき立たてながら、右往左往うわさわに押合おしあつてゐた。その群衆ぐんしゆの中に並外なみがいれて脊せきの高たかい、例れいのレノアの姿すがたが目立めだつてゐた。彼の田舎訛いんかみの胴間聲どうまこゑが群衆ぐんしゆの聲こゑを壓倒あつたふしてゐた。彼は機智きちに富とんだ言葉ことばで盛もに人心じんしんを煽動せんどうしてゐる。

市いちを覆おほうてゐる闇やみと、降りしきる雨あめとが一層そう群衆ぐんしゆの氣分きぶんを險惡けんあくにした。薄暗うすくらがりの中で隣人りんじんの顔かほさへもはつきりと見極みきめる事ことも出来できない彼等かれらは全く自制心じせいしんを失うつてゐた。

デルレイドが支關しけんに現あらはれた時とき、戸口とぐちの燈火あかりが彼の顔かほの上に光ひかりを落おした。群衆ぐんしゆの前面ぜんめんにゐた數人すうじんが彼の顔かほを認みめて、

「反逆者はんぎやくしやが出現しゆげんしてきたぞ！」と叫こゑんだ。それに續ついて雲くもを裂さくやうな聲こゑが起おこつた。政府せいふはデルレイドが雄辯ゆうべんをふるつて群衆ぐんしゆを手押ておけるのを懼おそれ、軍隊ぐんたいを出動しゅつどうさせて群衆ぐんしゆを近づちかげないやうにした。けれどもデルレイドにはさういふ意志いしは更さらになかつた。彼はジュリエットが冷たい風かぜにあたるのを氣遣きづかつて頻しばしばりに彼女かのじよを雨あめのしぶきから庇かばつてゐた。

聽きて看守人かんしゆじんに促うながされて二人ふたりは囚人馬車しゆじんばしやへ乗のつた。雨あめは一層そう烈れつしくなつた。デルレイドは自分じぶんの上衣うわぎ

を脱いでジュリエットの肩にかけた。そして誰か人を探し求めるやうな熱心な視線を群衆の中に向けた。

「遣付けろ！ 遣付けろ！」といふ聲が絶間なく響いてくる。

間もなく囚人をルクセンブルグ監獄へ護送する時刻となつたが、如何に軍隊の力をもつてしてもこの暴徒の中を無事に抜けてゆく事は不可能であつた。合圖の太鼓が鳴り響くと同時に、遠くセーヌ河の橋上までも潮のやうに暴徒が押寄せてきた。彼等は囚人馬車を掠奪する爲に軍隊と闘ふ事さへ辭さない有様であつた。

「遣付けろ！ 遣付けろ！」

看守等は途方に暮れて了つた。援兵がくるまでにはまだ間がある。その間、それ等の群衆を喰止めておくのは至難であつた。そして次第に形勢が悪化して最早囚人を暴徒の手に渡すより途はないとまで見られてきた。丁度その時、護衛兵を指圖してゐたサンチェールの腕を軽く叩いたものがあつた。振り返ると一人の兵卒が擧手の禮をして小さく折疊んだ紙片を差出した。

「裁判長からの使であります。場内から外部の状況を見られて、時を移さずこの命令を實行するやうにと申されました。」

サンチェールは第一列から出て入口の燈火の下でそれを開いた。彼の顔には安堵の色が浮んだ。

「お前の他に誰か連れてきたか？」

「はい、連れてきてをります、それからもう二人貴殿の部下を拜借させていたゞくことになつてをります。」

「お前は囚人をテンブル監獄へ護送する事になつてゐるのだが、心得てゐるだらうな。」

「はい、承知してをります。マアリン殿から詳細に互つた命令を受けてをります。囚人を目立たぬやうに下す爲に馬車をもう少し蔭へ入れて頂きます。吾々は直に囚人を連れてゆきますから、閣下は、もうしばらくの間、この空車を護衛して頂きたいと存じます。馳て援兵が到着いたしましたら、この空車をルクセンブルグ監獄へ向けて出發させて頂きます。」

男は停滞なくすらくと使命を傳へた。サンチェールはいくらか重荷が軽くなつたのを喜んだ。

馬車は支關傍の蔭へ引戻された。二人が車を下りると、

「静かについて来い！ さもないと立どころに射殺すぞ！」男は底力のある聲でいつた。

二人とも聊も抵抗の意志を持たなかつた。ジュリエットは寒さと疲労に耐へかねてデルレイドに寄り縋つた。デルレイドは彼女の肩を抱くやうにして歩き出した。

サンチェールは部下の二人をして護衛に加はらしめた。この小さな一隊は裁判所の背後を廻つて次第に恐しい群衆から遠ざかつていつた。

デルレイドは數人の者が周圍を取巻いてゐる事に氣付いたが、闇の中で人々の顔を見定める事が出来なかつた。

二十七 意 外

小さな一團は無言で歩み續けた。ジュリエットとデルレイドは何處へ牽かれてゆくのか知らなかつたが、兎に角荒狂つてゐる群衆から遁れた事を感じた。

彼等はそれ以外は何事も考慮しなかつた。二人とも死の影が自分等の上に漂つてゐるのを感じてゐた。けれども人生の危機に臨んで愛するもの同志は竟に互の魂を見出し合つた。されば死の陰影も彼等を怯かすに足りなかつた。ジュリエットは黙つて愛する男の方へ手を差延べた。デルレイドも無言でその手をとつた。二人が手を握合つた刹那、死の恐怖も生の苦惱も影を潜めて、二人の世界には幸福と喜悅のみが残つた。馬り騒ぐ群衆も、煩はしい浮世も彼等にとつて何であらう？ 二人は手と手を取り、肩と肩を並べて夢の國を歩いてゐる。そこには疑惑もなければ不信もない。

彼は最早「彼女は私を愛してゐない、然らずんば私を裏切りはしなかつたであらう」とは云はなかつた。彼は自分に寄り縋つてゐる小さな手の中に、彼女の信頼を感じた。

彼女も又、彼に許された事を知つてゐた——否彼は彼女に對して許す事は更になかつた。愛は優しく麗はしく、裁く事を知らない。愛は信頼に満ちた熱情である。愛は全き理解と、全き平安を齎すものである——

彼等は護衛兵の導くがまゝに、何の不安もなく進んだ。彼等の眼は空しく霧に閉された巴里の町を

見渡した。彼等はいつかセーヌ河畔を離れて、町の場末を歩いてゐた。右手に低い軒を並べてゐる一軒がある。その露地を入ると、パーシー卿の假の宿がある。デルレイドはそこを通りかゝつた時、友を想つた。だが紅ハコベ團と雖、今更どうして彼等を救出す事が出来やう……假令パーシー卿が……突如、雨の中に、「止れ！」といふ凜々しい聲が響いた。デルレイドは頭をあげて耳を澄した。闇の中の聲にどこか聞き覚えがあつた。

一行は立止つた。護衛兵はかちりと劍銃の音を立てた。

それは實に數分間の出来事であつた。次の瞬間、誰か大聲で、

「デルレイド君！ 紅ハコベ團だ！」と名乗つた。

不意に路傍の街燈が打毀された。同時に泥濘の中で激しい格闘が起つた。護衛兵が同志打を始めたらしい。

それ等を後にしてデルレイドとジュリエットは右手のとある家の中へ吸込まれた。

三人の男がどや／＼とその後について入つてきた。

「アントニー！ 旨くやつた！ ヘースチングも、フォークスも御苦勞だつた。」といふ快活な聲の主は疑ひもなくパーシー卿その人である。

サンチェールのつけて寄越した二人の護衛兵は泥土の中に組伏せられ、他の三人が繩で縛り上げた。

デルレイドが呆乎とそれ等の光景を見てみると、そこへ現はれたのは例の過激黨のレノアであつた。デルレイドは縊縊を纏つた大柄な田舎漢を穴のあく程視詰めた。

「デルレイド君、私がジュリエット嬢をこんな大變な穴窖へ御案内申さうとは、夢にも思はなかつたでせう。」さういはれてもデルレイドはまだ自分の眼を信じかねて、相手の顔を凝視してゐた。

「私のこの凄じい姿に驚いたのですか、はつはつは……どうもこれより他に貴郎方を救ひ出す方法が見付からなかつたのですから……お嬢さんこんな失禮な姿で、お許し下さい。……然しもう友人の中にいらつしやるのですから御安心下さい。」田舎漢レノア事、パーシー卿は慇懃に挨拶をした。

自分と愛する人を大膽極まる方法で、萬死の中から救ひ出してくれた勇ましい人を見上げたジュリエットの大きな眼に涙が溢れてきた。

「あゝ、パーシー卿！」デルレイドが何かいひかけるのを押し止めてパーシー卿は、

「まあお待ちなさい。空しく時を過してゐる場合でないから……吾々の足がまだ巴里についてゐる事を忘れてはなりません。これからこの危い町を抜出すのが一仕事です。吾友チンビュはレノアが貴郎方を彼の鼻の下から盗み出したことを知つたら、餘り喜ばないでせう。だから萬事迅速にやらなくてはなりません。」といひながら二人を薄暗い地下室へ導いた。

ここで彼は金貨で買収したこの家の亭主ブログアードを大聲に呼むだ。

「おい、ブログアード何處へいつた！ おい、あの勇敢な兵士を括る繩をもつていつてやれ。それから

奴等をこゝへ引張つてきてし、こたま酒を飲ませてやれ。あんな厄介なお供を連れてくる心算ぢやアなかつたけれどもサンチェールの悪魔が感付くといけないと思つて……」

パーシー卿はデルレイドとジュリエットを安心させる爲に出来るだけ快活に應接した。二人にとつては何も彼も餘りに意外な出来事であつた。

屋外では紅ハコベ團の若い團員が三人で雑作なくサンチェールの部下を縛り上げて了つた。これ等の仕事は彼等に救助を呼ぶ暇もない程迅速に運ばれた。又假令彼等が聲を立てたとしても、雨降りの暗い晩の事で、事を好む巴里の彌次馬達は一哩も遠く離れた裁判所の前に集つて了つてゐた。向側の家の窓から二三の人が覗いたが、街燈のない闇の中を見透す事は出来なかつた。

街は再びもとの静けさに返つた。ブログアードの珈琲室には猿轡を嵌られた二人の兵卒が轉がつてゐた。その傍で三人の英國人が陽氣に哄笑ながら雨に濡れた顔や手を拭つてゐた。その中央にこの大膽極まる計畫をめぐらした偉大な冒険家が立つてゐた。

「諸君、これまでのところは豫定通り旨くいつたが、これからが大切だ、今晚のうちに巴里を脱出して了はないと、明日はギロチンに忙しい目をかけさせなければならぬ。」彼は冗談らしく懶氣にいつた。だが彼の部下は目前に迫つてゐる危険に氣づきながらも飽までも團長の命ずるがまゝに水火をも辭さない様子を顔に浮べて次の命令を待つた。

アントニー卿、フォークス卿、それからヘースチング卿、この三人の若い英國の貴族は巴里の國

民兵に扮装して、完全に彼等の役目を果した。サンチェールに偽の命令を傳へたのはヘースチング卿であつた。

兎に角、こゝまでは思ひ通りにいつたが、如何にして嚴しい警戒線を突破して巴里を脱出するだらうか、人々は期待をもつて「紅ハコベ」の顔を見上げた。

パーシー卿はジュリエットに向つて禮儀正しく話しかけた。

「御嬢様穢吉しいところですが、暫時あちらの部屋で御休息下さい。その間にデルレイド君とこれからの手順に就いて打合せをしますから。その部屋には恐しい襤褸衣服が用意してございますから、急いで扮装なすつて下さい。」彼は恭々しく彼女の指先に接吻をして次の部屋に通ずる扉を開けた。

ジュリエットがいつて了ふと、彼はもう一度人々の方に向いた。

「もうその軍服は役に立たないから、君達にも用意しておいた襤褸を着て貰ひませう。出来るだけ穢くなつて貰はなくしてはならない。」パーシー卿の聲には最早懶氣な調子はなかつた。彼は計畫家であると共に實行家である。そして彼は掌中に貴重な友人の生命を握つてゐるのだ。

人々は速かに命令に従つた。倫敦の社交界でも名だゝる洒落者のアントニー卿は戸棚からよれよれになつた汚點だらけな衣服を引ずり出して身につけた。十分と経過ないうちに立派な四人の乞食が出来上つた。

「素敵々々、後はジュリエット嬢の支度さへ出来ればいゝのだ。」パーシー卿は晴やかにいつた。そ

の時、境の扉口から恐しい姿をした女が現はれてきた。裂けたブニウスに縞目も分らなくなつたスカートを着いて、金髪を穢れた頭巾の中へ押込む姿はどう見ても貧民窟をうろついてゐる物乞ひとしか思はれない。人々は思ひ切つた彼女の扮装を歡呼の聲でもつて迎へた。

四人の男はジュリエットを圍むで、パーシー卿の與へる最後の指圖を待つた。

「吾々は群衆の中に交つて、彼等と行動を共にするので。いひかへればそれは無智な群衆を吾々の思ふ壺にはめる事です。ジュリエット嬢はデルレイド君と手をつないで下さい。どんな事があつても決して手を離してはいけません。デルレイド君、その他もジュリエット嬢を護つて、吾々が巴里を出るまでは決して目を離してはいけません。」

パーシー卿は微笑しながら若い二人の顔を顧みた。

「巴里を脱る！」デルレイドは不安な面持で訊ねた。

「さうです、巴里を脱るのです。吾々のすぐ背後に喚き叫ぶ暴徒をお供に連れて嚴重な警戒の裏をかいて關門をくぐるのです。それからよく諸君に記憶しておいて頂きたいのは、吾々は鷗の鳴聲の導くまゝに進むことです。巴里の關門が出るまで、鷗の鳴聲に注意してきて下さい。それによつて諸君は自由と安全を贏ち得るでせう。さア、出懸けませう。サンチェールの驢馬は今頃援兵を得て群衆を追散らして空車を引張つてゐる頃でせう。」

デルレイドはジュリエットの手を取つた、そして、

「神よ、『紅ハコベ』を祝福し給へ！」といった。
五人の男はジュリエットを中心にして、もう一度暗い戸外へ出た。

二十八、鷗の聲

サンチエールは援兵の到着するまで暴徒を堰止めきれなかつた。デルレイドとジュリエットが竊に他へ移されて五分と経過ないうちに、群衆は軍隊の警戒線を突破して、護送車を襲ひ、囚人が紛失してゐる事を發見した。

「囚人はとつくにテープル監獄へいつて了つてゐるぞ！」サンチエールは群衆の鼻を明した喜びに勝誇つたやうに叫むた。群衆は憤怒の餘り、サンチエールに襲ひかゝつて來た。

忽ち軍隊と群衆との激しい争闘が始まつた。その最中に、

「テープル監獄へ押掛ける！」といふ聲が突如として起つた。

「テープル監獄へ！ テープル監獄へ！」といふ聲が口から口へ傳はつて、忽ち群衆全體の叫びとなつた。彼等はセーヌ河の北岸を経てヴンブル通りへ殺到していつた。

パーシー卿の一行は遠くからそのどよめきを聞いて足を速めた。折々行交ふ人を呼止めて、

「テープル通りへ、どうゆけばよいのですか。」とか

「もう叛逆者を遣付けて了ひましたか。」など訊ねるのであつた。人々はこの一行に對して聊かも

疑念を挾まなかつた。

一行が四辻へ出た時、パーシー卿は立止つて、

「いよ／＼近づいてきましたよ。出来るだけ群衆の中へ割込むで下さい。いづれ監獄の前でまた會ひますから、それから鷗の鳴聲に氣をつけてみて下さい。」といつて答へも待たずに霧の中へ姿を消して了つた。

後に残された五人は次第に群衆の中へ紛れ込むでいつた。デルレイドはジュリエットの小さな手を堅く握りしめて、

「怖くはありませんか？」と囁いた。

「いゝえ、貴郎が傍にゐて下さいますからちつとも怖いことはございません。」

フォークス卿、アントニー卿、ヘイスチング卿の三人が先に立つて、その後にはデルレイドとジュリエットが従つた。人々は、

「遣付けて！ 遣付けて！」と叫びつゞけてゐた。デルレイドは彼等よりも一層大聲で、

「遣付けて！ 遣付けて！」と叫むた。

フォークス卿は後を振り返つて笑つた。そして一緒になつて聲を合せた。デルレイドとジュリエットはこの冒険に酔つて恍惚とした。二人は危険を忘れて夢のやうに群衆に揉まれながら歩いた。彼

等の敵が今は彼等二人を護る楯となつてゐるのである。泥濘をこねかへしてゐるこれ等の群衆のうち二人の囚人を見出す事は藁の中の針を見出すよりも、もつと不可能なものである。

テンプル監獄前の廣場は、まるで大きな黒い沼のやうに見えた。監獄の入口にランプが一つ吊られてゐるきりで、四邊は殆んど眞暗であつた。デルレイドの一行が廣場へ到着した時、何處からともなく、鷗の鳴聲が三度響いてきた。その時、闇の中から胴間聲が叫びだした。

「諸君！ 奴等はテンプル監獄にはゐない、吾々はまた瞞されたんだぞ！」

群衆は凄じい勢ひで監獄に突進していつた。彼等の胸には五年前にバスチーユ監獄を破つた記憶が蘇生つた。だが堅く鎖された鐵の扉はびくともしなかつた。

再び奇怪な聲が猛り立つた群衆の耳に達した。

「奴等はテンプル監獄にはゐないぞ！ 役人等は俺達を恐れて奴等を逃して了つたに違ひない。」

群衆は忽ちその聲に支配された。

「反逆者は逃げたぞ！」

といふ聲がひろがった。暫時して最前の奇怪な聲が叫びだした。

「關門へ！ 關門へ！」 群衆は夢遊病者のやうに動き出した。

遠くで再び鷗が啼いた。

デルレイドとジュリエットはその意味を察して顔を見合せた。

群衆は大波の退いてゆくやうに廣場から關門の方へ流れた。デルレイドの一行はその潮に押されて鷗の聲を追つていつた。

關門には警備の一隊が詰めてゐたが、これだけの群衆を支へる力はなかつた。狂暴な群衆は忽ち關門を突破した。

驟雨はいつか瀧のやうな大雨となつた。關門の外に擴がつてゐる荒漠とした闇の果に稻妻が閃き遠雷の音が響いてきた。

關門を破つて巴里の市外へ踏み出した群衆は次第に疲勞と饑餓を覚えてきた。彼等の眼前にはペール・ラシエズの墓地が横はつてゐる。夜目にも白く浮んでゐる白塔の群は人々を嘲笑つてゐるやうに見えた。彼等は死の國の沈黙に脅されて身慄ひをした。

墓地の中から突然、淋しい鷗の鳴聲が聞えてきた。五つの黒い人影は次第に群衆を離れて、一つづつ墓地の中へ吸ひ込まれていつた。

再び鷗の鳴聲が聞えた。

雨に濡れた群衆はそれを聞いて踵を返して了つた。彼等はそれを墓の中から起る死人の呻き聲だと思つた。この數年間、神の存在を忘れてゐた女達は慌て、胸に十字を切つて聖母マリヤの名を唱へた。

巴里の市民等は東の空が白む頃になつて、初めて悪夢から醒めたやうに、呆乎と各自の家へ歸つていつた。彼等は何の爲に關門を破つて市外へ雪崩れ出たのか、誰もはつきりと理由を知らなかつた。唯悪靈に憑れたやうに、的もなく市中を彷徨ひ歩き、徒らに雨に濡れそぼれ、泥土に足を汚したただけであつた。

一方パーシー卿に率ゐられた一行は、眞夜中を告げる鐘の音が大巴里の空に響渡つた頃には、もう郊外の小さな宿に辿りついてゐた。

彼等は六個の幽霊のやうに黙々として廣漠とした墓地を抜けて、革命の騒動の届かぬ、静かな田舎の町へ来て了つたのである。

英國の金貨は容易に亭主の肩を封じることが出来た。宿の前には既に大きな旅行馬車が用意されてあつた。四頭の馬は半時間も前から待ちあぐむで地面を踏み鳴らしてゐた。

デルレイドとジュリエットの肩から驚愕と歡喜の叫びが洩れた。二人ともこの大膽極まる計畫を實行した驚膽すべき人の顔を一種の敬畏をもつて見上げた。

「なアに雜作ないことですよ。黄金の力でやれば何でも出来ます。幸ひ私にさういふ便利な寶の持合せがあつたからこそ、皆さんをこゝまで連出す事が出来たのです。それにベトロネルが徹頭徹尾私

を信頼して、早朝に巴里を出發し、デルレイド老夫人とアンソニー嬢と共にアールルの港で、お嬢様を待合せる事を納得してくれた事も幸ひの一つでした。その爲に萬事すらすらと豫定通りに運びました。ベトロネルは老人の事ですから、朝市の荷馬車と一緒に關門を通過するのは雜作ないことでした。旅券も全部用意してあります。ジュリエット嬢は英國婦人として旅行する事になつてゐます。この宿には皆さんの衣服が用意してありますから、三十分以内に旅装を調べて出發するとしませう。」パーシー卿は恰も倫敦の社交室にでもあるやうな落着いた態度で、悠々とこれだけの事を話した。デルレイドは一言もいはなかつた。彼は友人に對する感謝の心を足りない言葉で表はすのを快しとしたかつた。それに一刻を争ふ場合である。

一同は素早く身に纏つてゐた襤褸を脱ぎ棄て、薩張りとした服裝に着換へた。

パーシー卿は自ら馭者臺に坐つて手綱をとつた。デルレイドはジュリエットの手をとつて馬車に乗つた。續いてフォークス卿とヘイスチング卿が席につき、アントニー卿はパーシー卿の隣りに坐つた。

一行を乗せた馬車は蹄の音勇ましく、アールルの港をさして只走りに走つた。手綱をとつてゐるパーシー卿の胸には歡喜が溢れてゐた。

馳て馬車は八時間の行程を疾走つてアールルの港についた。一行は直にパーシー卿の快走船「晝の夢」に便乗した。婦人達は再會の喜びに相擁して涙に咽むだ。

アンミイは殊にジュリエットが無事に救出されてデルレイドのもとに、身も魂も共に戻つてきた事を喜んだ。彼女の胸は淋しかった。然し愛する人の幸福を心から祝した。

それは記念すべき八月革命の最後の日で、暁の空は薔薇色に輝いてゐた。デルレイドとジュリエットは「晝の夢」の甲板に並び立つて次第に眼界から消えてゆく佛蘭西大陸を眺めてゐた。デルレイドの腕は愛人の背に廻されてゐた。彼女の金髪は朝風にふかれて彼の頬を軽く撫でゝゐた。彼等は初めて全く二人きりになつた。そして彼等は初めて凡ゆる危険に對する心遣ひから開放されたのであつた。

「晝の夢」は刻々と二人を麗はしい異國の空へ運んでゆく。そこには測り知られぬ未來が若い二人を待つてゐる。自由の國英國は二人の幸福と喜悅を護つてくれるに違ひない。

彼等は北の空を見渡した。遙か彼方に横はる白い水平線がアルピオンの絶壁を抱いてゐる。

彼は彼女を腕の中に抱いて、

「わが妻！」と囁いた。紅の曙光が彼女の金髪を輝かせた。彼女は顔をあげた。戀人等の脣と脣が相觸れた。そして熱情の籠つた最初の接吻に、二人の魂と魂とが融合つた。

復 讐 終

皇帝の金燭臺

皇帝の金燭臺

一、假面舞踏會

華美で粹な奥地利の都ヴェンナは、祭騒ぎで湧返つてゐた。また、さう無くして如何しやう。懺悔火曜日は、聖母たる教會が歡樂を許してくれる最後の日で、この後には旬祭の長い窮屈な四十日が待つてゐる。もし聖母が寛容を示してくれる間に思ふ存分樂しまなければ、明日となつては後悔しても追ひつくまい。教父達が灰で拵へた十字架を額に戴かせては、「人間は塵ぢや、やがては塵に復るのぢや」と説かれるのだ。

それでヴェンナは今日、歡樂の杯を溢れるまで飲むでゐた。燦爛と燈火を連ねた街々や廣小路で飲むで来た。そして、今はその最後の滴々をオペラの舞踏會で傾けてゐた。今年別けても華やかだつた謝肉祭は、その絶頂に達してゐた。

その大ホールは、僅の二晩前にはワグネルの歌劇「ニーベルンゲン」の不協和樂が神妙な聽衆達を恍惚させたり煙に捲いたりしてゐたが、今夜は道化者と女道化者、幾人ものファウストと幾人ものマルゲリット、水の精、女神、侏儒、其他色々の人物が、はしやいで笑つたり呶鳴つたりしながらシユトラウスの夢のやうなワルツの旋律に連れ、追ひつ追はれつしてゐた。一方、淺敷の上には、目まぐるしい踊りの群に混るのは怖し、と云つて見惚れずに居られぬ觀客達が、不思議なドミノ服と黒い覆面の姿で何處にもぎつしり填つてゐて、その覆面の蔭からは、階下の光景に酔ひながらも強ひて興奮を抑へてゐる目が、きら／＼光つてゐた。

「降りておいで遊ばせよ、綺麗なドミノさん、私貴郎を知つてよよ！」

かう囁いたのは、綺麗びやかな衣裳の女奴隸（皇帝の）で、覆面の寶石も、その蔭の目の艶な光を紛らさなかつた。女は、或る淺敷の縁に片手をかけて見上げてゐた。そこには二人の黒ドミノが、半時間程前から、半ば曳いた帷幕に隠れるやうにして、階下の陽氣な群衆を見下してゐた。

兩人のドミノの脊の高い方は、淺敷から身を屈めて、その大膽な美しい顔を見透さうとしながら、「駄目！ 美人の覆面さん、僕を御存じなら、貴女こそ上つていらつしやい、改めてお知合にならうぢやありませんか。」

けれど、その言葉の間に、女奴隸の姿は復た何處かへ消えてしまつた。黒ドミノは、好奇心に煽られて、今の美しい姿を見つけ出さうと、群衆の渦巻の中を、忙しく見廻してゐた。

「僕等のじみな假裝が、あんな綺麗な蝶々の目に留るなんて不思議だねえ。」彼は連れを振り返つて云つた。

「それに一體、何の目的で僕に話しかけたのだらう。話をあれ限り止める位なら……」

「いや、それはこのヴェンナの浮氣なブルジョワ仲間には普通のことだ。御座いますよ。」と、連

は答へた。

「殿下が餘り永くカーテンの蔭におゐで遊ばしたもので、あの女奴隷め、お氣を惹く爲に、ちよつと戯弄ひに參つたので御座いませう。」

脊の高いドミノはこの時、棧敷に凭れてオペラ眼鏡を覆面にあて、ちよつと群集の中を漁つてゐた。然し、多數のムーア人や土耳其人に扮した男女は前へ後へ往來してゐるが、その大膽な女奴隷の姿は發見出来なかつた。

二、怪しい馬車

「いとよきもの近きにある時、たゞよきものを遠きに求むる勿れよ。」不圖、かう戯弄ふ聲が、黒ドミノの肘のあたりで囁いた。

黒ドミノは急いで振り向くはずみに、隣りの棧敷との間の圓柱に巻いてゐた小さい手を捉まへた。

「いと好きものは、まだ遠過ぎます。それでは、達きませんよ。」と彼は囁いた。

「いと好きものには、いつも達かうとなさいませ。」と、戯弄ひ聲は答へた。

「オペラの棧敷の絶壁ぐらゐはお上り遊ばす元氣でね。」

「でも美人の覆面さん、貴女に達くには、ちよつとこの愛らしい手を放さなけりやなりません。籠の鳥を一寸でも放すのは險難ですからね。」

「黒ドミノさん、大を得んがためには、しばし小を捨てざるべからずよ。」女奴隷は、意地悪く云つた。

「殿下、どうぞお留まり下さい。」連れのドミノは懇願するやうに囁いた。

「この地へは御微行でいらつしやいます。お供も私一名で御座いますし、それに……」

「それが却つて好都合だよ、露國皇太子がちよつと氣散じをやるにはね。」若いドミノは笑ひながら答へた。

そして、連が更に忠告する間も待たず、彼は、謝肉祭が常にかゝる時、かゝる場所で許す自由によつて彼方の棧敷縁へ渡り、不思議な、目の麗かな美女のゐる柵へ、若者らしい身軽さで一氣に攀ち上つた。

が遅い！ 由來東方の娘達は氣隨氣儘である。黒ドミノが危険を冒して、無事に彼方の棧敷に足をかけた刹那に、ボタンと扉をひらく音、つゞいて閉まる音がきこえて、魔女は復た彼の腕から逸し去つた。

その若者が、皇子であらうと、農夫であらうと、自分をこれほどまでに戯弄させて捨て、置く譯はない！ ニコラス・アレキサンドロウィッチ、全露西亞皇帝の息にして皇太子である彼は、今自分が二十歳の青年であること、一度かぎりの目法樂をゆるされて、鈍感木片のごとき、ラウロウスキー老

人を供にして、この舞踏會へ來てゐること。が、念頭にあるだけであつた。……彼は、夢中で追ひ驅けた。

綾敷の背後の廊下には誰もゐなかつたが、五十ヤードほど彼方の休憩室へ通ずる曲り角に、皇太子は、ぱつと駆け込んだ人影と、土耳其の上靴の愛らしい跡とを見通さなかつた。

休憩室は、夜も更けたその時刻に、最も複雑な、最も繪畫的な混雑な有様にあつた。アッシリヤの女王達が、ジョンブル達と腕を組んで歩いてゐる。マルゲリット達が二世紀も後の蕩兒達に恥し氣もなくしただれてゐる。と思へば、オセロやハムレット達が、ヴィンナ人の好むでやる、踊り合手の女をそこの高い柱へ押し上げ、どうしても十一二呎は飛ばなければならぬ運命にして、兩腕をひろげて受け取る他愛もない戯れを演じてゐる。方々の柱が、女道化者や從軍物賣女などの生きてゐる、笑つてゐる、喋舌つてゐる姿で、裝飾されてゐる光景は實に目も覺める許りであつた。中には妙に眞顔のオフエリヤもゐた。ぐんなりしたイソルデもゐた。

しかし、黒ドミノは、そんな物には目もくれなかつた。周圍から浴せる、無遠慮な警句や悪口も、耳には留めなかつた。群衆を押し分け掻き分け、いま寶石の輝く小さい頭が姿を消した、大玄關のはうへ無二無三に突進して行つた。その扉は、電燈の華かな大路へ向いて、ひろく開けはなされてゐた。

女奴隷は、自分の向う見ずの振舞を悔いたのか、それとも極めて大膽な女であるのか、兎も角一部分の躊躇もなく石段を駆け降りた。兩側から大勢が戯弄ふ際にも構はず、二三人、相手の欲しい顔面が、呼びかけて後を追つて來ても、振向かうともしなかつた。

階段を降り切ると、女はちよつと逡巡つたやうだつた。僅のちよつと——果して故意か如何か？

——然し、その間にニコラス・アレキサンドロウィッチは追ひついて、通りかゝりの辻馬車の戸に手をかけた女を、まるで羽毛のやうに軽々と抱き上げた。そして馬車の内部へ下すと、自分もその前へどかりと坐つて、上氣せて喘ぎながらも、勝ち誇つた顔で女を見た。その間に馭者は、何の指圖も待たずに、更にも騒しい、更にも陽氣な群集の中を、一散に走つて行つた。

三、小さな戯れ

この出來事は、附近にゐた男女に何の注意も惹かなかつた。それもそのはず、オペラの舞踏會にはこんなことはざらにある。若い二人が追ひかけつことをやる、——合圖——お手輕な辻馬車、そしてあばよ！ 誰が氣を留めよう？ それよりか誰も自分の小さい冒險、小さい情事のはうがいそがしいのだ。

彼方に、立派なシャンデリアの下に立つてゐる鼠ドミノ服の男、その男も、知らぬ女奴隷と、熱烈な情人の振舞にはなんの興も惹かなかつたに相違ない。後を追はうともしなかつたから。しかしその目だけは、馬車や假面のむらがる中に、見る／＼遠ざかつて行く辻馬車を見おろしてゐた。若い男

である。見たところ、別に人目をしのぶ様子もなく、ドミノ服の頭巾を後に投げて、覆面も手に持つてゐた。

然し、その癖彼は、横合から優しい音楽的な聲で呼びかけられた時は、目立つてぎよつとした。微かながら外国訛のある女の聲だつた。

「なぜ、さう鬱いでおいで、すの、ヴォレンスキー様。シュトラウスのワルツでも元氣をお抜かれなさいましたの、それとも貴郎の戀人が憎い戀敵とでも逃げてしまひましたの？」

若者は氣を取り直したらしく、もう小さくなつた辻馬車に向けてゐた目と心とを、自分の目の前の美しい女に移した。

「デミードフ夫人！」さう叫んだ彼の聲には、決して喜びは含むではゐなかつた。

「その御當人よ！」女は笑ひながら答へた。

「お驚きにならなくてもいいでせう。お氣の毒様。私はヴィンナの貴婦人ではないのですし、オペラの舞踏會へ来る位、變人の私ですもの、大して不思議はないと思ひますわ。」

「さうですとも、然しお獨りで？」

「獨りぢや御座いませぬ。」女は未だはしやいでゐた。

「貴郎がいらして、私がこんど險呑になつたら保護して下さるし、難儀が起つたらお手を貸して下さいませぬもの。」

「か、貴女の馬車をお呼びするだけで、このお茶騒ぎの仲間に入らせて戴きたいですな。」彼はやや氣の乗らぬ聲で云つた。

女は肩を嚙んで無理に笑つたが、その優しい外國訛りに心もち剣を含んで云つた。

「まあ、イワーン様、貴郎、私をだらしのない女と思召すのでせうね、そんなに無愛想な頼りのない事を仰有るやうでは。」

「無愛想で御座いましたかな？」

「さうでは御座いせんか、貴公子で通つていらつしやる方が、舞踏會で淑女にお會ひになると直ぐ、馬車を見つけて來ませうなんて、御挨拶過ぎますわ。」

「私もそれが許され難い罪悪で、地獄の責を蒙つても致方が無いと思ひますよ、その淑女がデミードフ夫人でいらつしやらなければ。」若者はさり氣無く云つたが、その裏から一刻も早く立去りたい氣持が露き出されてゐた。

女は彼をちつと見た。それから我慢しかねたやうに小さい吐息を吐いて、

「では馬車をお呼び下さいまし、お引き留め申しませぬから、貴郎には何か緊急の御用でもおありのやうにお見受け申しますわ。」

「大司教宛下か……」イワーンは取つて附けたやうに云つた。

「まあ、宛下がこんな遅くまで貴郎に御用をおさせになりますの？」女は、少し皮肉に訊ねた。

「猥下は、明日ヴィンナをお發ちになります。そして未だ御返事をなさらぬ書面が澤山残つて居ります。私は多分それを夜通し書かなければならぬ事になりますませう。」

女はその説明で満足した様子だつた。ヴォレンスキーは、オペラの外に立つてゐた華美な制服の給仕を呼んで、デミードフ夫人の馬車を呼ばせた。女は打ち解けた口調になつて、

「猥下は、この數週間續いた面倒な外交問題の後では、定めし御休暇を喜ぶでいらつしやいませうね。そして、イワーン様、貴郎も五六日はお寛ぎになれると思ひますわ。」

「猥下は二三週間のお暇を下さいました、其間御自分はティロールへ保養にいらつしやるとの事です。」

「そして、お歸りになりますと？」

「私はペテルスブルグでお待ち受ける筈です。猥下から皇帝陛下に差上げる重要建言書があるものですから。」

「あゝそれでは直き首府でお目にかゝれますわね。」

「貴女も？」

「はあ、多分貴郎方がお着き遊ばす前に歸りますから、猥下をお親しくお迎へ申し上げる事が出来ませう。おや、馬車が参りました。ではヴォレンスキー様、さやうなら、けれど永久には御座いませぬよ。」

女は更に媚を含んで、

「だつて、永くお目にかゝらないと、私の邸へ名刺一つお置きにいらつしやらなくなりさうで、心配になりますものね。」

若者は女が廣い石段を降り切るまで、腕を貸して行つた。

「お寢み遊ばせ、イワーン様。」

女は馬車に助け入れられると、深々と、毛裏の外套を纏ひながら云つた。

四、彼女の腹心

馬車が動き出してからも、女は窓から首を出して、鼠色のドミノが群集の中に見分けのつく間はちつと振り返つてゐた。その顔には遺瀨無げな色と、自らを蔑むらしい寂しさが浮むでゐた、馬車がオペラを後に、イワーン・ヴォレンスキーの姿も石段の下に見えなくなると、女は堪へかねた吐息を吐いて、胸から甘たるい感情を振り落さうとするらしかつた。そして、やがてコロラートリング街の最も立派な邸の支關先に、馬車から下りた時の彼女はもう、感情に動搖せぬ、稍むつゝりとした一個の貴婦人になつてゐた。

「オイゲンに、直ぐ私の居間に來るやうに云ひつけておくれ。」彼女は二階に上りながら、馬丁に云ひつけた。

「もし外へ出てゐるなら、お前達の誰か一人が休まずにゐて、待つてゐておくれ。もし寝てゐるのなら、

ら、直ぐ起して来るのですよ。」

彼女はひどく興奮してゐるらしく、着澤な居間の安樂椅子が人待ち顔につくばつてゐても、それに腰を下ろさうとしなかつた。そして室を忙しく往來して、少しの蹺音にも聴耳を敬てた。今は、彼女がイワーンと呼びかけた。鼠ドミノの若者の姿も、それに對する感情も、彼女の記憶から遠く離れてしまつた様子だつた。

彼女が半時間と經たぬ前に目撃した光景は、彼女をひどく當惑させた。自分は、(彼女はさう信じ切つてゐた)、ラウロウスキー老伯爵と、ニコラス腹心の一人の従者とを別としては、黒ドミノ服の假裝の若者が露國皇室の世子である事を知つてゐるヴィンナ唯一の人物の筈だつた。

皇太子は、女奴隷に扮した大膽な覆面の女に話しかけられた。皇太子は若氣の向う見ずから、自分をも、己れを圍繞してゐる危険をも忘れて女の後を追つた。それは謝肉祭當時には赦される許りか、寧ろ獎勵されてゐる振舞で、珍らしいことではなかつた。そして兩人とも辻馬車で何處とも知れず行方を晦ましたのである。デミードフ夫人の推察では、この馬車は確かにそれと知つて彼等兩人を待つてゐたものに相違ない。……

「お入り。」彼女は云つて、耳に入つた用心深げな蹺音と、扉をほとくと叩く音に應へた。そして、氣を落ちつけるために手近にあつた小函から巻煙草を取り上げた。

一人の男が入つて來た。鼻の平たい、頬骨の高い、見るから露西亞下層社會の容貌で、その低い額は智能力を缺いてゐる證據だつた。而もその底鋭い、冷い灰色の目は、薄い瞼の間に深く落ち込むで、性質の敏捷と陰險とを示してゐた。役に立つ男に相違ない、勿論。

デミードフ夫人は落着いた様子になつて男に言葉をかけた。

「オイゲン。よく聞いておくれ、今夜オペラの舞踏會でそれは奇妙な事が起つたのだよ。それでは非、直ぐにもお前に働いて貰はなければならぬ。明日も用があるだらう。實は皇太子様が今夜黒ドミノに假裝なさつて、あのオペラへいらしたの。……さう！ヴィンナに來ていらつしやるの……御微行でね……誰も知つてゐる者はありません……ところが、今夜の出來事といふのがお話にならない馬鹿げた事で、どうも秘密結社の仕事では無いかと案じられるのだよ。殿下は、棧敷から、女奴隷に假裝した女に誘拐されなすつてね……赤と金の衣裳のやうだつたが……そんな事は、どうでもいゝ、オペラにはさういふ假裝の女は何百とゐるのだから、……皇太子様は、その女の後に尾いていらした。すると辻馬車が待つてゐて、皇太子様がそれにお飛び込みになると、非常な速力で舊市街の方へ走つて行つてしまつたのだよ。……」

「さうしますと奥様？」

彼女がちよつと黙り込んだので、男は指圖を乞ふやうに云つた。

「お前は、先づ皇太子様が旅館にお歸りになつたか如何か調べて來るのだよ。もしお歸りにならな

つたら、ラウロウスキー伯爵が、その秘密の鍵を發見するのに如何いふ手段を取つてゐるか、それを調べて貰ひたひのよ。無論あの老人に尾行しなけりやいけな。そして、警察へ行くとか、ペテルスブルグへ使を出すとかしたら、直ぐそれを知らせておくれ。それにオペラの外や、辻馬車の停留所、方方の停車場、何處でも黒ドミノと女奴隷の話とか、兩人が乗つて行つた辻馬車の話でも出たら、よく聞きとゞけて来ておくれ。私は明晩夜中の急行でペテルスブルグへ發つから、宵の口に来て、分つただけのことを報告しておくね。」

かう云つて、彼は僕を立ち去らせたが、再び獨りになると今夜の出來事を熟々と思ひ出して見た。彼の目には、漸時に惱まじげな——殆んど憧憬に近い色が浮んで来て、その貴族的な顔を云ひやうもなく美しく優しくした。然し、それが過ぎると、又小さい溜息と、淋しい顔とに變つた。この社交的な女、上品な貴夫人は、あの陽氣な謝肉祭の舞踏會の記憶には、極めて微かな感情をも挟むまいと力めてゐるやうだつた。特に彼の若者に對する感情を……。

「あゝ！」デミードフ夫人は、再び吐息を吐くと、煙草を投げ捨て、鈴を鳴らした、もう今夜は何も思はず静かな眠りに就かうとする者のやうに。

五、薄暗い裏街

イワーン・ヴォレンスキーは、デミードフ夫人の馬車の後影が消えてしまふと、ほつと安堵の息を

洩らして、オペラの廣い石階を登り、二人のドミノを捜しあてた。二人は、同じく鼠色のドミノ服を纏ひ、休憩室の入口を塞いでゐる群集から稍離れて立つてゐた。それから三人は連れ立つて、コロウラートリングの方向へ、ぶら／＼歩き始めた。

彼等は煙草を喫しながら、成るべく歩き易い道を、無言で歩いて行つた。リング街のあたりは、別けても壯觀で、覆面の男女が幾群となく笑ひさゞめきながら廣い往來に一杯になつてゐて、通行も中容易でなかつた。然し三人は別に急かうとするでも無く、輕口で呼びかけられれば巧みにそれに酬

いるし、路を堰かれ、ばその群集の渦で揉まれて行つた。街の兩側の宏壯な家々や、華麗やかな裝飾の店舗は、幾色光もの電燈をつらねて、この眞夜半を白晝を誰く明るさに變へてゐた。花綵を引きまはした露店には、往來を見おろす男女がむらがつてゐるし、其處此處の窓からは、夢のやうな圓舞曲や、不思議なジプシイ音楽が洩れて、匈牙利の血を傳へるヴァンナ人の足をとゞめ、その内部でもよほされてゐる貴族的な舞踏會や宴會を羨しがらせ

てゐた。三人のドミノは、この陽氣な喧騒な巷に永くとゞまつてゐなかつた。燈火の輝かなリング街に何の興味も惹かれぬらしかつた。彼等は間も無く、暗い寂しい横町へ折れて、相變らず黙々と歩きつづけた。こゝでも覆面の五人六人が高聲に笑ひながら今から大通りのほうへ出て行くのと擦れ違つた。

やがて、街は閑寂として来た。何處の窓にも謝肉祭王の支配を示す燈影や、ワルツの音色は洩れて
あなかつた。陰氣な石疊の前庭が、處々の兩側に、暗い口を開いてゐた。

程なく三人のドミノは、或る邸の門を潛つた。門衛が眠さうに推何する暇に、彼等は裏口の石段へ
抜けて、それを登つて行つた。吊ランプの光が籠ろに三人の影を浮かせた。二階まで上ると、一人が
目の前の扉を、奇妙な規則的な敲き方をした。二三分して扉がぱつと開いて、不安らしい聲が内部か
ら訊ねた。

「バルーキン君かな？」

「左様。イワメン君と、セルゲー君も一緒だ。入るよ。」とそのドミノが答へた。

六、結社の人々

三人のドミノが入つた室は、半ばは事務室、半ばは喫煙室といふ體裁で、そこに、様々の年齢、ま
たあらゆる階級の服装の人物が、十三四人集つてゐた。四五人は頸襟もなく、恐らくシャツも着ぬら
しい労働服と無恰好な靴の男達だつた。と思へば、仕立おろしの禮服に雪白のリンネルのシャツ、鈕
孔に花を挿してゐる人物もゐた。また白い頤鬚の尖つた、品の好い、見るから貴族的な老人が勳章を
二つ三つ胸に下げてゐるのもゐた。然し貴族と農夫の嫌ひなく、彼等は互ひに打ち寛いで、平和に
煙管や巻煙草を燻らしてゐた。

三人はドミノ服を脱いで、周囲の人々と握手すると、

「首尾は如何でした？」五六人が一齊に云つた。

「極上だ。」

三人の一人が答へた。

「彼は何處にある？」

「ミルコウィッチ君の馬車に、マリア・ステファノウナと乗つて行つた。」

「今は何處です？」

「ホイマルクト二十一番地、ミルコウィッチ君の邸に。」

それから問答がつけ様になされた。室の氣分は異常に緊張して、満足の吐息が幾人もの胸から洩
れた。

「そしてミルコウィッチ君は？」或る老人が云つた。

「やがて見える筈です。錠と鍵と下してしまへば。」

「では、もう彼は吾黨の手中の者だな？」

「完全に！」

「ラウロウスキーは、彼と同行しようと思なんだか？」

「氣の附いたときには既におそい、馬車が消えてしまつた後でな。彼はなんの疑惑もなく、罨に陥ち

たよ。」

次で室内は寂とした。人々は各自に、更にも重要な事柄を考へてゐるらしかつた。時々低聲の間答が口早に交される他は、大きな暖爐の中で薪がばち／＼燥せる音ばかりしてゐた。

不圖、外に重い足音が近づいて、例の規則的な敲音が聞えた。同時に底太い聲で、

「ミルコウイチ。」と名乗つた。

入つて来たのは、六呎三寸もある魁偉な男で、長い白髪を秀いでた額から後へ投げ、總々と延びた眉の蔭から灰色の目を鋭く光らせてゐた。そしての仲間に入ると、言葉短く云つた。

「すべて完全ぢや。」

「捕虜は？」

「安全に私の家に居る。窓もない、天窗ばかりの室にな。他から發見される機會はない、逃亡は更にもぢや。」

「マリア・ステファノウナは？」

「立派に役目を果したよ。彼は、扉に錠の下りるまでは何も氣付かなんだ。」

「何か云うたか？」

「自分を馬鹿ぢやと云つた。それに相違ないつて。」

「何も訊かなんだか？」

「何も。」

「ラウロウスキーは如何したらう？」室の端から一人がかう訊いた。

「彼は棧敷へ歸つたから、今でも彼處で待つてゐる事ぢやらう。」

「ところで、ミルコウイチ君、貴郎は、吾々の捕虜を出来るだけ厚遇すると約束したが、その通りかな。」

「ウむ。」彼は苦々しげに頷いた。

「私は彼を憎む、然し十分に待遇するつもりぢや。例の啞聲の下僕が附いて居る。室は居心地が好い、寢臺も贅澤、食物も上等ぢや。まるで違ふよ、ドウナヂェウスキー達の境遇とはな。」

「彼等も、もう自由になつたも同じことだ。」若い聲が感激したやうに云つた。

「吾黨は彼等の放免を要求し得る。また、拒絶する勇氣があるなら、やつて見るがよい。」

「眞實ぢや。」ミルコウイチは微笑した。

「それは、やがてニコラス・アレキサンドロウイチの身の上ぢやからな。」

「然し、用件に移らう、諸君。饒舌つてゐる時では無い。」勳章を著けた老人が重い聲で云つた。

七、間諜か否か

パイプと煙草が一齊に置かれて、すべての椅子が眞中の卓の方を向いた。その上には緑色の笠のラ

ンブを置き、署名の澤山ある種々の書類が散ばつてゐた。勳章をつけた今の人物が卓に着いた。これが首領であるらしい。

「諸君、議決すべき問題は澤山ある。何よりも先づ今夜の計畫を立て、それを成巧させた諸君に深い敬意を表したい。然し、更に重大な問題は、ペテルスブルグのタラニーエフ其他の同志に、至急この出来事を知らせ、これに由る吾々の新計畫を實行して貰ふ事ぢや。」

「さうだ、アレキサンダー三世に書面を送る事だ。」若い聲が熱心に云つた。

「これは諸君が委員諸君と御相談して認めた書面ぢや。」首領は言葉を繼いだ。

「これには、露西亞皇太子が現在或る人々の手に監禁されて居ること、その人々は或る條件が容れられるまでは、彼を解放せぬ事が認めてある。」

「その條件は？」

「ドウナヂェウスキー其他、最近の事件で入獄した同志を、旅行免狀を下附の上、放免する事。」

「彼等が國境を越えた當日に皇太子を釋放する事。」と一人の委員が註を加へた。

「然し、それが單に吾黨を嗅ぎつけるだけの縁を與へて、本國警察が活動を開始したら如何です？」と、或る聲が云つた。

「書面には、豫め警告を加へて置く事ぢや。」ミルコウィッチが云つた。

「警察が關係するに於いては、死骸も發見さす事では無いとな。」

この無氣味な言葉で、一同はちよつと無言になつた。萬一の場合それが避けられぬ手段であるとは誰の目も云つてゐた。然し首領は、その氣分を散らすやうに、

「政府は決して拒絶する勇氣はない。故に、吾黨の屑しとせぬ手段にうつたへるまでも無いことと思ふ。」

「政府は皇太子の生命が吾黨の手中にあることは百も承知するわけぢや。」ミルコウィッチは力強く云つた。

「それ故、西比利亞流刑囚の自由を、皇太子の胸に凝せられてゐる短劍と交換しようと思ひ込んで、厭でも承知させるに越した事は無いと思ふ。」

「けれども彼等に正義と慈悲とを行はしめる爲には、吾々もさうあらうでは無いか。」首領は穩かな聲で云つた。

「ドウナヂェウスキー他すべて彼の事件に關係した人々に、旅行免狀を與へて、國境より解放する。それと同日に皇太子に自由を與へる。然し、聊かでも警察力を動かした疑ひがあつた場合には、皇太子の生命は、その瞬間から保證せぬ——かういふ文意で申込んで如何か。」

誰もこれには異議は唱へなかつた。ミルコウィッチのみは卓の上に拳を固く握つて、その目にしい殺氣を光らせてゐた。

「ドウロウスキーの話は出ませぬが、委員諸君はどう思はれますか？」しばらくしてかう云つた聲が

あつた。

「彼も問題に上して考究はした。いつもはどうでもよい人間ぢやが、現在は大切な人間ぢやから。」と、首領は云つた。

「彼奴の因循な性質では、皇太子誘拐のことは、まだペテルスブルグ政府へは報告してゐないに相違ない。」

「さうだ。今度の事件は直ぐ彼の身の上で、當然西比利亞行の運命だからな。」

「吾々もさう判断した。」首領は云つた。

「彼は、少くも敷時間は政府へは報告せずに、色々密偵を放つて、手がかりを掴まうと奔走して居るに相違ない。その間には吾々の使者はペテルスブルグへ着く。そして、タラニーエフの在處を捜すに三日を要するとしても、大丈夫ぢやと信ずる。」

「然し、吾々が忘れてはならぬ人物がもう一人居る。」一人の老人が靜かに云ひ出した。

「それはラウロウスキーには煙たい人物ぢやが、萬一の相談相手にするかも知れん。婦人ではあるが敏捷で果斷ぢや、しかもヴィンナのあらゆる階級の力を、即座にそして秘密に借りる便宜を有つて居る。——彼女の始末は如何なるぢやらう？」

無論これが美しいデミードフ夫人である事は、誰も直ぐ頷いた。而も、このヴィンナ交際社會の花形である貴婦人が、果して間諜か、それ以上の者かは誰にも分つてゐなかつた。

「あの夫人なら、今夜私はオペラで話しましたよ。」さう云つたのは、イワーン・ヴォレンスキーだつた。

「では、彼處に来てゐたのか！」不安らしい聲が云つた。

「あの夫人は、お祭騒ぎの場所には何處にでも來てゐる。それから判断すれば、秘密の命令を受けてゐて、同國人の風聞に斷えず美しい耳を傾けてゐる間諜であるかも知れん、私があの人に會つたのはマリア・ステフナーノワナが馬車で立ち去つた直ぐ後で、夫人は自分の馬車を捜してゐて、その用を私に頼みました。」

「では無論、彼女も吾々の大敵ぢや。」首領は云つた。

「萬一、彼女が今夜の事に疑惑を感じたなら、確かに密偵を使ふに躊躇しない。すると吾々の裏を掻く結果にならうも知れん。」

「つまりかうぢや。」とミルコウイチが口を出した。

「もし彼女が餘り自分の力を働かすと分つたなら、警告を與へるまでの分ぢや。皇太子の命は、夫人がおせつかいをする事によつて、縮まつて行くといふ事をな。」

「兄弟、兎も角、吾々が敵を知つて、嚴重なる監視を怠らぬといふのは、大切な事ぢや。」と首領は云つた。

「吾々は最も貴重なる人質を掴むでゐる。その間は、絶対に優者の立場にあるのぢや。ラウロウスキー

とデミードフ夫人が如何いふ方法を取るか、それは論じても何の利益も無い。故に嚴重に警戒するに留めて、何よりもタラニーエフへ使者を送る事が肝要ぢや、書面に吾々の決議を認めて、ペテルスブルグへ送り、彼方で然る可く決行して貰はう。」

八、秘密の急使

首領は卓子の書面を一枚々取り上げて、それを二つに分けた。そして、その一束を隣りの黨員に渡して、

「これは今では大した価値もなし、また事情が切迫して来ては破棄する方がいゝと思ふ。よつて一應諸君に見て戴きたい。」

やがてそれが一巡して、再び首領の手に戻ると、彼は後の燧燼へ入れて燃してしまつた。

「今度は皇太子誘拐に關する件ぢや。」さう重々しく云つて、首領は他の一束を前に置いた。

「これは、タラニーエフが皇帝に送らねばならぬ書面。またこの二枚は、附屬の小さい束と併せて、吾々の秘密に關する重要書類で、タラニーエフに保管して貰はねばならぬ品ぢや。これを持參する黨員は即ち、今夜此處に集つて居る吾々の生命と自由とを預るのみで無く、更にドウナヂェウスキー及び牢獄に在る不幸な同志の人々の最後の希望をも預つて居るのぢや。吾々の信頼が偏へに使者の一身に集まつて居る事を忘れずにゐて戴きたい。」

一同の目は、この瞬間イワーン・ヴォレンスキーの方へ向いた。彼は感激に慄きながら、進んで書面と書類とを受取つた。

イワーン・ヴォレンスキーは、嘗ては時機いた名門の血を傳ふる若者で、今はバリヴィンナ及びペテルスブルグ各宮廷信任の羅馬法王使ドルセル大司教の秘書である。然し彼の脈管に流るゝ波蘭の血は、安樂な境地に落ちついてはゐられなかつた。狂激で、熱烈で、特にその國民に通有な陰謀を好む性質は、遂に彼をこの秘密結社に投じ、日に／＼その地位と自由と、生命とを危険に臨ませて行つた。彼が外交界、社交界の中心にゐて黨員に加はつた事は、その型の人物を必要としてゐた陰謀團には、何よりも頼母しかつた。この社會こそ彼等が盡滅を期してゐる當の目標で、貴族大官の一々の消息がヴォレンスキーによつて齎される事はどれほど黨の計畫に便宜であるか分らなかつたからだ。露國皇太子が老人の侍従と僕とを連れただのみで、竊かにヴィンナに來たこと、ドミノ假裝で謝肉祭を見物して歩いてゐることを、黨の爲に發見した者もヴォレンスキーだつた。これによつて皇太子誘拐の大膽な計畫となり、實現となり、この無上の人質によつてモスコオ監獄に幽閉されてゐる黨員を救ひ出さうとするところまで進むたのである。

ヴォレンスキーは今、首領を仰ぎながら云つた。「私は黨の爲に、この重大な任務を委ねられた事を誇りとし、幸福と思ひます。誓つてこの書面と書類と報告とを、ペテルスブルグへ持參します。」

澤山の手が卓の四方からこの若い波蘭人にさし延ばされた。

「君はいつ出發する？」ミルコウィッチが訊ねた。

「二日以後に。法王使がヴィンナを發つのが明後日で、その後二十四時間は残つて、書類の始末を附けなければならぬ。然し、自由になり次第即刻出發します。」

「イワーン君が良いと思つた通りにして貰はう。」首領は云つた。

「我々黨員の中、國境を無事通過し得る者はイワーン君あるのみぢや。それに三日位は延びても他の黨員に書類を任すよりは安全ぢやからな。」

「私は、法王使館の封印のある封筒に入れて行く。私の身分はよく分つてゐるから、書類を調べる心配はありません。今から四日以後に、この書類をタラニーエフ及びベテルスブルグの委員に、確實に手渡しする。そして今夜我々が成功した吉報をも傳へます。」

「ヴォレンスキー君。」委員の一人が云つた。

「念の爲だが、吾黨の懸念は、君と、その書類とが、今から四日後に安全に目的地に着いてゐるか否かにある。それでもし便宜があつたら、タラニーエフに面會次第その旨を報告して欲しいものだが。」

「きつと、さうします。」イワーンは頷いた。

「決して御心配は要りません。書類は安全です。そして、それを手渡しするなら私は國境へ行つて、ドウナデウススキーや同志の放免されて來るのを待ち、黨から預つてゐる金を渡すつもりです。」

會議はこれで畢つた。再び煙草やパイプが燻らされて、四方山の話が賑かに交され始めた。首領はヴォレンスキーが內衣囊に大切な書類を納めた後で、靜かに何か話し合つてゐた。やがてヴォレンスキーが立ち上つた。

「では、首領及び諸君、これでお別れします。今後お目にかゝる時は、吾黨が萬事成巧して、ドウナデウススキー君其他の同志も吾黨と合體して、改めて全露西亞國民の爲に幸福の途を計る時でせう。諸君お寢みなさい！」

「お寢みなさい！」

「御無事で！」

幾つもの手が再び若者の方へ差しのべられた。老人の人々は、露西亞では、どんな一枚の紙片でも無事に通過しない事を知つてゐた。それで、ヴォレンスキーと熱心に握手しながら、胸の奥で神の加護を禱つてゐた。

話も盡きたので、一同はこれを機會に散會する事になつた。彼等の多くは、主義に於いて社會黨であつたが、人間として若かつた。そして、謝肉祭の名残りの、まだ華やかに光り輝いてゐる街々を、もう一度眺めて歩きたいと思つてゐた。

十分後に、彼の大膽なる計畫を議し合つた人々、秘密結社の歴史の中にも更に過激なる結社の若者達は、踊り狂ふ群集の渦に加はり、假面の男女と戯れを交しながら歩いてゐた。——同志の一人が

彼等の生命を握つて、世界に峻嚴を以て鳴る露西亞の警察網を潜つて、黨の秘密をベテルスブルグへ運んで行くことなどは、全々忘れたやうな顔をして。

九、戀の陥穽

露西亞皇太子ニコラス・アレキサンドロウィッチは、目を瞑つたまゝ何の疑惑も無しに、危険な罠の中へ飛び込んでしまつた。その罠は、大かたの若者が——皇子であらうが農夫であらうが、冒險心を唆られる時と處とに、巧みに仕掛けられてある。年漸く二十歳、ヴィンナへ祕かに歡樂を求めに來た皇太子が、これに陥つたのは少しも無理の無いことである。

黒天鵝絨の覆面を透して輝く女奴隷の目は、待ち受けてゐる歡樂を約束してゐた。如何にもヴィンナの女らしい媚かしさは、若者の血を掻き亂すに充分であつた。たとへ強大なる帝國の世子の上衣を纏つてゐるにもせよ、練られて二十年しかならぬ人間性が、かくも大膽な美女の戲戀に抵抗する爲には、頗る峻嚴な練磨を経なければならなかつた。

皇太子は、たゞ女の輝く、目と媚とのみに惹かれて、前後の思慮もなく辻馬車に飛乗つた。そしてオペラ劇場からホイマルクトル街に至る短い時間も、若い頭を更にも轉倒させ、胸の動悸を更にも募らせられた。と云ふのはその五分間に、ニコラスは黒天鵝絨の覆面を遂に奪ひ取つて、その下の目が思ふに違はず素晴らしい魅惑を持つてゐるのを發見したからだ。恐らく彼がもつと年少で従つて目が昏

んでゐなかつたら、軽い皮肉の微笑が女の美しく初々しい脣もとに漂つてゐるのに氣づいたらう。そしてとある表情が——儼みのやうだつた——其朗かな眸を艶に見せてゐたのに氣づいた筈である。馬車は或る玄關先に停つた。一瞥見たゞけでもひどく陰氣な寂とした印象を與へられる邸である。然しニコラスは、大きな石の階段へ、數米突先に走つて行く美しい姿を追つて、躊躇せずをどり上つた。

女の消えた厚い扉口を通り抜けると、電燈を晝のやうに點し列ねた圓頂閣のやうな廣間で、眞中の食卓には旨さうな晚餐が並べてあつた。其傍に一人の僕が黙りこくつて、不動の姿勢で立つてゐた。重い扉がばたんと背後で閉つて、襜を反した時、ニコラスは室内を見廻して、復もや美しい女奴隷の搔き失せたのに氣付いた。廣間の突當りに、扉が一處開いてゐた。ニコラスは有無無く其處へ飛び込んだ。見れば心地好げにしつらへられた寢室で、獨身者の男の爲の設備であることが直ぐ分つた。その室は、皇太子が今ぼかんとして立つてゐる扉の外は出入口は無かつた。あの人迷はせの美姫は一たい何處に滑り抜けたのだらう？ 恐らく、あの暗い石段を登つた處で何方かへ逸れたものに相違ない。ニコラスは、相手が案内を知り切つてゐるこの迷宮で、尙ほ提迷戲を續けたものか、それとも女がいづれ戻つて來るのを落着いて待つたものか、と思索してゐた。

僕は相變らず黙りこくつて、石像のやうに突立つてゐた。その一向無感覺な態度が、女奴隷を捜しあぐねて苛立つてゐる若い王子の神經を、痛いほど光らせた。

不圖、ニコラスは室の真中の食卓に目を移して、今更のやうに不思議に堪へられなくなつた。料理の品々はまるで見本でも見せるやうに豊富に並べてあるが、それが一人前しか無いことである。無論、あの女奴隷の爲に相違ない。がさうすると、あの寢室を婦人用で無いのを如何判断するか？ 彼は眉を顰めた。そして、神経を無理に殺し始めた。すると、頭腦が再び働き出して、疑惑が——今になつて漸く微かに胸を掠めて起つた。彼は石段へ出る扉口へつかくくと歩み寄つた。錠が下りてゐる！ 然し、もうそれには驚かなかつた。疑惑の呼吸は既にニコラスの頭で旋風を捲き起してゐたからだ。

「こゝは何處か？」

皇太子は、僕に尋ねて見た。すると、僕は丁寧な頭を低げてから耳と口とを指して、首を左右に振つた。

ニコラスは、その眞偽を疑つたが、復た扉を振向いて見た。それはどんな攻撃にも堪へさうな頑丈な面を擡げてゐた。彼は初めて畏に陥つたことを覺つた。——何の爲の畏かそれは未だ分らないが。數分経つた。すると扉が外側から靜かに開き始めた。響の僕はその方へ歩み寄つた。ニコラスも刹那に其處へ飛び出さうとも思つたが、巧く行かなかつた時の屈辱を思つて、踏み留つた。扉が開き切ると、二人の逞しい農夫姿の男が等しく押し黙つて突立つてゐた。一人がつかつかと入つて來ると、皇太子に、恭しく敬禮して、一通の書面を差し出した。彼は、苛立つ手でその封を切つた。

たゞ數行の文字、それだけで充分である。——彼はもう免れられぬ俘虜であること。生命は保証されるが父皇帝と交渉が済むまでは人質として留め置かれること。その間、この邸は粗末ではあるが自由に皇太子の使用に任すこと。一切の用向は響の僕が承はること。……

ニコラス・アレキサンドロウィッチは自分を「馬鹿……」と呼んでみたが、やがて暫く哲學者になる氣になつた。彼は露西亞の、何處までも見通しの、何處までも手の達く警察力を深く信じた。老臣ラウロウスキーが懸念に自分の搜索に奔走してゐることをも信じた。それで彼の民族特有の温順を持つて目前の運命に服従した。たゞ、あの美しい女奴隷の媚態が、彼の浪漫的な空想とはかけ離れた目的の爲に使はれたことを思ふと、若い胸は新たな苦痛に波立つた。

が次の三十分には、全露西亞皇帝の世子はたつた獨り——俘虜となつて——明日の累ひなどは念頭に置かずに、健かな胃腑へ、贅澤な料理を填め込んでゐた。

十、伯爵と探偵

誘拐された當の皇太子より、更にも惨めだつたのは、老侍從伯爵ラウロウスキーである。

自分が重大なる責任を持つて扈從してゐる殿下を、容易くも指の間から迂り出させてしまつた事は露西亞宮廷の歴史にも前例稀なる事件だつた。無論これが齎す刑罰も前代未聞のものであつたに相違ない。ラウロウスキーは、皇太子の掻き消えた三十分の後には、もう瞑つた目に、監獄、鑛山、雪の

シベリヤの光景を思ひ浮べてゐた。

三十分でも、皇帝の世子が護衛もなく過すとしては長い時間だつた。而も何時か二時間が過ぎ、三時間ともなつて、オペラ劇場内の人聲が漸時に薄れて来るに連れ、ラウロウスキーの胸の苦悶ははつきりと姿を作り始めた。そして、やがて謝肉祭も遂に終りを告げ、綺羅びやかな最後の一群が階下から出て行かうとしてゐた時も、老いたる露西亞人は、棧敷に蹲まつて放心したやうな目で、その男女を見詰めてゐた。彼の頭惱は名狀し難い恐怖で痲痺したやうになつてゐた。

係員が来て、ラウロウスキーに退場してくれるやうに云つた。電燈が順々に消えて行つた。老人は途方に暮れながら棧敷を立つて、外の大通路に出て行つた。案内人や給仕に、一組の女奴隷とドミノの行方を廻りくどく訊ねて見ると、こんな戯談混りの答へ許りを受け取つた。——「女奴隷なら五十人も、ドミノなら二千人も、この二三時間の間に石段を上り下りしましたからね。旦那。」

帝國ホテルへ着いてみたが、眠さうな顔をしてゐる玄關給仕は、

「あの若い紳士はまだお戻りになりません。」と答へた。

皇太子のもう一人の従者——ステーパーンは、老侍従の顔を見るなり、無言で殿下の安否を訊ねた。この男には何とか説明しなければならぬ。信用の置ける、そして力をも借りられる唯一の人物だからである。然し、さすが全部の事實を打ち明ける勇氣はなかつた。それで彼はかう答へた。

「どうも困つた事が起つた。殿下は、若い友人に連れられておいでになつたのぢや。これは秘密にし

てゐにやならん。明日になつて歸つて来られやうも知れん、或は事によると数日歸つておいでにならんかも知れん。然し、ステーパーン、絶対に秘密にしてゐにやならんぜ。」

その翌日も何の消息もなかつた。老侍従はいつも携へてゐる小さい短銃を出して、まぢく眺めてゐた。露西亞へ引擦り戻されて、大逆の名の下にイルクロークへ流されて、鞭を打たれる。それよりは一思ひに願願を打ち抜いた方がいゝ！

然し、ラウロウスキーは六十を越えてゐる。この類齢になると、永く知合ひで来た親友は、ひどく懐しいものになる、ひどく離れ難いものになる。老人は短銃を鞆に納めて、誰か相談相手になる者は無いかと考へて見た。

腕利きの探偵——警察のではない、民間の探偵なら、秘密にこの問題を解決して、あの駄々兒を捜して来るかも知れない。……まだ生きてゐれば。老人の生命は一時間も永引かす價はない。そしてその役目はいつでも短銃が承はつてくれるだらう。……

朝の新聞には、疑問の死骸が往來に横はつてゐたといふ記事も見當らなかつた。それでラウロウスキーは旅館を出て行つた。或る新聞社で訊くと、佛蘭西人のフューレー探偵が廣い經驗もあり、信頼出来る人物であると推薦された。それで早速その事務所を訪ねた。

フューレー老探偵は敏腕で聰明な人物だつた。が、ラウロウスキーはひどく口數が少かつた。探偵は直ぐ、これには何かの秘密があるかと推量した。そして、それを吐かせようと努めた。然し老人は

頑固で、どれほど探偵が問ひ詰めても、行方不明の人物の名を打ち開けずに、たゞ「位置のある若い
外國紳士です。」と、漠然とした事ばかりを述べてゐた。

「フューレー探偵はすつかり我を折つてしまつて、やがて口を開いた。」

「紳士、貴方は私の力を借りに来られたのには相違ないのですが、然し、自分の秘密を何處までも打ち明けないといふ決心を持つていらつしやるようですな。お考へになつたら分る事ですが、それでは到底御相談に乗れませんよ。」

「駄目だと仰有るので？」ラウロウスキーは絶望して云つた。その落膽が如何にも激しいので、探偵も氣の毒になつて、

「如何です。御歸りになつて、よく御熟考になつては？　そして新聞に注意して、不思議な殺人事件とか。死骸とかの記事は見落さないやうになさる事です。その間に私は、オペラ劇場と、辻馬車の停車場と、それから鐵道を、出来るだけ檢べてみませう。まあ、その方も一日二日すれば戻つておいでですよ。若い人の冒険は永いところで二日か三日でせうな。それでも土曜の午後に御訪問下さい。但し何も彼も打ち明るといふ決心を固めてです。もしその決心がお附きにならないなら、いつそ來らつしやらない事ですね。そして私は、何の手がかりも發見出来なかつたら、この事件はすつかり忘れてしまふ事にしませう。ところで申しかねますが、私の時間は貴重ですから、今日はこれでお引取り願ひます。」

かう云つてフューレーは起ち上つた。ラウロウスキーもすごとくと帽子を持つて起ち上つて老探偵に挨拶すると、やがて戸外に出ていつた。あの佛蘭西人の云つた通り、皇太子はたゞ若者らしい冒険を追つてゐるだけだと解釋される理由は充分ある。さうすれば待つて居ても損はない。萬一彼を誘つて行つた者に害意があるものとすれば、既にその害は加へられて居る。さうして三日間は執行猶豫に當るわけである。どつち途、土曜日までには此方のものだ。——老侍従はかう考へ、旅館へ歸つて行つた。

然し、たゞ黙つて過せないのは、従者のステーパーだつた。どれほど頭惱が單純にせよ、主人のニラスが不意に何處かへ立ち去つて幾日も歸らない、化粧道具一つ携へて行つてゐないと云ふ事は、いづれ疑惑を生ずるに相違なかつた。それでラウロウスキーは、更に進んで自分に都合の好いだけの事實を、ステーパーに話して置くことにした。

「昨日も云つたことぢやがな、ステーパー、殿下は御自分が不在になることを、この旅館にもまた本國へも決して洩らしてくれないと、仰有つておいでになつたのぢやよ。殿下が御氣障になさる事を、私にせよお前にせよ、兎や角云ふ譯には行かん。吾々は何でも唯々と御命令通りにして居ればいゝのぢやからな。それで、誰にせよ、殿下はと尋ねる者があつたら、獨逸麻疹にお罹りになつて、重くは無いが、當分お臥りになられてゐると答へるのぢやよ。分つたかな、現在もまた將來も、殿下の御信頼を蒙るには餘程氣が利かんと不可のぢやから。」

かう云はれて、ステーパーンは無神経な目をぼち／＼させながら、
「ニコラス・アレキサンドロウイッチ様は、私の御主人様で御座いますもの、かうせいと仰せられま
すれば、黙り切つて居ります。何も彼も御主人次第で御座いますから、御心配は要りません。」と答
へた。

「それで結構ぢや、ステーパーン。」老伯爵は安心して頷いた。

「いづれお歸りになられたら、お前が益々お役に立つ男である事を申上るとしよう。」

ラウロウスキーはこの従僕が信用の置ける事を知つてゐた。

「これで先づ次の二日は安心して過せる。その後は……神の御手にある事ぢや。」と彼は東洋流の宿
命觀で腹を据ゑ込んだ。

十一、脆き戀神像

「では陛下は、愈々明日お發ちなさるのぢやな？」

塊地利皇帝フランツ・ヨセフ一世は、名残惜しさうに法王使ドルセイ大司教に云つた。大司教は、
最後のお暇乞に參内してゐたのである。

「左様で御座います。陛下。もし緊急を要する任務で御座いませぬなら、私は好んでこの美しい樂し
い都を立ち去る氣は御座いませぬ。しかし……」と云ひかけて、大司教は太息を吐いた。諦めの表情

が、この義務の苦行者の貴族的な容貌に流れた。

「ヴィンナがそれほど陛下のお氣に入つたことは余として喜ばしい事ぢや。」

「いえ、ヴィンナはそれほどでも御座いません、陛下、勿論市その物は樂しう御座いますが。然し、
ヴィンナ人と申しましたら……」外交辭令に長けた大司教も、急にこゝで言句が詰つた。

「が、ペテルスブルグの貴婦人達を見られたら、ヴィンナも顔色無しでありませうがの。」皇帝は思
ひ深げに云つた。

大司教は答へなかつた。彼は、その聖ペテルスブルグの貴婦人の一人が、去る冬、フランツ・ヨセ
フの大きな熱し易い胸の中に、一時ではあつたが、紛れも無い位置を占めてゐた噂を、一二の好い香
の私語から聞いたのを思ひ出した。

暫く二人とも無言でゐた。皇帝も明かに苛々してゐるらしく、書卓の上の小さい置物を神經的に玩
弄しながら、二度何か云ひかけて、急に口を噤むでしまつた。

大司教は永い間の外交生活から靜かな忍耐の術を心得てゐた。それで椅子に凭りかゝつて、皇帝が
云はずには居られぬ次の言葉を待つてゐた。

「陛下は、ペテルスブルグで、余の舊友にお會ひでせうな。」皇帝は遂に廻りくどく話し出した。

「陛下がお望み遊ばす誰方にも御面會いたしませう。」大司教も婉曲に答へた。

「それは非常に御親切ぢや。どうぞ兩陛下に、余の言葉に盡されぬ友情をお傳へ下さい。それからク

セニヤ大公爵夫人と大公爵にも宜しう。あの夫妻がヴィンナへ見えた時の楽しさは忘れられませぬでな。」

大司教は目に立たぬほど微笑した。そして古い玻璃に嵌めこんだ小書像をちらりと見た。それはその樂しかつた追憶の一人の肖像に相違なかつた。大司教の目も捷かつたが、フランツ・ヨセフの目は咄嗟にそれを捉へた。そして、皇帝はやゝ興奮して言葉を次いだ。

「それから、お忘れなくマリーオノフ内親王に余の敬意をお傳へ下さい。いづれ復たヴィンナへ見えられて、謝肉祭の女王となつて下さる事であらうが。」

「御書面、又は御口上でも御座いますれば、必ずお届けいたしませう。」大司教は重ねて云つた。

「後悔なさらうぞ。」皇帝は神経的に笑ひながら云つた。

「余は正直に猊下のお葉に甘えて、鞆にも入りきらぬ嵩ばつた言傳けをお頼みしないものでもありませんので。」

「何なりと御意の儘に致します。」

皇帝はちよつとの間、大司教の外交に馴れた賢い顔を見詰めてみたが、不意に衝動に驅られたやうに、衣囊から小さい鍵を出して、書卓の大きな抽斗を開け、それから嵩張つた紙包を用心深く取り出した。そして怪訝さうな大司教の前に据ゑた。

「余の言傳けはかう云ふ形のものぢやが、これでもお傳へ願へませうかな？」皇帝は口重に云つた。

大司教は、つひぞ驚いた例しの無い人物だつた。然し、今度ばかりは、その深く据つた目をいつもよりは稍大きく見開いた。

「言傳けといふのは、實は、記念品ぢや。」皇帝は言葉を續けた。

「あの婦人にヴィンナとヴィンナ市民を忘れて貰はぬ爲の志ばかりの品でありますのぢや。」

「御婦人で？」

「左様！」

「あゝ、わかりました！ クセニア大公爵夫人で御座いますな。」と、大司教の言葉は意地悪かつた。

「いや大公爵夫人ではありませんせぬ。あの婦人は、このやうな美術品は好まれぬぢやらうからな。」

「滅多と無い品ぢや。そして、この價值を知る者で無ければ贈つたとて、無益のこととせうからな。」

「その方は誰方で御座いますか？」

「マリーオノフ内親王。」

「ほう！」

「女王は度々此美術品を讃めて居られた。あのやうな美しい婦人の趣味を満足をさすといふ事は申すに難しいものでな。猊下どうぞ此品を内親王の足下に獻じて、余よりの贈物ぢやとお傳へ下さい。」

さう云つて、皇帝は、細い注意と忍耐とで、手づから包を解き始めた。やがて幾枚もの紙の中から、如何にも優美な如何にも高貴な一對の燭臺が現はれた。大司教は感謝の餘り目を見張つた。何

處の貴婦人の私室にも、これほど素晴らしい装飾品は無いに相違ない!

その燭臺は何れも精巧な浮彫の黄金の臺の上に純金の木の幹が立つて居り、その枝々が蠟燭立になつてゐた。そして、極めて稀有なヴィンナ陶器の戀の神が臺上に兩足を踏ん張り、心持ち幹に凭れながら、大きな弓を引き絞つて、金色の矢を放たうとしてゐた。

「實に美しい、また適切な御贈物で御座いますな。」大司教は讚歎したが、軽い皮肉も交へてゐた。自分が皇帝の戀の使を承はるのである事を覺つてから、大司教は頗る氣抜けがして來た様子だつた。金燭臺は如何にも脆く且つ扱ひ難げな代物で、それに疵一つ入らせぬやうにして二千哩もの長旅をすることを思ふと、その責任の重さに大司教は身顛ひさへしさうになつた。

しかし、皇帝は、大司教の素振には少しも氣付かぬ様子で、鑑賞家らしく熱心に、像の繊細な肉付や、臺の優美な浮彫を、一々説明した末に、

「この燭臺は美術品としてかういふ立派な特色があるのぢやが、その上に、祕密の装置が施してありますのぢや。それこの燭臺の金の小枝に、附際から離れて、金の葉が一枚生えて居りませうが。これを極く軽く押し御覽なさい。」

大司教は戲謔半分、皇帝の言葉の通りにして見た。すると、その葉には小さい撥條が隠してあつて、指を觸れると同時に、幹の面にばかりと穴が穿いて、中の穴洞には天鵝絨が張つてあることが分つた。

「その祕密の撥條はこの兩方ともにあつて、燭臺の最も興味のある點となつてゐますぢや。」と、皇帝は説明を續けた。

「余には大叔母に當る不幸なマリイ・アントアネットは、この一見奇も無い美術品を用ひて、その兄弟の許へ重要な通信を送つて居りましたのぢや。」

大司教も、ド・ニューベルが或る祕密の手段により、薄命な王妃の書面を佛蘭西の國境を越えて傳達したといふ話を屢々聞いてゐた。そして、この一對の燭臺が、王妃の死後ホフブルグ寺院に傳はつてゐた話を思ひ出した。これが先ごろ露西亞の美妃の雙の眸を輝かしめ、今や戀の贈物として永久に故王妃の一族の所有から離れることゝなつた。

大司教は無言であつた。彼はこの使者を辭する口實は無いものかと思案してゐた。この羸弱な燒物の手足、否、黄金の枝や葉さへ、折れて取れる場合は幾らでも起りさうだつた。そして、半分に碎けた戀の神が葉の一枚も無い幹に凭れてゐる姿で、ペテルスブルグに着く恐ろしい光景が、まさしく目に見えるやうだつた。

「これは申上げるまでも無いが。」皇帝は興が白けて來た沈黙を破つて云つた。

「余はこの件に就ては、猥下が大事を取つて下さることを深く信頼しますのぢや。西班牙の攝政王妃も、ド・パリ伯爵夫人も、この燭臺が余の手から離れぬやうに監視する権利があると思つて居らうも知れませぬ。それに余は、自分の臣下にもこの事は一切知らせたうないので、是非に猥下に承諾して

戴きたいと思ひますのぢや。」

「陛下、それは御信用あつて大丈夫で御座います。今までとても私の用心深さはお認め下さつた筈で、少しも手落ちは御座いませぬ筈と存じます。」

大司教の態度には何處か禮を缺いた點があつた。然し、皇帝は入念に燭臺を包み始めてゐたので、些細なことには注意が及ばなかつた。彼は、自分の贈物を運ぶに全歐羅巴にも無類の賢い使者を捉まへた。それで、うっかり取消される機會を與へまいと、決心してゐたのである。

金燭臺は再び十分に包装された。皇帝は、會見を長引かすことを不利と思つた様子で、

「今度の御親切に對しては、余はいつまでも猥下を徳としませう。」と云つて、ハブスブルグ家一流の濃厚と威嚴とを混へた、對手を退引させぬ態度で、丁寧に片手を差出した。

大司教は、恭々しくその手に頭を屈めた。そして、顔には義務に殉ずる諦めの表情を浮べてゐたが、フランスツ・ヨセフの様々と思ひ惱んで來た胸には、まづ安心の印象を残して罷り出た。

數分の後、ドルセイ大司教は、馬車で歸館の途にあつた。その前の席には、大きな包物が載つてゐて、いつも無表情な彼の顔にも、蔽ひ切れぬ當惑の色が浮むであつた。

十二、運命の微笑

翌日——木曜日は、ドルセイ大司教がヴァインナを發し、自分を秘してポヘミヤの山地へ二三週間の

保養に赴く筈になつてゐた。大司教は羅馬法王レオナ三世の使命を、彼獨特の手腕を揮つて、易々とフランスツ・ヨセフ皇帝に傳へ畢せた。これで、この休暇の後には、更にも複雑な性質の外交的使命を帯びて、聖ペテルスブルグへ行く事に定つてゐた。對手は名に負ふ謎の君主——露西亞皇帝である。猥下の伎倆と知識とは十分に働かさねばならなかつた。

イワーン・ヴォレンスキーは、その日全一日忙しく働いて、既に用済みとなつた外交文書を整理したり、大司教が露都に出發するに先立つて必要な文書を準備したりしてゐた。

イワーンは波蘭人だつた。そして波蘭人であるが故に、秘密結社に加はつた。彼は其結社の理想國論を皆が皆信じてゐるやうでは無かつたが、現在は政府に對する陰謀は彼の血の有する傳統だつた。その陰謀が果して如何いふ複雑な結果になるか、露西亞に如何いふ革命が起るか、それはイワーンの大きくして苦とする所では無かつた。彼は未來を考へるに餘り若かつた。現在——それが彼の生存の唯一の要素だつた。

イワーンは、ミルコウイッチ式の極端な血腥い手段には足を踏み出しかねた。それは優柔不斷といふ爲では無かつた。堂々と叛軍を率ゐて陣頭に立つのは好むだが、刺客の短劍を取ることは恐れてゐた。つまり彼は若い夢想家の一人だつた。老人達の陰謀に加はり、現政府の倒壊は企てゝゐても決定的の行爲になると、つひたじくとなつた。

かうして、イワーンは今、結社の重大なる使命を帯びて露西亞の國境を越える折の、様々の出來事